

---

# 僕達が生きる明日へ

愁真あさぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕達が生きる明日へ

### 【Nコード】

N0592A

### 【作者名】

愁真あそぎ

### 【あらすじ】

そこは、今から何百年も先の未来。中学を卒業する浅乃木悠呂は、卒業式のその日、幼なじみのはじめと立ち入り禁止区域で不思議な少女と出会った。その不思議な少女の謎を追う。SFファンタジー？

## 序章（前書き）

時は西暦3000後の話。人類は地球を捨て他の星に住み始めた。  
まだ開発途中の禁止区域でその少女とは会う。

## 序章

翌朝、悠呂はいつものように早めに起きて機械的に昇っていく太陽を見ていた。

背後には、今の事件やら政治問題等を淡々とが読み上げる女キャスターの声がTVから聞こえていた。

そんなものには目もくれず悠呂は、ぼんやりと空を眺めていた。

すると、珍しくリビングから家政婦ロボットのミラハが自分を呼ぶ声がして振り向き、TVモニターに触れるとモニターから女キャスターの姿は消え、代わりに旧式ロボットが現れた。

「なに？」

「お早うございます。悠呂さん。はじめさんがおいでです。」

「えっ？はじめくんが？・・・分かったすぐいく。」

と言うモニターを消し、手早く制服に着替えて机の上の鍵を持ってリビングに出た。

洗面所で顔を洗い、朝食もそこそこに表に出ると見慣れた姿がこちらに背を向けて立っていた。

「はじめくん？どうしたの？こんなに早く・・・珍しいね。」

と声を掛けると、背を向けていた青髪をツンツンにして固めた少年は振り返った。

「よっ！卒業式、一緒に行こうと思ってな。」

「・・・でも、まだ早いよ？」

「…じつ実はよ。コラルロード（通学用未来型バイク）が潰れちま  
ってよ…乗せてもらおうかなあ…って…。」

と言う彼に悠呂は大仰に呆れた顔を見せた。

「…それ、本気で言ってるの？2人乗りは禁止って校則で決まっ  
てるでしょ。」

押し問答の末に1時間半後、2人ははじめの運転で卒業式会場に着  
き担任にこっぴどく叱られ、罰として卒業式後の片付けをさせられ  
た。

## 序章（後書き）

えゝ：全く素人で乱文になりつつあります。SFファンタジーに仕上げるつもりですが：頑張りますんで宜しく願います。

## 第一章

すっかり、暮れてしまった卒業式会場を2人は出た。

「…はじめくんのせいだよ。よりによって卒業式の日到校則違反だなんて…。」

「うつせえな。」

そう答えるはじめをきくと睨み、一人ツカツカと駐輪場へ向かうとはじめもついてきた。

それにあからさまにしかめ面で振り返ると、はじめは照れくさそうに頭を掻いて

「もう、卒業したんだし…帰りは2ケツでもいいだろ？」

今度は悠呂の運転で2人は暗くなった帰り道を走っていた。

「もう、はじめくんのゴタゴタには巻き込まれたくないよ！」

「っんだよ！仕方ねえだろ！コラルロッドぶっ壊れちゃったんだから。」

そのはじめの答えにムツとして、悠呂はコラルロッドを宙に止め、車体を乱暴に揺らした。

「うわっ！危ないっ危ないって！止める！止めるって！落んだろっ！」

「もう嫌だよ！降りてよお〜！」

「はぁ？こんなとこに置き去りかよ？ってわわっ危ないって！ぬあ  
っ！」

と車体から落ち、尻餅をついた。

その音に悠呂は振り返ると乗ってるはずのはじめがないことに気  
づき慌てて車体を地に降ろして、自分も降りた。

「だっ大丈夫？はじめくん！」

「イテテっ…大丈夫ってお前がやったんだろ？」

「じっごめん…。」

と言う悠呂の肩越しに白い何かが見えた。

「ん？…おいっ向こうに人がいるぜ。」

「えっ？」

と振り返ると暗闇の中に何か白いものがぼおと浮かび上がっている。

「なんか、おかしくねえか？あそこは立ち入り禁止区域だぞ？」

というはじめの声を後ろに聞きながら悠呂は、立ち入り禁止区域へ  
向かう白い人影をじっと見ていた。



## 第一章（後書き）

なかなか展開を発展させるのが難しいです。でも、頑張ります!!

## 第二章

悠呂は、昨夜のあの人影が気になって一睡もできなかった。

確かあそこは、まだ開発途中の土地でしかも立ち入り禁止区域だ。関係者以外は誰もあそこへは近づかないはず。

それにと悠呂は思う。

あのシルエットはどう見ても、男性では有り得なかった。

何故あんな所に、あんな時間に女性とおぼしき人影が…。

と、寝返りを打った時だった。

また、リビングから家政婦ロボットのミラハが呼んでいる。

睡眠を取っていない体は重かった。

ゆっくりベッドから起き上がると、重い足取りでリビングに向かった。

「ミラハ、何？どうかしたの？」

「お休みのところ起こしてすみません。はじめさんがおいでです。」

9

「えっ」

と言うとリビングの時計に目をやった。時計は午前6時を少し過ぎたところだった。

「…分かった。着替えるから中に入れてもらって。」

と言い残すとノロノロと部屋に戻って行った。

部屋で着替えて再びリビングに戻ると、あの見慣れたツンツン青頭が不慣れにソファーに腰掛けていた。

「お早う、はじめくん。どうかしたの？こんな朝早く…。」

と声を掛けると弾かれたように顔を上げ、軽く手を上げて挨拶した。

「よっ…。」

その表情は固い。

悠呂は首を傾げながら真正面のソファーに腰を掛けると、ミラハが

スっとお茶を出してくれた。

それに口をつけると突然、切り出してきた。

「悠呂！もう一回あの場所に行ってみねえか？」

「えっ？」

「俺、あれが気になって寝れなくてよお。なんか、変だったじゃん…。」

口に含まのお茶をコクンと飲み込んで悠呂は、カップを置いた。

「そうだね…僕も…気になってたんだ。」

## 第二章（後書き）

まだまだいきますよお

### 第三章

悠呂のコラルロットで2人は、昨夜のあの場所を目指した。着いたそこは、広い原っぱでその先にフェンスがあり

「立ち入り禁止区域」

と大きな字で看板があった。

昨夜は暗かったたのでこんな場所だったのかと2人はただ、辺りを見回していた。

はじめの提案でフェンス先まで行き、中を覗いてみた。

「ん〜中も対して変わった所はねえな。」

「そうだね…向こうも原っぱだ…。」

と2人が会話を交わした直後に

「いてっ！」

「!!!!!!」

誰かに足を蹴られたのだ。

何事かと振り向いてみると、そこには幼稚園位の年頃の男の子が2人、悠呂達を睨みつけていた。

「なっ！いきなり何しやがんだ！いてえじゃねえか！」

とはじめが怒鳴ると男の子達は身じろぎもせず

「うるさいっ！おまえ等こそ何しに来たんだ！」

と言い放ったのだ。

それに悠呂が驚き、はじめと目を見合わせると男の子達の視線に合わせて屈んだ。

「君達、お母さんは？」

と話し掛けると男の子達はフイッと無視して何処かへ走って行った。その後ろ姿を見送った先に、一人の少女が立っていた。年の頃は自分達と同じくらいだ。

その足元にあの男の子達はしがみついている。それに気付いて悠呂はゆっくり立ち上がった。

### 第三章（後書き）

いやあくなかなか難しいです。でも、この後どうなんの？続きが早く知りたいっていう風にしたいと思っています。

## 第四章

柔らかい風に、その少女の白銀の長い髪がサラサラとそよいだ。

それに悠呂が見入っていると、しきりにフェンスを覗いていたはじめが振り返り声を掛けた。

「おいっ悠呂、どうした？」

「えっ…ああ。あれ…。」

と悠呂は彼女が立つ場所を指差した。それにはじめは目を向けてみた。

その彼女は、あの男の子達を従えてこちらに真っ直ぐ向かってくる。その様子に2人はキョトンとしてみると、目の前で立ち止まった。

「あなた達！ここへ何しにきたの！」

といきなり怒鳴られた。

「あっ？何って…？つかあんたこそ何だよ？」

そういうはじめに彼女は、あの男の子達と同様に睨みつけてくる。

「あのっ…あなたはここの関係者か何かですか？」

と聞くとはそれには何も答えず

「早くここから立ち去りなさい！」

と一方的に言い放った。それに、はじめはカチンときたのか

「はあ？いきなり何だよ！」

「はじめくん、落ち着いて…。」



となだめて悠呂は彼女に向き直った。

「確かに…僕達は立ち入り禁止区域に来てしまつて悪い事だと思つよ…。でも、君の注意の仕方はないんじゃないか？」

と言つと彼女は悠呂を見ていきなり突き飛ばした。

それに、はじめはびっくりしていると言つと彼女は

「ここにはもう絶対二度と来ないで！さっさと帰つて！」

と凄じ剣幕で言つた。

それに尻餅をついた悠呂は目を丸くしていた。

#### 第四章（後書き）

……。うん…乱文気味だ。読みずらくてごめんなさい！！

## 第五章

「しっかし…なんだったんだ？あの凶暴女！おっかねえったらありやしねえ！」

怒り散らすはじめをよそに悠呂は生返事を返した。

あれから悠呂達は、渋々あの場所を後にしのだ。

今ははじめの運転でコラルロッドの後部座席に乗っている。

「ねえ…はじめくん…明日もあそこへ行ってみようよ。」

と何か考えた風な表情をしていた悠呂は切り出した。

「はっ？…別にいいけど、どうした？いつものお前ならもう嫌だよ！巻き込まれるのはごめんだあ〜て言うのによ。」

「…うん。」

相変わらず生返事が返るので、

「…まっ俺もあのまんまじゃ納得いかねえし、付き合っっちゃっか。」

と正面を向いた。

コラルロッドは、はじめの家の近くの曲がり角にさしかかっていた。悠呂は黙ってその流れていく街並みを見ていた。

不意に誰かに名前を呼ばれて我に返ると、コラルロッドは停止していて、自分の目の前で腰に手を当てたはじめが立っていた。

「おいっ…大丈夫かよ？突き飛ばされた時、頭でも打ったか？」

「えっ…大丈夫だよ。」

と悠呂は運転席に移動し、コラルロッドの起動スイッチを押してアクセスを開けた。

はじめは何か言いたげだったがそれには触れず

「おいつ明日はどうすんだよ。」

と聞いてきた。一瞬なんの事かと考えたがすぐにわかり

「今度は僕が迎えにくる。明日の昼前、家を出る前に一度連絡を入れるよ。」

「わかった。んじゃまた明日な。」

とはじめは背を向けて家の中に入って行った。

## 第五章（後書き）

なかなか書き出せませんでした汗。でも、読者人数が少しずつ増えていくのが嬉しい愁真です照

## 第六章

家に帰った悠呂は、コラルロッドを駐輪場にしまつと何か思いふけた様子で中に入った。

「お帰りなさい。悠呂さん。…はれ？服が汚れてますが？どうなさいました？」

玄関に入るなり、ミラハが声を掛けてきた。

「…なんでもないよ。シャワー浴びてくる。」

とそのまま真つ直ぐにシャワールームに向かった。

ミラハはそんな悠呂を黙って見送った。

脱衣所で服を脱ぐとすぐに浴室に入り、マンホールのような円盤の上に立つと悠呂の体がフワリと浮いて薄い膜のようなものが円盤の周りを囲った。

すると、何処からか水蒸気のようなものが出てきて悠呂の体を洗い流し始めた。

それに合わせて体がゆっくりフワフワと回転し始める。

それに身をまかせ、悠呂は今日のあの彼女の顔を思い出していた。

(…何故。…あそこに何かあるんだろうか？それとも、はじめくんの言つ通りただ危ないから…。)

帰り際、はじめとこんな話をした。

「…はじめくん。今の、どう思う？」

「ん？どうって？」

「さっきの彼女達…。」

「ああ〜あのおつかねえ女なっ！」

「…変…だと思わない？」

「あっ？変って何が？」

「あそこに近寄るなって言ってた。」

「ああ。ただのお節介やきなんじゃねえの？危ないから近寄るなあってやつ。」

「それ…だけなのかなあ。」

「他に何があんだよ？」

「わかんないけど…。」

「……考え過ぎなんだよおまえは！」

悠呂は、まだこちらを見ている彼女達に目をしばらくやっ

「そう…なのかな…。」

「そうそう！ほらっ！俺が運転してやつから早く乗れよっ！」

と言われるがまま悠呂は黙ってはじめ運転のコラルロッドの後ろに乗った。

何か考えてる風の悠呂の顔をしばらくみやってすぐにアクセルを開けた。

悠呂は、シャワーを終えゆっくり目を開けた。

（あそこには何かある…誰も知られていない何かがある…。）



## 第六章（後書き）

いやあ…なかなかどうして書き出せなくてこんなに遅くなっちゃいました。皆さま、どうか読んで下さいます。

## 第七章

物事を考えている内に朝になってしまった。

天井を眺めていた悠呂の上で、目覚まし代わりにタイマーをセットしていたテレビが時刻になって、今朝のニュースを告げ始めた。

それに、重く粘る体を起こして消し、ベッドの傍らに腰を降ろして軽く息を吐いた。

そして、しばらくだるそうに俯くと、意を決したように立ち上がり、寝着のままダイニングへ向かった。

ダイニングに出ると、家政婦ロボットのミラハがもうキッチンの側に立っていた。

「おはよう。ミラハ。」

悠呂の声にミラハは振り向いて、驚いたように声を掛けてきた。

(実際は表情など読み取れないのだが)

「悠呂さん！今朝は随分とお早いですね？」

洗面所へ向かいながら、悠呂は答える。

「うん……今日もはじめくんと約束。」

と洗面所に消えていく。それにミラハが新しいタオルを持ってついできた。

「そうですか…朝食は如何なさいます？」

ミラハから渡されたタオルで顔を拭きながら、

「うん…あんまり食欲ないんだけど…一応軽く食べとく。」

「承知しました。」

と言ってミラハは先にキッチンに戻って行った。

悠呂は、タオルを置くと自分の部屋に戻り、服に着替えて再びダイニングに戻って来た。

そして、キッチンに行かずその側のテレビ電話の画面に触れ、はじめのフルネームを呼んだ。

すると、感知したのか電話の呼び出し音が鳴る。

「はい」

と画面に映ったのは、はじめの母親だった。

「あらあ　悠呂くん、おはよう。」

「おはようございます。おばさん。」

「はじめね？ちょっと待っててね。」

と言うと保留の美しい音楽と

「しばらくお待ち下さい。」

の画面が現れた。数秒後、はじめが画面に現れた。

「おっす。」

「おはよう。起きてた？」

「いやあ…実はさっき起きた。」

「そう。僕これから朝食食べてからそっち行くから、うんと30分ごろにそっち行く。」

「OK！んじやつ待ってるぜ。じゃあな。」

と画面は途切れた。

## 第七章（後書き）

未熟者ですが…最後までお付き合い願えれば…。ご意見感想もお待ちしております。

## 第八章

悠呂は、朝食を終えると自分の部屋に戻り、机の上の鍵を持つと早々に玄関に向かった。

そして、駐輪場への行くと、いつもの様にコラルロッドに跨った。エネルギータンクを調べ、減っていないのを確認するとアクセルを開け、そのまま真っ直ぐ飛び出し一路、はじめの家に向かった。

はじめの自宅前に着くと、当の本人はもう準備を整えて家の前で待っていた。

「ごめん、待った？」

「いやっ全然。」

悠呂は、はじめの周りをキョロキョロ見てから

「…まだ、直ってないの？はじめくんのコラルロッド。」

「まあな。昨日、やっと修理だしだからな。まっ…高校の入学式までには直ってるだろ。」

と言うと、勝手に後ろに跨った。それに何も言わず悠呂は発進の準備をする。

「行くよ。」

と後ろに言う

「おう。いつでも行ってくれ。」

と答えると一気にアクセルを開け、禁止区域へ向かった。

今日の天気は穏やかだった。

顔に撫でる風はしかし、ヒンヤリとはしていたが暖かに降り注ぐ太

陽が、それを打ち消してくれるようだった。

「なあ？」

と声を掛けたのは、後ろからだった。

「お前、なんであそこがそんなに気になるわけ？まっ…俺も気にならない分けじゃないが…。」

その質問に、少し間があった。

「…僕も…良くわからない。ただ、漠然と感じたんだ。」

「感じた？…何を？」

「…わからない。」

「はあ？わかんねえのかよ？」

「…わからないから、また行ってみたいんだ。」

と静かに答える悠呂の背中を見て、はじめは軽く息を吐いた。

「へいへい。あんまし興味を抱かない悠呂ちゃんが珍しいこと…とことん付き合いますよお。」

と茶化してみたが、いつものように食いついて来ないので、不思議に思った。

## 第八章（後書き）

とりあえず読んでいただいて、どこがどう面白いとか、面白くないとかご指摘でもかまいませんし、ただの感想でも構いません。メッセーヂお待ちしております

## 第九章

禁止区域に到着した悠呂達は、誰にも気づかれぬように木陰にコラルロッドを止め、そこから様子を見る事にした。

「昨日となんら変わりはないな。相変わらず、向こうの景色も原っぱだな。」

「うん。」

と二人は会話を交わすとそれぞれに視線を向けてみる。

何も変わりがないと視線を戻そうとした悠呂に、はじめは慌てたように声を掛けてきた。

「おいっ！悠呂！あそこっ…あそこ見て見ろよ！」

とはじめが指差す方向に目を向けてみる。

「警備兵だ…。」

とはじめは声をひそめて言うと、悠呂は無言で頷いた。

「なんでこんなところに警備兵がいた？」

「禁止区域だからじゃないかなあ？」

「禁止区域だからって…じゃあ、何で昨日はいなかったんだよ？」

「…それもそうだね。」

と二人は固唾を飲むように警備兵のいるフェンスを無言で見つめた。

「悠呂…。」

「ん？」



「お前の予感…的中してつかもな。」

と話すはじめの生真面目な横顔を見て悠呂は、強く頷いた。

「んっ？警備兵が動いたぞ？」

と言うはじめの言葉に、悠呂は視線を警備兵に戻した。

そこには姿勢正しく敬礼をした警備兵が、誰かを迎えているようにも見える。

警備兵が向ける視線の先を辿ると、昨日の少女が一人の老人の車椅子を押している姿が見えた。

「おいっ！あれって…。」

と言いかけたはじめを遮るように

「しっ…静かに。」

と制した。

その少女は、警備兵と二言、三言話を交わすと警備兵の手で開られたフェンスの向こうに歩いて行った。

「あの子…昨日、僕を突き飛ばした子だったね。」

「おう…しっかし、あのフェンスの向こうに何があんだ？あんなじいさん入れて…。」

「…うん。気になるね。」

「悠呂…どうする？」

少し考えて

「もうしばらく様子を見るよ……動くにしても、あの警備兵がいた

んじゃ。」

といつになく真剣な面差しの悠呂の顔に半ば、驚いてははじめは頷いた。

「しかし悠呂、俺達だけで動くのは危なかねえか？」

「…そうだね。でも、調べてみて対した事じゃなかったら？」

「おまえ…っほっ本気かよ？」

と言ったはじめを悠呂は、真っ直ぐ見た。

## 第九章（後書き）

前置き長かったので、これからガンガン行こうと思っております。引き続きご意見、ご感想お待ちしております。どうか宜しくお願いします。

## 第10章

夕方までそこで粘った悠呂とはじめは、警備兵の様子を窺っていた。「はあくまで、ここにいんのかよあく俺腹へつまったよお。」

と木にもたれてボヤク、はじめをよそに悠呂は警備兵の動きに注目していた。

あれから、人らしい人の出入りは何か運んできたらしい配達員と、あの少女と車椅子の老人だけだった。

故に、さつきから立ちっぱなしの警備兵は暇そうにあくびをしている。

「ねえ。はじめくん、どうして今更警備兵なんて置いたと思う？」

と木にだるそうにもたれるはじめに問うた。

聞かれた本人は

「ほえ？」

と間抜けな声を出し、悠呂と違う方から顔を出し警備兵を見て話した。

「そりゃ…俺たちが覗いてたからじゃねえのか？」

「それだけで？」

「あのなあ…俺に聞かれてもよくわかんねえよ！」

「しっ！誰かこっちにくる！」

どうやら、警備兵の交代かなんかで休憩を取るらしいあの門番が人と話を交わしながら、こちらに向かってくる。

「おいっ！どうすんだよっ！」

と小声でまくし立てるはじめを押さえて、

「しっ！隠れて！」

とその木に二人、身を隠した。

その背の反対側に警備兵はやってきて腰を降ろした。

「ふう〜疲れた。よっころ」

悠呂たちはお互い同士に口を押さえて、身を縮めて音をたてないように細心の注意をした。

すると、その警備兵は皮袋の中から何か取り出し、草の上に広げて食事を始めた。

二人はその匂いで、すぐに弁当だとわかると、目が血走り始めた。

二人は朝から何も食べていないのだ。

すると、はじめの腹から空腹を告げる音が不意になった。

「ん？」

と兵士はその音に気づき、辺りをキョロキョロし始めた。

慌てた二人は、片手で相手の口、もう片手で相手の腹を互いに押さえた。

「誰だ！誰かそこにいるのか！」

と声が掛かった。

## 第10章（後書き）

かなり間があいてしまいました笑読まれた方はよろしければいい  
んで、感想をメッセージの方へ寄せていたたければ幸いです

## 第十一章

悠呂を見つけた警備兵は

「なんだ？お前は？ここで何をしている？」

と厳しい口調で問うてきた。

自分に気を取られている警備兵から、隠すように悠呂ははじめを背に隠した。

「えっ…えっと、この辺で落とし物しちゃって…」

「なに？落とし物だと？」

「はいっ…その。」

と会話の隙に悠呂は、後ろ手にはじめに

「ここから離れる」と合図した。

はじめはそれを見て、こっそり警備兵の死角へ回りその場を離れた。

はじめがその場を離れた事を確認した悠呂は、軽い溜め息をつく。警備兵は不審そうに悠呂の後ろに目をやった。

「なんだ？後ろに何かあるのか？」

「あっ…そのっ別に何もありません。」

「怪しいな。そこをどいてみる！」

「やっやだなあ〜何もありませんよ。ほらっ。」

と警備兵に後ろを見せた。

それを確認する為にこちらに来た警備兵は、辺りを検分すると、ピタリと動きを止めた。

それに冷や汗をかきながら様子を窺う悠呂に警備兵は冷たい眼光で、こちらに向くと、

「あそこにいるのは友達か？」

と指を差したので、そちらに視線を移すとはじめがコラルロッドの座席に座りながらこちらを見ている姿を見つけた。

「そっそうです。一緒についてきてもらっただんです。」

と答えるとまたも不審そうにこちらをじっと見ている。

「あっ…あのっ。」

と悠呂が言いかけたのを遮って警備兵は、またも厳しい口調で問うてきた。



「で？何を落としたんだ？」

「えっ？」

「え？じゃないだろ！探しておいてやる！明日にでも取りに来い。」

「あのっ…えっと鍵です。」

「ん、鍵だな？わかった。今日のところは帰りなさい。」

と警備兵は無理やり、悠呂を後ろに向かせ背を押した。

「あっあのっ！」

と抵抗しながら悠呂は、警備兵に振り向いた。

「質問なんですけど、ここは立ち入り禁止区域ですよね？」

警備兵は、悠呂を後ろに再び向かせながら

「ああ。そつだ！早く帰りましたまえ！」

と押し戻してくる。それに踏ん張りながら悠呂は更に質問をした。

「どつして、おじさん達がいるんです？」

「わからん奴だなあ、禁止区域だからだ！さっ早く行け！」

「ちょっと待って！だっておじさん達、ここ2・3日ぐらいからでしよ？警備してるの。」

と聞くと明らかに表情が変わり、押し戻す力も強くなった。

「さっ！早く帰りなさい！」

と突き飛ばされた。

悠呂は今度は、大人しくそれに従い立ち上がるとはじめの方に歩きだした。

（ここには、何かある。）

悠呂はそう確信した。

## 第十一章（後書き）

なんだか来ない間に、『小説評価』なる機能がついててびっくりしたのと、かなりのプレッシャーでガクガクの愁真です。評価の程、よろしくお願い致します。 m ( ) ( ) m

## 第十二章

振り返り、振り返りその場所から離れた。

警備兵はこちらをじっと腕組みしながら見ている。

はじめの元に着くと、すぐさま声が掛った。

「だっ大丈夫か？ひっでえおっさんだなあ。」

「うん。」

と視線は警備兵に向けたまま悠呂は相づちをうった。

「…悠呂、どうすんだ？これから。」

「……図書館に行く。」

「はあ？」

そう答えると悠呂は座席に着き、アクセルを開けた。

慌ててはじめは、後ろに飛び乗るとすぐさま、悠呂はコラルロッドを発進させた。

「おいっ！図書館なんて何しに行くんだよ？」

「調べもの…。」

「はあ？何を調べんだよ？」

「歴史！」

「なあにい？そんなもん調べてどうすんだよ？いきなりお勉強会で

もすんのかよ？」

と聞くといきなり、悠呂はクスクスと笑った。

「何笑ってんだよ！」

「フフフッ…ごめん。違うよ。周りから固めるんだ。」

と答える悠呂の意を諷りかねてはじめは首を傾げた。

「あの警備兵に質問してみたんだ。どうして警備をしてるのかって…。」

「そりゃ…禁止区域だからって答えた…だろ？」

「うん。そう答えたよ。でも、僕はこう言った『おじさん達が、警備を始めたのは2、3日前からでしょ？』って。」

「うえっ！？お前っそれっ聞いちゃったのかよ？」

「うん。そしたら、明らかに警備兵の顔つきが変わった…。」

「それって…。」

「うん。あそこには、何かある。」

「それでどうやって、図書館に結びつくんだよ？」

「……歴史から調べて、何か解るんじゃないかと思って…30年以上も放置されたままの禁止区域の謎。」

そういうと、悠呂は車体を右に傾けた。

「ってか。不審に思ったのは2、3日前だろ？それまでは気にも止めなかったじゃん。」

「……僕はずっと気になってたよ……中学入学当時からね……あの時に比べたら最近の禁止区域は何か変なんだよ。」

と悠呂はコラルロッドを止めて、前の物を見上げた。

その先にはドーム型の建物がそびえ立っている。手前の門構えには『国立図書館』の文字。

「まっ……とことん付き合っっちゃったから付き合いますよ」

とはじめは後ろから降りると、悠呂も降りてコラルロッドを押しながら歩き門の中へ入った。

その後ろを、はじめは着いていく。

## 第十二章（後書き）

（< | >）ひゃく汗どうしたら評価していただけるのかチンプンカ  
ンブンな愁真です笑素人同然なんで、評価したい無理なのかも…と  
落ち込んでおります苦笑。

## 第十三章

国立図書館の建物に入った、悠呂は入り口の受付ロボットに手を乗せ、指紋照合を済ませた。

何もわからなく、キヨロキヨロしているはじめにも指紋照合を勧めた。

それが終わると、沢山並ぶパソコンの中で奥の隅の二つ、席のあいだ所に腰を掛けた。

「国立図書館つてはじめて入ったぜ…すげえのな。」

「うん。僕はよく父さんときたよ。でも、最近は久しぶりかな」というと、悠呂は手慣れた様子でパソコン画面を開いた。

それを見たはじめは、正面を向き自分の席のパソコンを同じように開いた。

「で？悠呂、何を調べるんだ？」

「うん…まずは、僕達が通っていた『D-3ブロック』にある立ち入り禁止区域についての歴史から…かな。」

と言うとジャンル、検索ワードを素早く入力していく。

「くはっ…こんだけ絞っても、30件以上あるぜ？」

「うん…しらみ潰しに見ていこう。」

「ぐえ…了解。」

二人は、色々ある資料の中を手分けして調べていく。

しかし、めぼしい資料がなく愕然とした。

「はあ…立ち入り禁止区域はまだ開発されていない土地であり…なんつだよくそっ！また、これかよ。悠呂お…なんか対した資料がないから、もう諦めようぜ！」

「うん…もちよっと。」

と悠呂の目と指はせわしく動いている。

はじめは、検索ワードを更に政治と打ち、どうせ関係ないだろうとボタンを押した。すると、出てきた画面に目を見張った。



「おっ…おい！悠呂、こっち来てみるよ！」  
と手招きする手は宙をわなわなしている。

「どうしたの？」  
と覗き込んだはじめの画面には、あの禁止区域で見た車椅子の老人の写真が掲載されたページだった。

悠呂は、思わず画面にカジリついた。

「こっこれは…あそこで見た老人…。」  
と呟くと悠呂は、画面をゆっくりスライドしていく。

そこに、書かれた内容はプロフィールとあの禁止区域を買ったとされる博士だと紹介されていた。

「『アスラビ・尾崎 修造』……医療に携わり、多くのクローン研究の成果で人々を救い社会に大きく貢献した……。クローン……？」  
と悠呂はスライドする手を止めた。

「どうした？悠呂。」  
はじめの声には反応せず、悠呂はその記事を印刷のアイコンにクリックした。

しかし、画面に印刷拒否のロックがかけられていた。

「ちっ」  
と舌打ちすると悠呂は、ジャケットのポケットから小型PCを取り出しコピーし始めた。それにはじめは驚き

「おっ…おい！」

## 第十三章（後書き）

煮詰まりに煮詰まりにました  
これから、面白くしていこうかと思  
ってますって遅い？笑

## 第十四章

小型PCで、持ち出し禁止の書物をコピーし始めた悠呂に、はじめは驚きを隠せなかった。

「おっ…おい！やばいって…。」

「しっ！大丈夫 始め君は周りを見てて。」

「周りを見とけて…。」

とはじめは、辺りを見回すと丁度、不正をしないか巡回しているロボットが見えた。

「おっ…おい！巡回ロボットがこっち来てるぞ…やばいって…！」

「うん…もうちょっと…。」

と悠呂の手元の小型PCの画面はメモリー登録完了まで後わずかを表していた。

そわそわしている、はじめに巡回ロボットの目が止まった。

「おっ…おい…なんかあのロボット、こっち見てるぞ…！」

「わかってるよ…！あとちょっとなんだ…っていうか、はじめ君の行動が不審に見えるんだよ。もっと普通に…してよ…。」

巡回ロボットは、徐々にこちらに近づいて来ていた。

ギリギリの所で小型PCはメモリー登録完了を示し、悠呂はそれを胸ポケットに隠し、書物画面を素早くコミックに差し替えた。

「オイ！キミタチ、ナニヲシテル。」

と聞かれ、はじめはPC画面を見た。

するとコミックに差し替えられていたので、笑顔を向け。

「いえ…何も、これが面白いので続きはないかなって話してました。」

と答えるはじめの後ろで悠呂は素早くさっきのメモリーを外し、違うメモリーを差し込んだ。

そのコソコソした様子を巡回ロボットは不審に思い、悠呂に話し掛けた。

「ソコノキミ、ナニヲシテイルンダネ？ソレヲ　ワタシニ　ミセナ  
サイ。」

「えっ…これ…ですか？」

と悠呂が躊躇いを見せたので何も知らないはじめは、慌ててフォロ  
ーに回る。

「いやっ…こいつ、高校上がるから勉強用にメモ帳持ってきただけ  
っすからあ。」

と言うはじめのフォローも虚しく、悠呂は素直に小型PCを巡回ロ  
ボットに見せた。

それを手にしたロボットは、暫く検分するとそのまま悠呂に返して  
その場を去って行った。

それを見送った悠呂は、手慣れたように自分の席のPCを消し、は  
じめに出るよう促した。

何がなんだか、わからないはじめは同じようにPCを消し悠呂の後  
を追って図書館を出た。

駐輪場でコラルロッドを出す悠呂に、はじめは問いかけた。

「おい…どうなってんだよ？」

「ああ…あれね。」

と言って悠呂は、コラルロッドにゆっくり跨り、後ろポケットから  
小さなメモリーカードリッジをはじめに見せた。

「…て、もしかして…。」

「そっ　いつものメモリーとすり替えただけ　さっ乗って。」

## 第十四章（後書き）

続きをばせかせかと、書いてみました　しかし、また煮詰まるやも  
∴ f ^ | ^ ; その時はご勘弁を

## 第十五章

国立図書館を後にし、自宅についた二人は、すぐさま悠呂の部屋に入り小型PCのメモリーを自宅のPCにコピーした。

「なあ…悠呂、あの爺さん…すげえ偉い人間だったんだな。」

と言うはじめを横目に悠呂は再び、コピーした画面を見ていた。

「おいっ…聞いてんのかよ？」

と悠呂のベッドに腰掛けると悠呂は、背中を向けたまま

「…うん。聞いているよ。」

と生返事を返した。そしてすぐに頬杖をついて考え込み始める。

「どうしたんだよ？」

「うん…なんか…見たことあるんだよね…『アスラビ・尾崎 修造』」

「」

「なにで？」

「それが…思い出せないんだよね…うーん。」

と再び考え込み始めた悠呂の背中に溜め息をついて、はじめは枕元に積んであるメモリーファイルを手にとると、何個か床に落としてしまった。

「やべっ！」

と慌てて拾うと、いきなり悠呂は立ち上がり

「わかった！…思い出した！父さんの書斎だ！！」

といきなり部屋を出て行ったので、はじめは慌ててメモリーファイルを置き後について行った。

「おいっ！いきなり出ていくなよ！」

と書斎に着くと、悠呂は何やらガサガサと探しものをしていた。

それに呆れたかのように肩をすくめると、はじめも書斎の中に足を踏み入れた。

部屋の中は古い、メモリーファイルが山のように積んであった。それを見上げながらはじめは

「おいっ…いいのかよっ勝手に…。」

と聞くと悠呂は探しものをしながら

「うん…まあ怒られちゃうかもね…でも、父さんも母さんも仕事でかれこれ4、5年近く帰ってきてないし…。」

「…そうか、相変わらず新屋開拓の仕事は進んでないのかもな…。」  
とはじめが埃にまみれた一つのメモリーファイルに触れた時

「あつた…これだ…。」

と埃まみれのメモリーファイルを手にしていた。

「なんだよ…それ？」

「うん…。」

というと父親の書斎机の上のPCを立ち上げ、そのメモリーファイルを起動させた。

「何だ？」

とはじめが覗き込むとそこには、一つの論文らしき画面が現れていた。

「ん？……なんだよこれ？」

と聞くと悠呂は、一番上の文字をクリックし拡大した。そこにはあの老人の名があつた。

「アスラビ……てっおい…これは…。」

「そう…アスラビ・尾崎　修造が出した論文が掲載された一部だ

よ…。」

と二人は、その下をスクロールし読んでゆく……そして、ある事実  
に目を見開いた。

「なっ……なんだよこれ……こんな事が……あつていいのかよ……。」

「…うん。」

## 第十五章（後書き）

f ^ | ^ ; やつとの思いで書きました：まだまだ、甘ちゃんな私  
であります：なんとか、面白くしようと試行錯誤しています。こ  
れからも微々たる力ではありますが頑張って書きますので応援よろ  
しくお願いします…



## 第十六章

……ホタルのように、ぼくと光る物の中を悲しそうな表情でじつと見つめる少女がいた。

周りは静かで薄暗い、彼女のしているものはなんなのかはよくは見えなかった。

「……ら。……いら。」

と声がして彼女は、はっと我に返った。

「せいら…星羅…どこだい？」

老人と思しき声が奥から聞こえてくる。彼女は、静かにその場を後にした。

鉄の扉をそつと開けると車椅子のまま机に向かう老人の背中があった。

「お呼びでしょうか？お父様。」

と彼女はその背中に話しかけると、老人はこちらに顔を向けた。

「おお…来てくれたか。行き詰まってしまった…少し外の空気を吸いたいんだが…。」

と話す老人は、真っ白い髭をたくわえ微笑ましく目を細めている。彼女がそこに居てくれる事が心底嬉しいようだ。

一方、『星羅』と呼ばれた彼女は、こちらに顔を向ける老人の机の上に飾られている写真立てを見て少し顔を曇らせ、老人から目を反らした。

「ん？どうした？星羅。」

と心配そうに聞く老人に

「いえ…。」

と答えると静かに、彼に近づいて車椅子を引いた。

薄暗く長い廊下を星羅は、黙って出口に向け車椅子を押している  
と、老人が話し掛けてきた。

「…星羅…最近、子供達はどんな様子だね？」

「…みんな、元気ですわ。」

「そうか……。」

と言うと老人は、右手をすつと挙げたので星羅は車椅子を止めた。

「お父様？」

「いやっ…いい。進んでくれ。」

と言われたので星羅は再び、車椅子を押した。

出口が見えてきた辺りで老人は彼女を振り返り

「星羅…なにかあったのか？」

と聞いてきたので星羅は、驚きを見せると顔を少し曇らせ俯いた。

すると外側から警備兵が鉄の大きな扉を開けたのでまばゆい光が襲

ってきた。それに目を細め、車椅子を外へ押した。

外は晴天だが、心地よい風が吹いていた。星羅は車椅子を押して、

敷地を歩いた。

「なにか…あったのだな…誰かに何か言われたのか？」

と聞かれ、星羅は精一杯明るい声で

「いいえ、お父様。」

と答える。

「じゃあ…なぜ、お前はそんな悲しそうな顔をする？」

と言われ、星羅は足を止めた。心地よい風が、彼女の白銀の長い髪

をなびかせる。

彼女は俯き、机の上にあった写真立てを思い出していた。

「いえ…っ別に、なんでもないですわ…お父様。」

「……………」

そういうと、再び車椅子を押し老人のお気に入りの場所へと歩いた。

## 第十六章（後書き）

（、・・・）読者のアドバイスを受け、少し違う角度から書きました！これで、少しは面白く深みのある作品に仕上がるかなっと……  
（ ）（ ）しかし、ど素人丸出し……お恥ずかしい……頑張りますのでこれからも宜しくです

## 第十七章

二人は、その文字内容に息を飲んだ。

「これって……」

それに、コクリと頷くと悠呂はその一文を朗読し始めた。

「このまま研究を続けていけば、あの何百年も前に失敗した人間のクローンを作り出す事も可能ではない……」

二人はしばし沈黙した……。しかしその沈黙を先に壊したのは、はじめだった。

「でも……今の法律では過去の事もあるから、医療に関わる臓器や皮膚以外はクローンは作っちゃ駄目なんじゃねえの？」

そう言う、はじめの顔を見上げ悠呂は頷くと再びPCに顔を向け、そのメモリーディスクを抜くと『新聞』と書かれ黄ばんだラベルのメモリーディスクを手に取り、再びセットする。

「それだけじゃないんだ……ちよつとこの記事も見て……」

と画面をスクロールし、その中の小さな記事を探し出すとそこをクリックし拡大して見せる。

そこには、『アスラビ・尾崎 修造、医療界から追放』と書かれた記事に悠呂の父親が編集したのか、違う記事で『いまだ手付かずだった開拓土地を一人の資産家購入』とあった。

「これって……あの禁止区域の事か？」

と聞くはじめに悠呂は

「多分そうだと思う……なんで父さんがこんな記事を持っているのかは謎だけど……あそこで……もしかしたら……」

「って言うか……お前……なんでおじさんがこんな物持ってるの知ってるの？」

そう聞かれた悠呂は、顔をこちらに向けてニッコリ笑うと

「探し物を探す名目でちょこちょこ……ね。」

その顔を見たはじめは、呆れ顔で溜め息を落とす。

「お前…こういうのだけは積極的だよな…いつもは弱々なのにな…」  
「  
と言われ悠呂は少しムツとしたが、すぐに顔を画面に戻しPCを消すと」

「あそこ…もう一回行ってみない？」

と聞いてきた。それにはじめは片眉を上げて

「禁止区域か？」

「うん。」

「…なんか…更に危険リスク上がってねえ？…ってかこの事、政府は知ってんのかな？知ってて黙認してんのか？」

「どうだろ…良くわかんないけど…。」

少し考える風に腕組みしたはじめは、暫く何事かを考え

「…いいいぜ！乗りかかった船だ！俺もなんか気になるしよ。」

と言っはじめを悠呂は、弾かれたように見た。

当の本人はワクワクしている様子で、ニヤリと笑っている。それに悠呂も少しニコリとすると

「明日、朝早く行ってみない？」

「ああ、いいいぜ。俺、脚ねえから迎えよろしくなっ。」

「うん…じゃあ。そっち行く前に連絡入れる。」

そっういと、互いに顔を合わせ強く頷いた。

## 第十七章（後書き）

長らくお待たせしました…プロットを練っておりました…ってのは嘘でゲームで現実逃避しとりました苦笑m( | | ) mすんまそん…

## 第十八章

星羅は父親の寝息を聞き、寝返りを打った。

そして眠る姿を確認すると、静かに体を起こし部屋を出た。

軽く身支度を整えると、一人闇夜に消えて行った。

一方、悠呂ははじめを玄関先で見送り中に戻ると一通りの生活習慣を終え早々に床についた……が、あの場所が気になり、のっそりとベッドから起き上がると身支度を軽く整え、こっそり自分の部屋からキッチンを窺った。

キッチンでは、ミラハが充電をしているらしく、暗闇に赤く目を光らせて動く気配がなかった。

それを確認すると、悠呂はすぐさま地下に降りてコラルロッドに跨ると禁止区域へ走らせた。

一人、警備兵にも見つからぬフェンスの一つに辿り着いた星羅は、じっとその場で思い詰めたように俯いていた。

暫く俯いていたが何か意を決した様に顔を上げ、フェンスに手を掛けた時、後ろから何か機械音らしき物が聞こえたのでとっさに木の陰に隠れて様子を窺った。

立ち入り禁止区域に到着した悠呂は、すぐにエンジンを切り跨ったまま警備兵の目に触れぬ様、暗闇の中へ入った。

そこで暫く辺りを窺い、コラルロッドから降りると目の前のフェンスに静かに近づいた。

(……夜は意外に、暗闇があるせいかバレずに済みそうかな……) と身を低くして周りの様子を見てみる。そして、フェンスを見上げた。

(……難関は……これかな……テッペンで高压電線とかなんか仕掛けあるのかなあ……ちょっと登ってみようか……どうしよう……)

とあちこち見ながら、登って調べるかどうか逡巡していると……。

「あなた……こんな所で何をしているの？」

と声を掛けられ、悠呂は肩を震わせた。

「……………答えなさい。」

と女性だろう声に、悠呂は恐る恐る振り返ってみる。

そこには、あの卒業式の帰りに見た白い服に身を纏った女性と思しき人物が、木の陰からこちらに向かって歩いてくる。

少し、恐怖に後退りした悠呂はしかし、暗闇に目を凝らしてみた。

……………脚はある……………幽霊ではない様だ……………。

その女性は、悠呂の目の前で立ち止まった。

「……………あなた……………確か、こないだの……………」

と言われ、悠呂は彼女の脚から視線を上げた。

「あつ……………きつ君は……………」

と言うと彼女の顔は瞬時に、あの時の様に険しくなった。

「あなた……………何しにきたの？」

その表情に気圧されながらも悠呂は反論した。

「きつ……………君こそ、こんな時間に何をしてるのさ？」

「わっ……………私は……………」

と口ごもると彼女は、すつと表情を変え視線を反らした。



## 第十八章（後書き）

（＊、、） はあくなんと申しましょか……物語に展開を  
もたすことの難しさ、それを文章で表す難しさをつくづく感じまし  
た……はあく小説って奥が深い……

## 第十九章

交代を待つ警備兵は、大きな欠伸をかまし

「今日も何事もない」

と独りごちた時、右腕にはまった腕時計型テレビモニターがブルブルと反応した。

慌てて居住まいを正し、テレビモニターボタンを押した。

すると、画面に現れたのは険しい顔をした隊長で更に驚いた。

「隊長！こちらは異常ありません！」と敬礼をすると、画面に映る隊長は渋い顔で敬礼し

「緊急事態発生だ！星羅お嬢様がまた部屋におられぬそうだ！そこからには来てないか？」

と会話をしている所に丁度交代の若い警備兵がやってきた。

それにチラリ目をやり、すぐに画面に向かつて

「はっ！こちらにはお見えになっておられないかと…。」

「うむ…こちらも全力で探す…そちらもくまなく探せ！」

「はっ！了解しました！」

と返事をするすぐに画面は切れた。

「なにかあったんでありますか？」

と若い警備兵は聞いてきたので

「緊急事態発生だと…星羅お嬢様を探せ！との命令だ。」

と言つとその警備兵も若い警備兵も肩をすくめて

「またか」

と言わんばかりにしてみせた。

「文句は言ってもらえん…お前はあちら一帯を。」

と指示をすると無言で敬礼だけをし、指示された方向へ若い警備兵は走って行った。

星羅は答えに窮していると、正門辺りが騒がしくなったのに気づいた。

「なっ…何？なんか騒がしいけど…。」

と悠呂が正門の方を見て言うと、

「こっちよ！」

と悠呂の腕を取り、フェンスの一つを指した。

「えっ？…あっ…ちよっ…ちよっ…ちよっ…と待ってよ…僕のコラルロッド！  
星羅は、悠呂の指した方を振り返ると辺りを見回しコラルロッドの  
少し離れた場所にボロ布らしき物を見つけ、駆け出した。

それを手に取ると、迷わずコラルロッドに被し、戻ってくるや否や  
再び悠呂の腕を取ると、フェンスの一つの前に立ちそっとフェンス  
を押しした。

「えっ？」

と悠呂が驚いた声を出していると、フェンスが扉の様に開き彼女は  
先にすつと入ると強引に悠呂を中へと導いた。

「えっ？…えっ？ちよっ…ちよっ…と…君…。」

「こっちよ…背を屈めてて…。」  
と言うと少し離れた所の地面にしゃが込み、彼女は取っ手を持つよ  
うにし地面の一角を蓋のように剥がした。

「…！！！」

「さっ…入って！」と彼女が促したのは地下へ続く階段だった。

「えっ？でもっ…。」

と躊躇っていると、彼女はまた悠呂の腕を取って

「あなた！捕まりたいの？」

と語気荒くいうと有無を言わず中に引っ張って入って行った。

## 第十九章（後書き）

キー（。。（タ…今回は、ゲームをやりながら、おお！と閃きがきましたので、こころ展開させてみました さてさてこれからどうなるやら ウシヤシヤシヤ

## 第二十章

彼女に促されて入ったそこは、蓋を閉めてしまふと薄暗く狭かった。真つ暗という訳でなく、左右にほんのりホタルの様に明かりが下に続いていてその先には奥に続くであろう鉄の小さな扉が見えた。

二人は階段に段違いで座り身を縮めていた。

彼女が悠呂より一段上で、先程閉めた蓋型扉に目をやりながら、外を窺っている。

「ねえ…君、どうして僕を匿ってくれたの？」

少し響く自分の声に内心驚きながら悠呂は、一段上の彼女に問うた。その声に、一瞬肩を強張させた彼女は一段下の悠呂に振り向いた。

「……それは……」

そう言葉を詰まらせるとどこか悲しげな表情で視線を逸らした。

「……………」

何も言わず彼女は、再び上を向いた。

そんな彼女に、何かあるなと思いつながらもそれ以上は聞かなかった。

しばらく、沈黙していると先程までバタバタと走る音がしていたのが止んだ。

彼女はそつと蓋型扉を開け表を窺うとすぐに閉めて悠呂を振り返る。

「あなた…コラルロッドに乗ってきたのよね？」

「うっ…うん。そうだけど……」

「…それで、ここを離れるわよ。」

「えっ!?!…ちよつちよつと待ってよ……」

と悠呂が止めるのも聞かず彼女は一人、飛び出して行った。

悠呂は、慌てて蓋型扉を開け辺りを窺ってから彼女の姿を探した。すると彼女はもう、コラルロッドの場所まで辿り着き被してあったボロ布を剥いでいた。

「ああ…積極的だなあ…もつ…。」

と独りごちて、悠呂も再び周りを見回し安全な事を確認すると、そこを飛び出した。

「君ね！無茶にも程があるよ！」

と文句をたれると彼女は無表情でこちらを振り向いた。

「なっ…何？」

と問うと何かに灯りを照らされた。

「…！！…！！！」

悠呂は慌ててコラルロッドへ跨るとエンジンを起動させる。

その側で彼女が何故か、ぼーと突っ立っていた。

それに気づいた悠呂は、自分でも驚く位低い口調で

「何やっての！？早く後ろに乗ってっ…！！！」

と叫んでいた。

その声に彼女は身を固くすると、すぐに頷いて後ろに乗った。

そこへ丁度、警備兵が何やら叫んでいる声が聞こえた。

「おいっ！そこのお前！何やっ…！！…！！？」

と近づいて来た警備兵が後ろに乗る少女に目を止めて固まった。

「今だ…！！！」

悠呂は思いつ切りアクセルを捻った。

「こっころっ！待て！貴様！」

と車体に手をかけられそうになった時、車体が宙に急浮上する。警備兵の手は見宙を掻いた。

## 第二十章（後書き）

キー）。。（）-タ 今度は、お茶碗を洗ってる時に閃きました  
（ ）：（ ）つつか、早くこれを完結にして次の作品に移りたい気  
持ちでいっぱい…。。（ ）しかし！展開が難しいので難航す  
ウシャシャシャ

## 第二十一章

悠呂達を取り逃がした警備兵は、しばし茫然としていたがすぐさま右腕にはめた腕時計型モニターの呼び出しをした。すると、すぐに対応があつた。

「どうした？お嬢様は見つかったか？」

と先程の隊長が姿を現わし警備兵に聞いた。

「たつ大変です！隊長！…星羅お嬢様が何者かに連れ去られました！！」

「なにっ！？…どういう事だっ？」

と隊長の顔が険しくなった。その質問に警備兵は

「そっ…それが、良くわからないのですが…連れ去つた人物というのが少年でして…。」

「なに？少年だと？貴様…見たのか？それは確かなんだな？」

「はいっ！私が見ましたので…。」

うーんと唸ると顎に手をあてた隊長は、仕方ないという感じで警備兵に

「直ちにその少年を追え！お嬢様を攫われたのはマズい！」

と言われて警備兵は敬礼をし

「はっ！」

と返事をするすぐさまモニターチャンネルを切り替え追尾命令を出した。

禁止区域を出発した悠呂はとりあえず自宅を目指していた。

後ろに乗る少女は、何も言わず自分にしっかり掴まっている。

スピードが出ているせいか服をばたつかせている夜風が少し肌寒い。すると、自分の服をしっかりと握る彼女の手がピクついた。

「????？」

「……おっ…追っ手よー！」

「えっ？」



そう言われ、悠呂は弾かれたように後ろを見た。  
すると数台の新型変形仕様の未来型バイクが、ライトを煌々とこちらに当てて向かって来ている。

悠呂は慌てて車体を傾け、細い裏路地にコラルロッドを走らせる。

「きゃああっ！」

急に車体を傾けたので、後ろに乗る少女は悲鳴を上げ、更にしっかり悠呂に掴まってきた。

「ごっ…ごめん…大丈夫？」

「うっ…うん。なんとか…。」

と悠呂は視線を彼女から後方に向け舌打ちをした。

追っ手のバイク達は、車体を細身に変形させ更に追ってくる。

「…さすが…変形仕様の新型バイクだね…。」

と正面を向き直りながら独りごちた。

悠呂はどうしたものかと辺りにせわしなく視線を向け逃げ道を探している…地面にぽっかりマンホールの様な穴の上を通り抜けた。  
(あれだ…!!!)

悠呂は、急にUターンをかました。

後ろの彼女は、悲鳴を辛うじて飲み込んだが追っ手に突っ込む車体に驚き

「ちよっ…ちよっ…あなた…何を!？」

と言うとコラルロッドはかまわず追っ手に突っ込み走っていく。

追っていた追尾班達は、いきなり目標の車体が勢い良くこちらに向かってくるのに右往左往し、混乱していた。

その隙をついて、悠呂はコラルロッドをマンホールらしき穴に向け、勢い良く中に走らせた。

## 第二十一章（後書き）

（・・・） SFなのでアクションシーンも欲しいと考えていました。が、なんせ主人公は学生の身、銃ぶつ放すうゝみたいなのはこのご時世、未成年の殺人事件が多発しているのに考えさせられ、カーアクションくらいに留めました。次回もお楽しみに

## 第二十二章

悠呂は、勢い良くマンホールらしき穴にコラルロッドを中に走らせたが車体は下に急降下していく。

「うっ……うわああああっ……!!!!」

「キヤアアアアアアっ……!!!!」

車体は暗闇に飲み込まれていく。

混雑していた追尾班は体制を整え直し、悠呂達の追尾を再開しました。

「あの、ガキはどこだ？」

とその中の隊長らしきフルフェイスの様な仮面をした男が、後ろに控える同じ様な格好の2人に問いただした。

「はっ……只今、付近を搜索中です。」

とその中の独りが敬礼をして答えた。

「早くしろっ！」

とその隊長らしき仮面の男は苛立った様子で指示を出した。

「はっ！」

と後ろに控えた2人は敬礼をするとその場をすぐさま離れ、自分達のバイクに跨ると他の隊員に混ざり搜索を開始した。

下に落ちていく感覚に意識朦朧としかけた悠呂だったが、気を取り直しハンドルグリップを握る手を強め、足元の非常用浮上ペダルを出すと思いつ切り踏み込んだ。

車体は、下に落ちる力と反発しながら下降速度を徐々に弱め、大きな水しぶきを上げて止まった。

「ふう……」

と安堵の溜息を零し、後ろを振り返った。

「……大丈夫？」

と声を掛けると彼女は、悠呂の背中に額を埋めて踏ん張っていた力を解きゆつくりと顔を上げた。

「…えっ…ええ。なんとか…」

と力なく彼女も溜息をついた。

そんな彼女をみやって、悠呂はゆっくり自分達が落ちてきた穴を見上げた。

「うわっ…穴があんなにちっちゃい…そんなに深いところだったんだ…。」

と声を上げると、後ろの彼女も同じように上を見上げた。

「…そうね。」

2人は暫く黙ったまま上を見上げていた。

「…追っ手…ここまで来るかしら…。」

「う…うん。わからないけど…とりあえず、ここを動こう。」

そういうと、悠呂はコラルロッドのグリップを回しゆっくり車体を走らせた。

中は真つ暗で、コラルロッドのライトが当たらぬ所は本当の闇だった。

どうやら、コラルロッドが走る下は水のようなとしか判らない。

徐々に先を進めていくといくつかの分かれ道があるのがわかる。

辺りを見回しながら悠呂は、呟いた。

「ここは……下水道？」

同じように星羅も辺りを窺っている。

「しかも、なんだか…古いような…今は使われてないのかなあ…夜道で良く判らなかつたけど…住宅ってあつたかな？」

「私も、追っ手に気を取られてて周りを見てなかつたから…判らないわ。」

「逃げるので、必死で勢い良く飛び込んだけど…。」

と言うと星羅は不安そうに悠呂を見上げてきた。

「これからどうするの？」

そんな彼女の、不安そうな顔を見つめて悠呂は、

「……なんとか、僕の家の方角に走ってみるよ。」と笑顔を向けた。

## 第二十二章（後書き）

（ ） （ ） （ ） 携帯での編集には限界を感じます…文字数が入らず  
最後の方はカッツし、次回にまわす所存です…はぁ…

## 第二十三章

「ここか？間違いないな？」

と隊長らしきフルフェイスの男は、一つの穴を覗き込んで問う。

それに答えたのは同じような格好をして最新型バイクに搭載されている機能で何かを検索しながら

「間違いないかと・・・あの少年はこちらに突進してきたので。」

一方、悠呂達は道もわからない下水道をゆっくりと進んでいた。

そしてどうしようかと躊躇ったが、意を決して後ろの彼女に話し掛けた。

「あのっ・・・質問していいかな？」

自分の声が響く。少し彼女の返答を待った。がしかし、返事が返ってこなかったなので、

「あのっ・・・答えたくなかったらいいんだけど・・・。」

と言うと彼女は、微かに

「うん」

と答えた。

「あのっ・・・その・・・あの老人とはどういう関係？」

少し間があったが、彼女は静かにそして端的に、

「・・・親子。」

とだけ答えた。

「え？・・・へっへええそうだったんだ。」

と驚いたが必死にそう返した。彼女は何も話す様子がないので質問を続けてみる。

「きつ・・・禁止区域には、何があるの？」

少し声が裏返ったが聞いてみる。

しかし、これはいくら待っても彼女の答えが返ってこなかった。

悠呂は、コラルロッドのスピードをまた落とし、彼女を振り返った

が暗闇で表情を伺い知る事は出来なかった。

悠呂は溜め息を零し前を向こうとした時、遠くで微かに機械音が聞こえた。

悠呂は慌てアクセルグリップを回し、スピードを上げた。

コラルロッドを走らせながら、振り返ってみると遠くの方から豆粒程のライトらしい物がグングンこちらに向かってくる。

悠呂は、コラルロッドのスピードの限界を知り一つ角を曲がると横穴にコラルロッドを滑り込ませエンジンを切った。

## 第二十三章（後書き）

（\*、`、`、）〃 編集きつつい・・・どうしても、話の切り替え場  
所に改行を入れているがならないよ・・・



## 第二十四章

修造は、自室で紫煙をくゆらせていた。

部屋の外は騒がしい。

娘の搜索にと警備兵を呼んだからだ。修造達の家は研究所より少し離れた場所にある。

娘がベッドにいない事に気付いたのは、夜半過ぎトイレに目を覚まし隣にいる筈の娘の名を呼んでも返答がなかったからだ。

またか、と思い長年信頼の置ける友人の一人、アジユラーチ村瀬警備隊長に連絡を入れたのだ。

彼は自分が医師会から追放された時、唯一自分を信じついてきてくれた中の一人だった。

もうかれこれ彼との付き合いも二十数年になる。

修造は、今はボタン一つで動く車椅子を自室の机へと向けた。

机の上に飾ってある写真立てを手にする。

研究所の机にも同じものがあるがあれはこの写真とは別の時に撮ったものである。

そこに写る娘の笑顔に、修造は目を細めた。

しかし、その笑顔の彼女と今居る娘の顔は同じなれど、髪色は全く異なっていた。

そして、修造は静かに目を閉じ、遠く昔に聞いた彼女の声を思い出していた。

「・・・お父様、泣かないで・・・。」

そう話す娘の顔色は悪く、白い病院のベッドに横たわっている。

「心配なさらないで・・・私は大丈夫ですわ。簡単に死んだりしない。」

そう言って白く細い指先で、自分の頬に流れる熱いものを拭っていく

れる。

あの切ない笑顔が今も蘇ってくるようだと修造は思った。

不意に目頭が熱くなる。そっと写真立てを机に戻した。

数年前、まだ幼い星羅にその写真の人物は誰だと聞かれた時は、内心焦った。

「お前の姉さんだ。」

と教えてやると、幼い星羅は首を傾けて

「ふう〜ん。」

と言っただけで更に質問をしてくる事はなかった。

両目頭に溜まった涙を左手で摘むように拭くと、慌ただしく自室のドアがノックされた。

「どうぞ。」

と返答し、入ってきたのは長年見知った顔だった。

「ん？娘は見つかつたかね？アジュラーチ隊長。」

しかし、目の前の彼の顔は堅い。

「どうかしたのかね？君のそんな顔は何年ぶりか……。」

と言いかけた修造の声を遮ってアジュラーチ隊長は声を荒げた。

「暢気な事を言ってる場合じゃないぞ！修造！」

そんな彼を修造はふっと笑って

「また、娘に出し抜かれたのか？村瀬。」

ファーストネームを呼ばないのは、2人の親密性がわかる。

「そんな事ではないっ！お前の娘が何者かに連れ去られた！」

その言葉を聞いて修造は、吸っていた葉巻を床に落とした。

しかし、すぐに真顔になりいつもの穏和な顔より険しい顔で車椅子を大きな窓に向けて進ませた。

その後ろをアジュラーチ隊長は、修造の落とした葉巻を拾い灰皿に捻入れながら。

「連れ去った奴は、乗り物に乗って逃げたと聞いた。すぐに追尾班を向かわせた。」

と言つと修造に背を向け部屋を出ていった。

## 第二十四章（後書き）

（\*^・^）b 今回は、じいさんの様子を書いてみる事にしました。これで全体的な描写がわかるようになるといいなあ〜と思います

## 第二十五章

「あ……遅いつ！遅すぎる！何やってんだよっ！悠呂はっ！！」

昨日、こちらに来る前に連絡をいれると悠呂は言っていたのに一向に入る気配のなさにはじめは一人苛立ちを募らせていた。

「くそっ！仕方ない！」

と言つと立ち上がり表に出ていった。

移動手段がないので、悠呂の家まで歩いて行くことにする。

幸い、近所で歩きだと3・40分というところだ。

怒りに地団太を踏みながらはじめは向かう。

悠呂宅に着くと、一呼吸をして呼び出しブザーを押した。

すぐに応答があり、自分だとわかったのだろう。

玄関ロックが解除された音がした。

いつもなら家政婦ロボットのミラハが顔を出すのにと訝しんでドア

の開閉ボタンを押すと、物凄い勢いでロボットがあちこちに動き、

右往左往している。

「……ミつミラハ？」

と恐る恐る呼ぶと、まるで泣きついてくるかのように、はじめの元にロボットは走ってきた。

「はっはじめさん！どうしましょう！どうしましょう！」

「あゝミラハ？ちと落ち着こうぜ？」

「こつこれは、失礼しました。ロボットとあるう者が……いついえそれどころじゃないんですっ！」

「何があつたんだよ？」

と聞いてやると、鉛色の顔を上げ一つコクンと頷くと語り始めた。

「昨夜は、私の月に一度の充電の日でして……何せ旧式ですから充電完了は今朝でした。私のメール機能に御主人様から受信がありましたので、悠呂さんにお伝えしようと呼び出したのですが応答

がなかったので部屋に行ってみたら、ベッドがもぬけの空だったのです。」

「なんだって!?いつから居ないんだ?」

「さあ?恐らく夕べの内に出て行かれたのではないかと・・・どうしましょう・・・。」

(あいつ、一人で禁止区域に行っただ・・・)

とはじめは爪をキリリと噛んだ。

ミラハは、思い出したようにはじめをリビングへと通し、ソファアに座るよう促した。

はじめが苛立ちながら色々と思いを巡らせていると、いつ注いだのかテーブルに温かい紅茶をミラハがそっと置いてくれた。

「ところで、はじめさんはどう言ったご用で?」

「ん?・・・ああ、ちよつと悠呂と今日出掛けるようがあったさ・・・。」

「そうだったんですか・・・はあ。」

とロボットなので表情はわからないが落ち込んだ様子をみせた。

(あいつ、一人で行きやがって俺は脚がねえんだぞっ!ったく)と苛立ちを募らせた。

「はじめさん、どうなさいます?」

「ああ、帰ってくるまで待たせてもらつよ。」

「いつになるか・・・。」

「いいよ。」

と会話が途切れると玄関のドアが開く音がしたと思つたら、いきなり後ろから誰かに抱きしめられた。

「んなつ!!!」

その抱きついてきた人物はこともあろうに頭をナデナデしながら

「あ、大きくなつたなあ。」

と一人、感激したと言つ感じで一向に離れてくれる様子がない。

というか気持ち悪い。はじめは自分からその気持ち悪い人物をひっぺ返した。

「なっ何すんだよ！？いきなりっ！？気持ちわりいくな！」

ひっぺ返された当の本人は、はじめの顔を見てキョトンとしている。その横で一部始終を見ていたミラハは何事もなかった様子で

「御主人様・・・お早いですね。」

と言った。

「えっ？御主人様って事は・・・おじさん？」

とはじめは目の前のすっとんきょうな男に指を差し聞いた。

するとその男は、マジマジとはじめの顔を見て頭をポリポリと搔くと

「君・・・誰だっけ？」

と間拔けに聞くのではじめは少し無然とすると、呆れた口調で

「スレッド・桐矢 はじめです。」

と告げると目の前の男は、あゝと言った感じに胸の前で軽く手を叩いた。

## 第二十五章（後書き）

（|| ^ ^ ||）長らくお待たせいたしました（^ | ^ ;）つうか  
またまた現実逃避してただけけど・・・次回作の方は次々ポワン  
ポワン浮かんできてあぁしようしようストーリーが浮かんで  
くるけど・・・これを完結してからと思いつつ新しい作品の意欲  
と戦い中

、（。、）ノ

## 第二十六章

悠呂の父親は、はじめに指を突きつけると

「思い出したぞっ！その青い髪！生意気そうな顔！お前はあのっ泣き虫寝シヨンベン小僧のいつちゃんだな？」

と言われて、はじめは一気に顔が火照ってくるのがわかった。

「なっ…なんでっ…」

と問い返そうとすると、それを遮るかのように悠呂の父親は話始めた。

「あれは…確か出勤前だ。俺がお前の家の前を通るとだな、なあ〜んかがキがわあわあ泣いてやがったんだ。それで何事かと思って家の中をちらつと覗いてみたら…ぶぶっお前が下半身丸出して泣いてたんだよ…。」

と話しが始まったのではじめは赤面し、俯いた。それでも、彼の話は続く…。

「なんでかと思って辺りを窺ったらさあ〜お前の母親が布団干してんだよあ〜なあ〜んか辺な地図が書いてあつたなあ〜ぎやははははっ！」

「いつちゃん！オシッコの時はちゃんと言わなきゃダメでしょ！」

と茶化してくるのではじめは

「いつちゃんって呼ぶな！」

と怒鳴った。すると更に更に悠呂の父親は話を続ける。

「お前え〜うちの悠呂を良くいじめたる？確かあれは…そうそう…。」

とまだまだ続く彼の話をはじめは赤面し俯きながらやり過ごしていると彼の話声が遠く感じ、はっと我に返ると声は止んでいた。

どうしたのかと顔を上げると目の前にいた筈の悠呂の父親の姿が忽然と消えていた。

「あっ…あれ？おじさん？どこいつちまった？」



と首を巡らせていると奥の部屋からミラハを呼びながら、部屋着に着替えた彼が現れた。

「おーい！ミラハちゃん？俺の部屋、誰か入っちゃったの？」

「さあ〜私は入るなと言われてますので入っておりませんが…。」  
と会話を交わす二人に目をやりながら、はじめはドキリとした。

「ふ〜悠呂ちゃんが入っちゃったのかな？」

と言うとはじめの目の前のソファに腰を下ろした。

話を逸らす目的もかねて、はじめは彼に質問してみた。

「おじさん、なんで帰ってきたの？」

そう聞かれて悠呂の父親は、紅茶を飲む手を止めた。

「なんでって…何年ぶりに息子に会いにさ…。」

と言うと紅茶をすすった。

「なんで？だってまだ冥王星の新星開拓プロジェクトは終わってないぜ？」

と言うと、目の前彼は紳士に格好をつけて飲んでいた紅茶を噴水の様に吹き出した。

それにはじめは驚いていると、悠呂の父親はミラハを手招きして何やらごによごによ話始めた。

「ちよつと〜んミラハちゃん〜俺、今そんな仕事しちやってる事になっちやってる訳え？」

「ええ〜まあ〜。」

「あんのつタコ親父！今度いつぺんたこ焼きにしてやるっ！」

と謎の言葉で怒鳴ると、きりつとこちらに向いて彼は質問してきた。

「ところで…いつちゃん…悠呂は？というか君はここで何をしているんだね？」

と聞かれてはじめはまた、ドキリとしたが平常心を装い何食わぬ顔で質問に答えた。

「いつちゃんは止めて下さい…俺は、今日悠呂と遊ぶ約束をしていて…それで来てみたらいなかったなので帰って来るまで待たしてもらってるんです。」

と言うと先程までのアホ面を一変させ、自室に顔を向け再び正面を向くと、じつとはじめの顔を見て、一つ溜め息をこぼし顎に手を添えた。

はじめは、なんだか内心ドキドキしていたがなんとか顔に出さずその様子を見守った。

すると、彼が何か口を開きかけるとどこからか呼び出しらしい電子音が鳴り出した。

はじめはどこから鳴っているのだろうと探していると、悠呂の父親の右手から小型モニターが出現した。

モニターの中に一人の若い男性が現れると、悠呂の父親は更に渋い顔をして

「ここには掛けてくるなと言ったはずだ！」

と先程の間抜け声が嘘の様な凜々しい声でその若い男性に怒鳴ると、中の青年はすみませんと返した。

そのやりとりを見て、はじめは目の前の彼はただものではないと悟った。

## 第二十六章（後書き）

（・・） 逃避しまくって気がついたら2ヶ月経っちゃってた…  
あははっ

○（^・^）○まっ こんな奴ですがこれからも未永く宜しくお願  
いします

≡（―）≡

## 第二十七章

「おいっ！見つかったか？」

「いえっ…まだ…。」

「くそっ！この地図はダウンロードしたんだろっ！」

「はいっしました…けどどこ横道が多いと…。」

「つべこべ言わず探せ！」

そんな会話を壁越しに聞きながら、悠呂達は息をひそめ様子見をする。

「おいっ！そつちを探せ！」

と怒声と共に機械音が離れていく。

二人は安堵の息を洩すとズルズルとその場に腰を下ろした。

「はあ…君、大丈夫？」

と声を掛けてみたものの、コラルロッドの明かりをすべて切ってしまっているで彼女が見えない。

しかし肩の辺りにフワフワと何か、かかるものがあってそれで彼女が頷いているのだと確信した。

「これからどうしよう…。」

と呟きながら悠呂は辺りを窺ったが、真っ暗で何も見えず平衡感覚も失う感じた。

一息を吐くと、壁から少し顔を出し先程まで追尾班がいたであろう辺りを見してみる。

この横穴よりはうっすら明かるいそこには誰も見えず、耳もそばだててみたが何かいる気配や音はしなかった。

「……………」

悠呂は手探りでコラルロッドを探した。

「なっ…何をするの？」

と彼女の震える声を聞いて悠呂はとっさに手を引いた。

「あっ…ごめんっ！どっか触っちゃった？」

「うんっ違うのっ…あなたはどこも触ってないわっ。紛らわしい言い方してごめんなさいっ。今から何をしようとしているの？」

「はあく良かった…ドキリとしたよ…ここ真っ暗でわかんないから明かりを点けてみようかと思って…。」

「……大丈夫なの？」

「うん…多分。一応外の様子を見てみたけど誰もいないみたいだし…。」

と説明しながらも悠呂はコラルロッドを探し固いものに触れてそれだと確信すると、手慣れたようにライトを点灯させた。

あらかじめ、中に突っ込む形で入れたコラルロッドだから明かりは横穴の奥を照らし出した。

しかし、奥が深いのだろうか明かりがあてられているのに先が見えない。

「…先が見えない…。」

と悠呂が呟くと、隣にいた彼女が

「…という事は…まだこの先があるという事？」

「…そう…かもね。」

「どうするの？」

と彼女が見上げきた。悠呂は奥を見たまま、彼女の問いに答えなかった。

(もしこの先に行っても…出口は見つからないかもしれない…最悪、追尾班と出くわすかもしれない…でも、このまま逃げまわっても…一か八かやってみるか…。)

とそんな思考に悠呂は、はっとした。

先程から自分でも驚く様なこの思考と行動はなんだ？今までの自分なら信じられないことだ…そう思う何だか知らない高揚感が湧いてくる。

「行こう…。」

そう言つと悠呂はコラルロッドに跨った。

「えっ…でも…。」

「一か八かさ…そうならならならその時考えようよ…さっ乗  
つて。」  
と言うと彼女は一瞬躊躇う素振りを見せたが、何か決心したかのよ  
うに大人しく後ろに乗った。

「じゃっ行くよ?」

「ええ。」

と言葉を交わすと、悠呂はアクセスを回した。

走らせてみたものの、そこはただひたすら真っ直ぐ進むだけで横  
道が一つもないのに、少し焦っていた。それは後ろに乗る彼女もそ  
うらしく、腰の辺りを掴む彼女の手は少し震えていた。

しばらく走らせていると、何やらうつすら明かるい場所に出た。

その明かりで辺りの様子がくつきりわかり、その広さも窺えた。

「なんだろ?この場所…。」

と首を巡らせていると後ろの彼女が何か気づいたらしく声を掛け  
てきた。

「ねえ?うえっ…ほらっ…上を見て。」

コラルロッドをそこで停止し乗ったまま言われるままに見上げてみ  
た。

「…出口?」

「わからないけど…なんか…木蓋みたいなのから光が漏れてるみた  
い…。」

「……………」

「出られるかしら…。」

そう呟く彼女の声を聞きながら、悠呂はゆっくり視線をおろし残り  
の燃料を確認した。そして、再び上を見上げ決心した。

前進から浮上に切り替え、ハンドルグリップから足下のペダル操  
作に切り替えた。それに気づいた彼女は、

「ちよっ…ちよっ…何をやる気なのっ?」

と問うてきたが悠呂は上を睨みながら

「しっかり捕まって！」

と言うと足元のペダルを思いっきり踏み込んだ。

コラルロッドは、勢い良く浮上を始める。

「きゃあっ！」

悠呂はその勢いに構わず、その木蓋らしきものに頭から突っ込みその蓋を突き破った。

少しクラクラしたが思いっきり外に飛び出した。

## 第二十七章（後書き）

（\*^ー^）b 今回はパツと思いついたので忘れぬ内にチャチャ  
ツと書いてしまいました。

ノ。ゝ。ノこの次はまたぱったりと書かなくなるかも〜うへ  
へえ〜



## 第二十八章

「なんでそんな事になんだよっ!!」

と悠呂の部屋にはじめの怒声が響く。はじめの目の前のベッドには俯く、悠呂と星羅。

「お前っ! その子連れ帰ってきちやマズいだろがっ!!」

「ごっ…ごめん…」

「俺に謝られても困るっ!!」

と怒鳴ると星羅はびくりとして悠呂の腕にしがみついた。

「つつか…あんたっ…あんたもなんでノコノコついて来ちゃったんだよ…。」

「ごっ…ごめんなさい…。」

と彼女は、自分が仕出かした事の重大さに気づいて更に震えた。

そのやり取りを、悠呂の父親はドア口で腕組しながらじっと聞いている。

「俺をほっぽって、勝手な事しやがって!」

と青筋を立てて怒るはじめの肩越しから悠呂は黙ってこちらを見ている父親に目を滑らせた。

「おまえっ聞いてんのかっ!」

と言われて悠呂は視線をはじめに戻し頷いた。

「おまえっ…」

とはじめが喋ろうとしたのを遮って悠呂の父親は静かに、そして凄みのある声で聞いてきた。

「彼女は、あのアスラビ・尾崎 修造の娘ではないのか?」

と聞かれて、三人は一気に固まってしまった。

「…そうなんだな?」

と聞かれて答えたのは当の本人だった。

「はいっ…私は、アスラビ・尾崎 修造の娘です…。」

と少し声が震えていた。しーんと静まる部屋に父親の低い声が聞く。

「悠呂、これはどういう事だ？」

悠呂はそう尋ねる父親を振り仰いだ。彼の強い眼差しが痛くてすぐに視線を逸らしてしまった。

黙っている、どうなんだと父親はまた低くそして威圧感のある声で聞いてきたので顔を上げると、彼の強い眼差しに根負けしてポツリポツリと話始めた。

「じつ…実は、卒業式の日の帰り……。」

と全ての事情を、静かに語る。父親はそれをじっと聞いている。

はじめは、先程までのアホ丸出しの彼とのあまりのギャップの違いに啞然とした。

全ての話をじっと聞き終えた父親は、腕組を外すとツカツカと悠呂の前に行き有無も言わず襟首を掴んで持ち上げた。それに悠呂は驚き目を見開くといきなり襟首がくつと締まった。苦しさに目を閉じていたらいきなり背中に痛みが走った。一瞬、何かわからず目を開けてみると父親達のいる部屋が遠のいていて初めて自分が投げ飛ばされたのだとわかった。

父親は物凄い剣幕で、こちらに向かって歩いてくると再び襟首を掴んだ。

「お前はなんて危険な事をすんだっ！！人様に迷惑までかけて！！こんなに心配までかけてっ！！」

と怒鳴られた。何故だかわからなかったが、目頭に熱いものを感じてとっさに顔を背けた。

「ごめんなさい……。」

と震える声でそれだけ言った。

父親は乱暴に襟首を離すと、腕のボタンを何やらいじりながら玄関に向かい、そのまま外へ出て行ってしまった。

その場でうなだれていると、はじめと星羅が駆け寄ってきた。

「おいっ悠呂！大丈夫か？」

「……………うん。」

## 第二十八章（後書き）

（ ）今は少ない、父親の愛情表現を表してみた文章です 果たして最近ではこんな真剣に怒ってくれる父親は今の世の中に何人いらっしやるんでしょうか？

## 第二十九章

父親は、腕時計型テレビ電話の呼び出し音を聞きながら表に出た。「はいっこちら秘密警察、諜報部。」

とキビキビした女性の声で応答した。その声を聞き、父親は腕を顔の前まで上げた。

「俺だ。さつきはすまない。悪いが桐矢に変わってくれ。」

「あっこれは…浅乃木警部。おはようございます。桐矢警部補ですね？少々お待ち下さい。」

と笑顔を見せた女性の画面は、すぐに青い髪をした青年に変わった。「はいっスレッド・桐矢…あっあれ？先輩？あのっおはようございます。」

と驚いた表情を見せた。

「けっ…お前も警部補に昇進かあ。」

と悪態をつくると画面の中の青年は照れながら頭を掻いた。

「ちっ…胸くそ悪いが報告だあ。お前の後輩の情報は確かだ。」

と浅乃木が言うと、目の前の青年は表情を変えた。

「っと言いますと…あの情報は…。」

と言う青年に浅乃木は頷いた。

「なんだか知らんが…俺の息子が連れてきた。おまけに四年ぶりに家に帰ったつてのにお前によく似た顔が家にいやがった…。」

「えっ…俺によく似た？」

と画面の中の青年は困惑顔で問うてきた。

「ふんっ…まあいい。報告は以上だ。」

とさっさと通信を切ってしまった。

浅乃木は報告を終えると、一つ溜め息をついて家の中に入った。

中に入るとソファアに息子、並んで星羅が座り、一つ掛けのソファアにはじめ、その側にミラハが立っていた。それを見回して、また溜め息をつくると頭を掻いて息子の座るソファアの向かいに腰掛け

た。

そして、改めて息子の顔を見ると。

「…大きくなったな。悠呂」

と笑んだ。その父親の顔に悠呂は目を輝かせた。

「あのっ…おっ…お帰りなさい…父さん。」

と目の前の息子は、恥ずかしそうに言うので浅乃木は

「うん」

とだけ言っただけで頷いた。

いつの間に用意したのか、ミラハがテーブルに茶器を揃え紅茶を人数分、カップに注いでいる。

「とっ…ところで、父さん…いつ帰ってきたの？」

と聞いてきたので、ミラハから受け取ったティーカップに口をつけ、口に含むとカップをそっと置いた。

「今朝だ…そしたら…こいつがいやがった。」

と嫌そうに、はじめを指さした。指を向けられた本人は憮然とこちらを見据える。

「悠呂が見当らんから、どこ行ったか聞いたらこいつ知らんとぬかしやがった。」

とまたも嫌そうにはじめを見ながら、お茶をすすった。

その視線を受けてはじめの眉尻がピクピクしている。

その怒りを押さえ込むかのようにお茶をすするはじめを、悠呂は苦笑いでやり過ぎすと、再び父親に話し掛けた。

「そっ…そうだったんだ…でっでも、どうしてここに…。」

と悠呂が言いかけた言葉を父親は遮った。

「その先は、この青頭ツンツンと同じ質問だ。」

「へっ？あつ青頭ツ…ツンツン？」

と父親に聞くと父親はうんうんと頷いた。

「ちよつと！おじさんっ！なんなんですかっ！こいつとか、青頭ツンツンとかっ！」

とはじめが食いつくと浅乃木は、にやりと笑って。

「んじやくいつちゃんの良かったあ？」

と茶化すとはじめは赤面して。

「やめて下さい！」

とティーカップを乱暴に置いた。

「えっ？いつちゃんて？へっ？」

と悠呂が聞くと浅乃木はあのね…と話そうとしたところをはじめが割って入った。

「なっなんでもないっ！なんでもないぞっ！悠呂！」

と迫り来るはじめの顔に圧倒されて…。

「うっうん。。。」

としか言いようがなかった。

「それはさておき…。」

と浅乃木が紅茶をすすると、星羅をちらりと見た。

「……気が進まないが、彼女がここにいる以上、話さない訳にはいかないな。」

と静かにカップを置き手を膝の上で組んだ。

## 第二十九章（後書き）

（――） 佳境に入ってまいりました…完結内容はもう決めてるんですが…そこまでいきつく為に、ここからの作業が困難でつ…あさぎの苦悩は続く…プルプル

## 第三十章

修造は、なかなかかはかどらぬ搜索に苛立ちを募らせていた。唯一信頼するアジエラーチ村瀬の口から出た言葉…。

「何者かに連れ去られた！」

その言葉に驚愕した。その途端に甦る愛しい娘の声。

「お父様…心配なさらないで…私はどこにも行かない…。」

あの胸の痛みが再び甦る。

もう二度、あんな思いはしたくない…。そう思い、修造は無意識に記憶の中に入ってゆく。

あの時、娘の亡骸の前にずっと立ち尽くしていた…。

「…もう、こんな思いは沢山だ…。」

そう決め、娘の亡骸から自慢だった長い髪の一房にハサミを入れた。そして、その髪に縋り誓った。

「お前を…もう何処にも行かせやしない…。」

そして、修造は医学会から退き研究に没頭した…前から追放だ、なんだと言われ見切りをつけようと思っていたのでその流れにのつた。

そして自分の得たありとあらゆる最新技術を注ぎ、彼女をこの世に蘇らせた。少し、薬等の副作用で髪の色が抜けてしまったが、生まれその子はまさしく彼女そのものだった。途中、テロメアの短さを心配したが自分が得た技術がそれさえも克服した時には、天にも昇る思いだった。

しかし、その子が成長するにつれ彼女は彼女ではなかった…姿形は昔のまま、しかし性格等は少しずつ異なっていた。修造は、それでも良いと思つた。自分が生きている内に彼女が傍にいてさえくれるのならそれで良いと…。



その為にも決して、彼女の出生だけは秘しておかねばならない。彼女の悲しむ顔は見たくない。何より知れば自分から離れていつてしまつかもしれない。修造は他の研究員、警備兵や研究室に出入りするありとあらゆる者に口止めをし、徹底した。

ある時、何処から聞きつけたのか一人の資産家が修造の元を訪れた。何でも先日、大事な一人息子が病で他界したと言う。その資産家は、藁にも縋る思いで修造を訪ねてきたのだ。

「貴方は、病で亡くなった娘さんを生き返らせたとか……。」

「……………」

「どうか……どうか息子を！貴方の娘さんの様に生き返らせて下さいー！」

「……………何処から、そんな話を……………」

「……………どうか！どうかお願いします！」

と資産家の彼は、修造の足元に追いつき何度も何度も頭を下げた。「……………しかし。」

「金なか幾らでも出す！だから……だから……お願いします！……どうかどうか息子を！」

修造は、自分の愛する娘だけが生き返ってくれるだけでそれ良かった。

しかし、何度も何度も頭を下げる彼の姿に修造は、自分の姿を重ねてしまう。

「……………わかりました。」

と答えると資産家の男は神でも見たかのような表情をした。

「……………では……。」

と言う言葉を遮り修造は言い放った。

「ただし、条件があります。」

その言葉に資産家の男は少し笑顔を引いたが、すぐに顔を引き締めた。

「条件？……いいだろう。なんだね？その条件とは？」

と言つ資産家の視線から修造は背を向けた。

「…貴方は、私が今どういう立場か…ご存知ですか？」

と言つ問いに、資産家の男は

「わかつているとも」

と答えた。

「…そうですか。それならば話が早い…貴方にも私の片棒を担いでいただきたい。」

「……それは…？」

「そう……この研究の資金…いやっ支援していただきたい。」

と言つとしばらく資産家の男は黙つたが

「…わかつた、良かろう。支援させていただく。」

「…交渉…成立でよろしいですね？」

「ああ…。」

それから修造は、その資産家の後ろ盾を得て更なる高みへと研究を続けていった。

しかし、その頃から娘の様子がおかしくなった。

いつも悲しそうな顔で、自分の研究を見つめるようになったのだ。

まさかと思ひ、誰かが話したのかと皆に問い詰めると、誰も話していないという。もしかすると、彼女は自分の出生の秘密を薄々感づいているのではないかと思うようになった。そうして、彼女は夜に徘徊するようになって修造は益々焦っていた。

しかし、フラフラと亡霊の様に出歩くが朝になれば必ず自分の元に帰ってくる事に安堵した……。

しかし、今回は違う自ら出て行つたのではない。誰かに連れ去られたのだ。修造は胸を引きちぎられる思いで、アジェラーチ村瀬の報告をまつた。

### 第三十章（後書き）

（T—T） 全体の描写を考え、この小説の更なる高みへ……私は  
……私は……。

## 第三十一章

まだ薄暗い早朝、星羅は悠呂宅の玄関前に出た。冷たい風に息をはけばまだ白く流れる…もう春だというのに。

階段状になる玄関の先に星羅は腰を下ろし、白銀の長い髪をそよがせ夜明け前の薄紫色の空を見上げた。

「……おはよー。早いね。」

と声を掛けられ、星羅はビックリして振り返った。

そこに立っていたのは焦げ茶色の小さいブランケットにくるまって寒そうにしている黒髪の似合う少年だった。

その少年は、優しい笑顔を向けると傍に寄ってきて自分の横を指さすところ聞いてきた。

「ここ……座っていいかな？」

「……うん。」

と応えるとその少年はフワッと自分の横に座った。

「まだ、このくらいの時間帯だと寒いねえ。」

とその少年は腕を寒そうにさすると、こちらを見た。

「君は、寒くない？」

と聞いてきたので、

「少し……。」

と言って体をさすってみると自分でも驚く程冷たかった。

「あつ……ちょっと待っててもう一枚、ブランケット取ってくるよ。」

と彼はまたフワリと立ち上がった。何故か彼が自分から離れてしまうことに、少し不安をおぼえて気が付くと彼の手を取って首を横に振っていた。

（行かないで……。）

の意味だと思う。しかし、彼の笑顔は私が遠慮しているのだと思っている。

「……じゃあ、はいっ。」

と彼は自分のくるまっていたブランケットを渡してくれた。

「…えっ、でもっあなたが…。」

と言うと彼は笑って

「いいよ。」

と言うと再び横にフワリと座った。

すると、一点を見つめたまま話始めた。

「昨日は…僕、びっくりしちゃった。」

「えっ?」

と彼を見ると彼はクスリと笑って…。

「父さんの話…僕、父さんは普通の職業で母さんと一緒に新星開拓に行ったんだとばかり思ってた…ふふっ。それがいきなり帰ってきて、秘密警察だって言われても普通信じないよね?」

と彼は幸せそうに笑った。そんな幸せそうな横顔が見たくなくて視線を逸らした。

「…それが…君のお父さんを監視する為だったなんて…。」

と彼の言葉が途切れたので再び横顔に視線を向けると、彼の顔は悲しそうだった。その悲しい横顔が自分の今までの悲しさと重なって、胸が重くて痛くて苦しく耐えられなくなって俯いてしまった。

「…どうしたの?…まだ、寒い?」

と彼は覗き込んでくる。私は無言で首を振った。そして、顔を上げて彼の顔を真正面から見た。

(この際、すべて…すべて話してしまったら…楽になるかもしれない…。)

目の前の彼はキョトンとしている。

(でも…でも、こんな事この人に話したって…。)

「あのっ…寒いなら、中に入った方が…。」

「…今…から話す事、誰にも言わないで…。」

「えっ?」

と問い返す彼を無視して私は、話し出す。

「……私は……もしかしたら、ここにいてはいけない存在かもしれない……。」

「……………それは。」

また問い返すのを無視して先を続ける。お願い、全て話させて……お願い。

「私は……私は……。」

声が震える。認めたくなくてずっと言葉にしなかった言葉。

「クローンかもしれないっ！！！」

「えっ……………？」

彼は驚きの声を上げたがそれ以上は何も言わなかった。

『自分はクローンかもしれない。』

誰にも言えなかった事を言えて安心してしまったのか、怖かったのかたちまち震えが立ち上ってきて目頭が熱くなってくる。見られなくなつて俯いた。

そんな私を彼は黙つて見てる。恐らく驚きと、そんな事を告白されて困惑しているのかも……。でも、彼は違った。

「……………大丈夫？」

その優しい声が信じられなくて、顔を上げたら目に溜めて隠してたものが溢れた。そんな私の顔に彼は心底びっくりした顔をしていたと思う。何故なら私は彼の胸に縋つて泣いていたから。

### 第三十一章（後書き）

（ ） （ ） 新事実発覚！！なっなんとっ！悠呂くんの髪の色はバリバリアジア系の黒髪なんですねえ〜彼はノーマルジャパニーズ種なんですなえ〜ええ〜本編で解説できないつけをここで払っております…ええ〜はじめくんはですねえ〜この物語では一般種の三種混合種となっております。日本人+アメリカ人（外国人全般）+火星入なんですなえ〜。星羅ちゃんの白銀は珍しいのです。まっ副作用だしね。以上あさぎでした。

## 第三十二章

「自分はクローンかもしれない。」  
と目の前の彼女は涙を零した。悠呂は、一瞬何の話なのか意味を捉え兼ねていた。

それに、ついて出た自分の言葉が…。

「大丈夫？」

ほとんど無意識に出た言葉だった……。そして、彼女は今自分の胸で泣いている。

突然の出来事過ぎて悠呂の頭は収集がつかず混乱していた。

自分の胸で泣きじゃくる彼女の長い髪に茫然としながら触れそこではっと我に返り慌てて、彼女を自分からそくと離れた。

「あつ…あのつ…そのつ…まだっ時間も早いし、もう少し寝てた方がいいよっ。」

と言うと彼女は小さく頷いた。

そんな彼女に手を貸して立たせると、ゆっくりした足取りで客人用の寝室へ連れて行ってあげる。

彼女の手は冷えきって氷の様に冷たかった。その冷たさが彼女の悲しみも語っているようで悠呂は何だか胸が痛かった。

彼女を寝かしつけ、ひとつ溜め息をつくとりビングに行きソファ―にドサリと腰を下ろした。

『私は、ここにいてはいけない存在かもしれない。』

彼女の悲しそうな、何かをこらえているかのような震える声が耳に蘇る。

悠呂は、狂乱したように髪をグシャグシャ掻き筆るとそのまま頭を抱えてうなだれた。そこへ、間抜けなあくびの音がして悠呂は顔を上げた。



振り向くと、腹をボリボリ掻きながら寝ぐせのバツチリついた父親が立っていた。頭をワシワシと掻くと悠呂の傍のいつものソファ―に腰を下ろした。

「おっ…おはよー…父さん。」

と挨拶をすると、目をシヨボシヨボさせてやっと息子の存在に気づきニカツと笑うと、

「おおーおはよー悠ちゃんは早起きだなあーあははっ。」  
と返すとすかさず、

「ミラハちゃあ〜ん〜お茶あ〜！」  
とキツチンに声を掛けた。

「お前も飲むだろ？」  
と聞いてきたので頷いた。

ミラハが二人分のお茶を用意してくれる。その様子を悠呂はじっと見ていた。ひとつのカップが父親に手渡され、自分にも手渡された。その温かいカップを手で覆うとぬくもりが染みってくる。カップの中の黄金色の紅茶が自分の姿を映している。それをひとくち口に含むと、紅茶の芳香が鼻を通る。

その香りが、気分を落ち着かせてくれる。悠呂は紅茶の色をじっと見ながら父親に質問してみた。

「父さん…この世に人のクローンって存在すると思う？」

父親は静かに紅茶を飲みながら

「どうしてそんな質問を？」

と逆に聞いてきた。

「いやっ…別に…」

とカップを揺すり、チャプチャプとカップの中で揺れる紅茶を眺めていた。

そんな悠呂に父親はちらりと視線を向け先程と違った声色で

「人間のクローンを作ることは、禁止されている。これは、この何千年前かの経験があつての事だ…そんな事はあつてはならない。」

そう言い切る父親に無言で返し、立ち上がると自室に下がり服に着替え外出の準備をすると再びリビングに戻った。

その様子を父親は、不信に思い声を掛けた。

「おいっ…どこに行くんだ？」

と聞かれ、悠呂は背を向けたまま

「今日、はじめくんと約束があるんだ。」

「約束？」

「そう、今日はじめくんのコラルロッドが修理から却ってくるから…。」

と準備を進める。

父親は、顔をしかめたが

「そうか…。」

と行ってニユースを見始めた。

ニユースを告げるキャスターの声を背で聞きながら、悠呂はコラルロッドの鍵を握り決意すると地下へと勢いよく向かった。地下に着くと、コラルロッドに鍵を差し入れ、エネルギータンクは充分か画面に出し、次にライトを点けたり消したりして点検、次にコラルロッドに跨り浮上ボタンに切り替え、足元のペダルを出すと少し踏んで浮き上がるか確認する。一通り点検を終えると、悠呂は顔を引き締め、アクセスを回し地下駐輪場から飛び出して行った。

## 第三十二章（後書き）

（T―T）長らくお待たせ致しました。なんとなくスランプ気味での文章ですので、面白味に欠けると思われますが、どうか完結まで末永くお付き合いたいと思います…愁真あさぎより

### 第三十三章

地下から飛び出したものの、何やら視線を感じて後ろをしてみる  
と父親が玄關に立ちこちらを見ているのに気づいた。

「！！！」

悠呂はそのまま禁止区域に向かう道を止め、はじめの自宅に向かう  
直線の道をそのまま走らせた。

ある程度コラルロッドを走らせ、自宅が見えなくなった辺りで一度  
止めて自分の自宅にある方向を振り返った。

「ふう〜びつくりしたあ〜。……さあ〜これからどうしようかな  
…また道に戻るのもなんだし…。」

とはじめの自宅のある方向を見て閃いた……が少し、顔を曇らせた。  
「……あんまり、気が進まないけど……これしかないかな…。」  
そう呟くとコラルロッドのアクセルを回し、いつも遅刻ギリギリの  
はじめが見つけたと言う中学校への近道を使ってみることにする。

しかし、毎回自慢の様に聞かされたその“近道”とやらは“道  
にして道にあらず”だった……。

初めに曲がった先はいきなり他人の家の前で。

「うっうわっ！」

その地下駐車場のような場所を通り、教えられたとおりにその  
突き当たりにはぼっかり穴があいていて、その穴に入ると。

「うっうわわっ！なんだよっ！ここっ！」

入った穴は真つ暗な隧道、そこをひたすら走り明かりが見えてきた  
と思ったら。

「ふう〜やつと……でぐっ……ん？」

何やらぼんやり鼠色の巨大な物が迫って見えて、それがどこかの地  
下まである建物の壁である事に気づき。

「あわわわっ……。」「  
慌てて浮上ペダルに切り替え、浮上する。  
浮上したそこは、またまたどこかの家の玄関先で、今度は教えられ  
た通りその家の脇にある民家と民家の間、コラルロッドを斜めにし  
ないと入れないような細い道を渋々に入り、延々と続く民家の裏道  
を走って、気味が悪いピンクの蛍光色の家を発見する。

「……あんまり、とやかく言えた義理ぢやないけど……この色……一体  
どうやって出したんだろ……ある意味興味深い……。」

その家を左へ曲がると、静寂しきっていた民家の立ち並ぶ裏道に騒  
々しい音が蘇ってくる。しばらく先へ進むとその音が更に大きくな  
り、見覚えのある禁止区域の前を通る通学路の大通りに出た。

そして、ゆっくりコラルロッドを止めて先程自分が来た道を振り返  
る。

「……たぶん、僕……二度とこの道は使わないと思う……。」  
と大仰に顔をしかめた。

禁止区域付近に着くと、近くにある建物の側にコラルロッドのスイ  
ッチを切って止め、壁を背にそ〜と様子を窺ってみた。まだ、朝方  
だというのにかかなりの数の警備兵が警備にあたっている。

悠呂は、正門辺りに視線を向けてみる。  
正門の辺りの警備兵は肩からライフル型ショックガンを下げてい  
た。

それを見て生唾を飲み込んだ。  
そして、そのまま正門から視線をゆっくりと動かして、前に一度星羅  
に匿われたことがある隠し通路だろう場所のあるフェンスの辺りを  
見てみる。その辺りにも同じように肩からライフル型ショックガン  
を下げた警備兵が2、3人ウロウロしている。どうしたものかと、

辺りを見回していると一人の警備兵がこちらを見た気がしたので、慌てて顔を引っ込めた。

ドキドキが止まらない。口から心臓が出てきそうな感じた。数十秒待ち、大きく深呼吸をしてから再び壁を背に様子を伺い見てみる。すると辺りを警戒しながら一人の兵士がその場を離れ、別の場所へ歩いていく。そこで、悠呂はふと気づいた。しかし、それに確信が持てなかったのしばらく様子を見てみる。

間違いない。一定の間、あの3人が辺りの見回りの為にあの場所が手薄になる事がある。そう確信した悠呂はその機会を待った。

一人の兵士が辺りを慎重に見回りし、その場を離れて行く。しめたっと思いい他に人がいないか確認すると一気に飛び出し、素早くフェンスの一つに触れ禁止区域内に入り、きつちりフェンスを閉め草が生い茂るところへ駆け、身を屈めて再度辺りを確認した所で一人の兵士がまたこちらに歩いてくるのが見えた。危機一髪だった。

それをやり過ぎし、素早く芝生の一つに手を差し入れ、蓋型の扉を探し当てて速やかに潜入した。

蓋型の扉を閉めると、下に続く階段の一つにペタンと座り込んでしまった。潜入に成功した安心からか急にカタカタと震えが立ち始める。悠呂の鼓動はまだ激しく治まらない。ブルブル震える自分の両手を見てみる。緊張？いやっ高揚感？そんな問いに自嘲を漏らし、震えるその手で顔を覆った。

### 第三十三章（後書き）

（。A。；）携帯では何文字書けるか不明なので初めて1800文字、打ってみました。途中で切れたりしてたらごめんなさい。本文はですね…毎回有り難い事に読者の方の寄せていただいておりますメッセージから「主人公、もっと頑張れ！」と言ったお言葉をもらいまして、悠呂くんを今回は採用したわけであります はい…最終章まで細々ですが、頑張っていきますので皆様、よろしくお願致します。

## 第三十四章

はじめが眠そうに歯を磨いていると、母親が後ろで何か叫んでいる。寝起きのぼあくとした頭では良く聞こえないが、どうやら自分を呼んでいるようだった。

「はんはほあく（なんだよあく）」

と返事をする、母親の音がハッキリ聞こえてきた。

「はじめ〜聞こえてるの？誰か来たみたいだから、ちょっと出てちよ〜だい。」

「はんへほれは…（なんで俺が…）」

「今、ちよつと手が放せないのよっ！お願いっ！」

という返答が返ってきた。どうせまた、撮り溜めしたメロドラマが何かを見ているのだろう…こうなると母親はテコでも動かない。

「はあく…。」

仕方なくうがいをしてタオルで口を拭いながら、かじりつくようにテレビを見る母親の居るリビングを通り、テレビモニターで誰か確認もせず直接玄関の開閉ボタンを乱暴に押し、対応に出た。

「はいはいっどちらさん？」

と少し苛つきながら玄関に出ると、そこには作業服を身に纏った青年が爽やかに笑んで立っていた。

「何？」

と聞くとその青年は顔色一つ変えず、笑顔のまま帽子を取りぺこりとお辞儀をする。

「お早う御座います！此方、スレッド・桐矢様のお宅で間違いないござ



「いませんでしょうか？」

と聞いてくるので、

「ん？…ああ、そうだけど？」

と答えると目の前の青年は、更に鬱陶しいほど爽やかな笑顔に向け

「私、ルンゲ修理工の配達専用ロボット、ビスラチエと申します。

修理の依頼を承っております、コラルロッドが今日出来上がりま  
したのでお届けに参りました！」

と更に更に営業スマイル。はじめはその精巧過ぎるロボットの笑顔  
に少し引きながら

「はっ…早いな。」

と一言。それを聞いているのか聞いていないのか、目の前の青年ロボ  
ットは笑顔のまま

「受け取りにサインを！」

と言って右股の側面をパカリと開け、指紋照合機を取り出しはじめ  
の前へ。

引きつった笑顔でそれに対応、右親指を照合機に当てた。

照合機が照合完了の音を出すと車（ここでは今現在の車と異なる）  
に積んできたコラルロッドをおろし、どこがどう駄目でどう修理を  
したのか簡単に説明してくれた。そして、一通り説明し終わると  
速やかに帰って行った。はじめはそのロボットの車を見送った後、  
修理から却ってきたコラルロッドを車庫に入れ、自分は家の中に戻  
った。

家に入ると、テレビを見ていた母親が

「誰だったの？」

と聞いてきたので自分の部屋に向かいすがら

「修理屋。」

とぶっきらぼうに告げ、そのまま自分の部屋に入った。そして、服

に着替えて隣の部屋を覗いてみる。しかし、弟のいる気配がしないのでリビングにいる母親に

「母ちゃん！ゆきるはあ？」

と大声で聞いてみる。すると母親は同じように大声で

「今朝、デートとか言って早くに出て行ったわよ！」

「あああ〜ん？デートだあ〜？あいつ何様だよっ！兄貴を差し置いて彼女を作るなんざあふてえ野郎だっ！」

と弟の部屋の扉を蹴った。

はじめはつまらなそうにリビングのソファアのーつに腰をおろすと、母親の小言が飛ぶ。

「こらっ！ドアを蹴るんじゃないよっ！まだローンが残ってたからっ！」

「はいはい…。」

と小言を聞くのも嫌で立ち上がり、逃げるように外に出た。しばらく玄関先でぼろ〜としたがつまらず車庫に向うと、ピカピカに直ったコラルロッドが目に入り、色々検分する。それでもすぐに飽きてどうしようかとコラルロッドに跨ったままぼろ〜としていると…。

「…！」

コラルロッドのスイッチを入れるとそのまま車庫から出て悠呂の自宅方面へ行く。

悠呂の自宅前に着き、ルンルン気分でコラルロッドから降りると玄関にある呼び出しボタンを押した。すると、対応もなくすぐに扉が開いた。

「？」

対応に出てきたのは悠呂でもなく、ミラハでもなくましてや父親でもなかった。白銀の髪に線の細い体の少女…そう星羅だった。

はじめは、一瞬びっくりしたがすぐに気を取り直し、

「よっ…よお！」

ときこちなく挨拶をすると、目の前の彼女は不思議そうに首を傾げ

た。

「悠呂、いるか？」

と構わず聞くと星羅は目を丸くした。はじめはその意味がわからな  
くて

「うえっ？いないのか？」

と聞くと彼女はコクンと頷いた。

「どこ、行った？」

と聞くと彼女は、首を横に振った。はじめは何だか嫌な予感がした。  
そこで2人固まっていると、星羅の後ろから間抜けな声が掛かった。

「星羅ちゃん、誰だい？」

と聞きながら、悠呂の父親が現れた。玄関まで来た父親もはじめの  
姿を見て、驚いたがすぐに顔をしかめた。それで、はじめは悟った  
…また何かあったと…。

## 第三十四章（後書き）

（〃 〃 〃 〃 〃） 何だか、ポンポンとストーリーが頭の中に出てきたので迷わず書きました。まだまだ、湯水のように湧いてくるので今の内にじゃんじゃん書きまくります。

## 第三十五章

「おじさんっ！悠呂がいないって？どこいったんすかっ！」

とはじめは悠呂の父親に問いただした。悠呂の父親は、額に手を当て仕方のない奴だと言わんばかりに溜め息をついた。この様子じゃ自分の予想が当たる…みぞおちの辺りがキュウと苦しくなった。

父親は、指の間からチラリと目をこちらにやり話してくれた。

「今朝早く、お前のところへ行くと出て行った…しかし、少し様子がおかしかつたんであいつが出て行く姿を玄関で見送った…。」

「おっ俺んちに？…おじさんっ確かに俺んちに向かったの見たのかよっ！」

「ああ、確かに真っ直ぐ、お前の家に向かう道へ行った。」

「んじゃっ！なんで来なかつたんだよっ！…いやっ待てよ…もしかして…。」

と言うとはじめは口を閉ざし顎に手を当てた。考えごとをし始めたはじめを見て悠呂の父親は、腕時計型テレビモニターをいじりながら部屋の隅へ歩いて行った。

(あいつ…もしかして、あの道を…。)

と考えていると

「ああ。俺だ…あいつを頼む。」

と言う声がして顔を上げた。何やら話す悠呂の父親の後ろ姿を見て、星羅の方へ目を戻すと彼女は青い顔をして自分と同じように父親の様子を見ていた。そしてはじめは、自分の足元に目を落とし堅く両拳を握った。悠呂に腹を立てていた。初めに禁止区域を探ると言った時、最後まで自分も付き合うと言ったのに…また何も言わずに知らせず一人で危険なところへ行った…また置いて行かれたその事に腹が立った。せめて一言言って欲しかった…。

そんな思いを巡らせていると、奥から悠呂の父親が怒鳴る声があった。そんなこたあわかつているっ！！だから言っただよっ！」

と怒鳴る悠呂の父親の様子を見て今すぐどうこう出来る雰囲気ではないと悟った。

はじめは、また足元をしばらく見つめ、次に自分の乗って来たコラルロッドに目を移すと顔をしかめた。まだ何事か言い争っている悠呂の父親を横目に見て、きびすを返すと迷わずコラルロッドに跨った。スイッチを入れようとした時、後ろに誰かが乗る振動がして振り向くと星羅が乗っていた。

「…おいっ。」

と言うと彼女は強い眼差しを向けて

「私も行く。」

と願いだした。

「…でも、おまえっ…。」

「お願い！…：こっとなったのも私が原因のひとつなんだものっ…。」と更に強い眼差しで言ってくるので、はじめは

「…：…：わかった。」

と前を向くとスイッチを入れた。

「しっかり掴まってるよ…：俺は悠呂みたいに安全運転じゃねえからなっ！」

とアクセスを回した。

「あぁっ…：それはわかってる。しかし、今を逃すと…。」

と悠呂の父親が話していると、どこからかコラルロッドの機械音がした。

「…：…：まさかっ！」

悠呂の父親は慌てて玄関に出ると

はじめが後ろに星羅を乗せ、今にもコラルロッドを発進させようと浮上しかけていた。悠呂の父親は慌てて飛び出し

「おいっ…：待て！」

と手を伸ばしたが、間に合わず2人を乗せたコラルロッドは浮上す

ると、凄いスピードで走って行ってしまった。

それを茫然と見送っている悠呂の父親の右腕から声がする。

「先輩！先輩！どうしたんですか！先輩！」

それに気づいた悠呂の父親はゆっくり右手を上げ、その中の人物を見つくと笑った。

「まったく…お前の従兄弟も俺の息子も、血の気が多いつつうかくなんつか。」

「へっ？」

とテレビモニターの中の人物が問い返すと悠呂の父親は息を吐き

「はあ…お前の後輩潜入員に伝える！俺達の可愛い潜入員が三名追加されたってなっ…。」

と言うと通信を切り、再びテレビモニターの通信を繋げた。しかし、テレビモニターに映った人物は先ほどの青年ではなく威厳のありそうな禿頭の中年男性だった。

### 第三十五章（後書き）

（．．．）え、最終話に向けて内容を詰めていっております。しかし、そんなに上手くまとまるかが心配です。一体、何章で終わるんでしょうか…作者ながら謎。（。A。；）って言うかさつき飛行機に電波もっていかれて、ここ打ち込んでいる最中に画面が真っ暗になって超おビビった！（T—T）全部書き直さなきゃならないかもと焦った焦った…飛行機、乗らなくても恐るべし…。



## 第三十六章

画面に現れた禿頭の男性は、しばらくこちらに気付く様子もなく誰かと会話中だった。それに構わず悠呂の父、浅乃木は画面に向かって声を掛けた。

「お早う御座います！澤田課長！」

その挨拶にやっと画面が繋がっている事に気付きこちらに顔を向けた澤田は

『何だ』と言わんばかりの不機嫌な表情をした。そしてこちらに近づくと表情を一変させる。

「おゝ君かぁ！久しぶりじゃないか？もう何年になる？」

と破顔する。それに浅乃木は嘘臭い笑顔を作ると

「かれこれ、4、5年半ぶりつてとこでしょうか。」

と応えた。すると澤田は柔和な顔で

「そうかそうか」

と頷き続けて質問をしてきた。

「それで、柚比ゆっぴと悠呂は元気にしてたかね？もう会ったんだろ？」

と聞いてくる。それに浅乃木は内心苛々しながら、再び笑顔で

「はい…悠呂とは。」

と応えると澤田は顔を曇らせ

「柚比とは会っておらんのか？」

と残念そうな声を出した。

その質問に顔を引きつらせながら、浅乃木は

「はははっ」

と笑つと、頭を掻きながら

「嫌ですなあゝ上の息子は課長の御命令で、他星の潜入隊員に任命されてすっ飛ばされたままですよゝ会えるわきゃありません。」  
と言つと

「そうだったか」

と澤田は笑う。

「そんな事より……。」

と浅乃木は顔を引き締めると、澤田も笑顔を引いた。

「私が長年、調査していた件であります……。」

と浅乃木が話し始めると澤田は黙って話を聞き始めた。

「アスラビ・尾崎 修造の裏が取れました。」

と浅乃木が切り出すと明らかに澤田の表情が変わった。

「それは本当か？」

「はい……確かに。尾崎に支援していた資産家達の足取りも掴め、

その内の一人をつついてやった所自供しました。」

と話すと澤田は顔の力を込めたまま笑った。

「やっとか……なかなか尻尾をつかませなかったあの男……。長かったな……。」

と呟くと、澤田は浅乃木を見た。

浅乃木は難しい顔をしたまま続ける。

「それで、そのアスラビ・尾崎の研究所にこの数年に渡り、数名の潜入隊を警備兵に紛れ込ませスレッド・桐矢が動向を探らせております。」

「うむ。それは報告を受けておる。」

少し、浅乃木は報告を躊躇した。

「じつ……実は……非常にお話し辛いのですが……。」

「？」

「その研究所に、今朝……その……。」

「ん？どうした？」

と聞かれ、再び頭を掻きながら浅乃木は

「うちの息子と、桐矢の従兄弟、それに尾崎の娘が勝手に潜入した模様です。」

とあっけらかんと告げた。その内容に澤田は一瞬ポカンとしたがす

ぐさま卓を叩き

「なっなっ…なんだとっ!!!」

と大声を上げた。

「それでですねえ、刑事課からの応援要請をとお願ひしたく……。」「これもまたあっけらかんと浅乃木は話す。

それに対して、澤田は顔を真っ赤に震えていたがすぐに溜め息をつき、ドカリと椅子に腰掛けた。

浅乃木は応援要請の答えをしばらく待った。当の本人は顎に手を当て渋い顔で何やら考え込んでしまっている。数分後、澤田は口を開いた。

「一応…上に掛け合ってみてやるが、あまり期待するなよ…。」

と言うと浅乃木は、眼鏡をクイツと人差し指で上げるとニヤリと笑った。

「ええ。それで十分ですよ…課長、それでは？」

と聞き返すと澤田は強く頷いて

「いよいよか…あの男を追って二十数年…時効というものが改正されていて良かった…ふふっ。そちらの件は令状を申請しといてやる。失敗のないようにしてくれ…。」

そう言うつと画面は切れた。浅乃木はぐさままたどこかへ画面を繋げた。

繋がった先は、再び諜報課。画面に出てきた受付の女性は浅乃木を見てすぐにわかったのか何も言わずとも青髪の青年に画面を変えてくれた。

はじめの従兄弟、清は驚いた表情のまま現れた。

「はいっ…先輩、今度はなんですか？」

と聞くが当の浅乃木はニヤリと笑っただけで何も言わない。それに清は訝しんでいると

「桐矢警部補！」

と後ろで受付の女性が呼ぶ声がした。

振り向くと、彼女は電話がきているとジェスチャーをした。清はそ

れに頷くと、再び真正面に向き直り浅乃木に話しかけた。

「先輩、すみません。なんか俺に電話が入ったみたいで…あのつ繋がたままちよつと待っててもらえますか？すぐに戻ってきますんで…。」

というとすぐさま席を立ち、画面から姿がなくなると椅子だけがグラグラと揺れているのが映っている。

ニヤリと笑ったまま浅乃木が待っていると血相を変えて、清は画面に現れた。

「せつ先輩！？たつ逮捕状がつ逮捕状が…。」

「清、落ち着いて話せ。」

と浅乃木が言つてやると、清は自分のデスクに置いてある茶を一気に飲み干し、深呼吸した。

「先程、課長から連絡がありました…。」

「うん。」

「アスラビ・尾崎 修造の逮捕状の申請が、今し方受理されたそうです。」

と聞き終わると、浅乃木はふつと笑った。

「ふん。だそうだ清。」

「せつ先輩知つてたんすか？」

「さあ…どうだかな。」

「先輩！」

と言いかけたのを遮って浅乃木は訊く。

「その他の事はなんか言つてなかったか？」

と言つと清はぶすつとした顔をしながら

「いいえ、特には。」

「そうか…まっまだ早いかな…。」

と言つと浅乃木は面白そうに口端を上げて笑った。

清はその表情に呆れて溜め息をつくつと、

「それで…課長が作戦についてのまとめを資料にして送れつてこと

なんで……。」

と切り出すと浅乃木は

「わかった。ほんじゃあ俺もそっち行くわ。」

と画面を切ると、そのまま地下駐車場に置いてある車に乗り込んだ。

## 第三十六章（後書き）

（・・）え、長らくお待たせいたしました。読者様、あけましておめでとうございます。（＜A＞；）年末にインフルエンザA型なるものにかかりまして、正月早々寝込んでおりました。（。A。；）恐るべしインフルエンザ！皆さんも気を付けて下さいまし！（〃^ ^〃）本文の方はラストに向けて話を徐々に詰めているつもりです。皆様最後までお付き合いくださいませ

## 第三十七章

悠呂は気分を落ち着かせると、階段を降りきり人が1人入れるか位の幅の鉄扉の前に立った。

ボンヤリ光る間接照明に照らされたその扉は、鉛色をむき出しに冷たい印象を与えた。

「？」

自動扉だとはがりに思っていた悠呂はなかなか開く様子のない扉を不思議に思った。自動扉ではないのならと扉横左右を見回してボタンらしき物を探してみたが見あたらず、仕方ないので冷たい鉄扉のあちこちを触ってみた。右側の辺りに丸い窪みを見つけ

「何だろっ？」

と手の中に入れてみると、半円形の突起物が中にしまつてあつたのでそれを窪みから立ててみた。しかし、扉は開く様子もなくどうしたものとカチャカチャと弄っていると、何かの拍子に扉は音を立って少し開いた。

悠呂はドキドキしながら扉の隙間を覗いてみた。中はこの場所同様にぼろりと光っている紫色の蛍光灯が等間隔に天井に並んでいて、細長い廊下を照らしている。その不気味さに気後れしそうになる気持を何とか奮い立たせて扉を手前に開けてやると、ギーと嫌な音を立てた。

恐る恐る中に入ると、一層不気味さが増す。取っ手から手を離し身震いしていると後ろで勢い良く扉がバタンと閉まった。

「うっ…うわあ…!!」

驚いて尻餅をついてしまった。

閉まりきった扉を見て悠呂は溜め息をついた。

「はあ…なんだ…扉の閉まる音だったのかあ…。いつもは自動扉だから…扉が閉まるとこんな音を出すなんて…知らなかった…」

そう言うと、悠呂は座ったまま改めて周りを見回してみた。

天井には不気味な色の蛍光灯、左右は圧迫感のあるコンクリート打ちっぱなしの壁、周りは静かで耳の奥がキーンと鳴っている。扉側に向いている体を捻り、後ろを見るとどこまで続いているのか細長い廊下がある。

悠呂は深い溜息をつくと体を正面に戻し、体育座りをしてその膝に顔を埋めた。この何も聞こえない空間が、改めて自分の行動の意義を問う。

（僕は…なんでここにいいのか？こんな危険な怖い思いまでして…？スリルを味わいたいただけ？それとも興味から？…一体何してんの？…後悔…してるのかな？僕…。）

『私は…もしかしたら、ここにいてはいけない存在かもしれない。』

悠呂は、ハッと顔を上げた。

『私…私は…クローンかもしれない！』涙をこらえ震える声で自分に話した星羅の顔と声が脳裏によぎった。自分の存在があつてはならない物だと…苦しんできた彼女…。

悠呂は勢い良く立ち上がると迷いもなく、細長い廊下の奥を目指し歩き出した。

（…僕は…僕は何を弱気になっていたんだ…家を出る前に…決心したんだ！あいつに…アスラビ尾崎に、一言いってやるんだって！そう決めたんだ！）

悠呂は堅く拳を握った。

細長い廊下はどこまでも続いていて、ようやく突き当たりに辿り着くと先程と同じような扉が現れた。今度の扉はボタン式のように扉の横の壁にちゃんと操作ボタンがあった。

今まで誰にも見つからなかったが、次はどうなるかわからないので



一応扉に耳を当て中の様子を窺ってみる。何も音がしないので、壁に身を隠しながら開閉ボタンを押した。そして、壁に背をつけながらそおくと中を覗いてみる。色んな所に目を向けてそこがどうやら何かの倉庫だと分かった。

その証拠に、大きな鉄性だろうか？棚に荷物が一杯積んである。

誰もいない事を確認して中に入ってみると、意外には奥行きが深く広がった。悠呂は高い天井を見上げながら、一歩二歩と奥に進んでみる。途中で何かツンとするような匂いがしてきた。

「…消毒液？…なんだろう？薬品の匂いがする…。」  
とりあえず、匂いのもとを探し棚に積んである荷物の一つに目をやった。

その荷物にはラベルが貼ってあり、理科の実験で使った事があるような無いような薬品の名前が書いてあった。

「……これは…もしかしたら、クローンに使う薬品なんだろうか？」  
そう呟くと、大きな鉄製の棚に同じような荷物が整然と並ぶさまを見上げて、背筋をゾツとさせた。

何だか気持ち悪くなって早くここから出ようと出口を探していると、ボソボソと何やら話す人の声が出てて慌てて手近にある大きな荷物の陰に隠れると、すぐに足音が2つこちらに近づいて来る音がする。

悠呂は、ドキドキしながら近づいてくる足音に気付かれぬよう息を潜めた。

### 第三十七章（後書き）

（・・・）え〜…一応書くことはまとめてノートに『こんなん』て書いてやっておるんですが…書き込みになりますといわゆる清書つてやつなんで、ノートに書いたものとは多少変わってきます。ノートではこうかいてあるが書き込みはより読みやすとか、分かりやすく説明加えつとかやってネチネチやってる内にまあ〜これが飽きてくるんですね〜笑それで手を休めてテレビなんかつけてしまつて、見入ってしまうと手をつけずにズルズルと今日に至るわけです…計三日ってとこです…はい…すみません汗これからも宜しくお願ひします！

## 第三十八章

悠呂が身動きせず潜んでいると、話し声が段々ハッキリと聞こえる位置まで近付いて二つの足音は止まった。

「おいっ…聞いたか？」

「何を？」

「星羅お嬢様の話だよ。」

「あああれだろ？なんかいつもの夢遊病じゃなくて連れ去られたやつ…。」

「そうそれ。なんかあゝ警備兵の話を知っちゃったんだけど、連れ去った奴ってまだ子供だったらしいぜ？」

「はっ？何だよそれ？」「まあちよこちよこつと聞いた話しなんだけどさつ。なんかまだ少年で…ほらっなんつたか…通学に使うバイク…ほらっ…えっと…あれあれ。」

「コラルロッドってやつか？」

「そうそう！それぞれっ！それで、なんか後ろに星羅お嬢様乗っけて逃げたらしいよ。」

「ふん…。」

と話す内容から、この建物の中では星羅の事は連れ去り事件になっているようだ…。悠呂はその話にし少し焦った。そんな話になっているとは予想外だった。

悠呂は呼吸を整えて二人に気付かれぬよう、そおと様子を見ている。

そこには短めの白衣、（よく歯医者さんとか着ているような物）に下は黒いズボンといった格好からどうやらこの研究員のようだ。

一人の眼鏡を掛けた男性は、話しの続きをしながら鉄製の棚に並ぶ荷物ラベルを上から順に探すような仕草をしている。もう一人の

茶髪で細身の男性は、手近にある荷物の箱を開け、中から何やら液体の入った瓶を二つ三つと取り出していった。

探し物をしていた眼鏡の男性は目当ての荷物が見つかったのか

「あつた」

と呟いて棚から箱ごと重そうに取り出すと、体を揺すって持ちやすいように抱え直し向きを変えて歩き出した。

それを見た茶髪で細身の男性は、瓶を一、二個脇に挟むと更に箱から一個、瓶を取り出し蓋を閉めて眼鏡の男性に続いた。

その茶髪で細身の男性が

「あつそうそう。」

と切り出した。

「なんでもアスラビ・尾崎所長、かなりご立腹らしいぜ?」

そう聞いた眼鏡の男性は荷物を抱えたまま振り向いて

「そりやそうだろうなあ、かなり娘に入れ込んでるものな。」

「それだけじゃなさそうだぜ?あの敏腕なアジュラーチ隊長がその子供を取り逃がしたってんでかなり時間が掛かっていることにもお怒りみたいだぜ?」

「うへえ、こえ、こえ。こつちにもとばつちり来なきやいいけどなつ。」

そんな話をしながら二人は出口だろう方へ歩いていく。もう少し詳しく内容を聞いてみたいが、遠のいていく二人の声は小さくなっていく為、諦めるしかなかった。悠呂は、二人が歩いて行ったであろう方向に目をやり、少し身を乗り出して二人の背中を見つめる。そして歩く先に更に目をやり、出口の場所を確認した。

その直後、出口だろう場所から光が漏れているのが何かに遮られた。

「?」

と思っているとその遮った影が

「大変だつ!!!」

と大きな声を上げた。それに驚いた悠呂は、物音を立てそうになつたが慌てて荷物の陰に身を隠した。

荷物をもった二人が

「どうした？」

とか

「何かあったのか？」

と口々に大声を立てたのが聞こえた。

（侵入したのがバレたのか？）

と焦ったが急を告げにきた男の声を聞いて違うとわかった。

「ここがヤバいんだ！いいから！お前等も早く来いっ！」

と言われ二人は

「わかった！」

と声を揃えて答えるとすぐに三人分の走り去る足音がして、そして扉が閉まる音がした後は再び倉庫内に静寂が戻った。

シンツとした倉庫内に物音一つ聞こえないことを知ると、再び荷物  
の陰から身を乗り出して誰もいないことを確認し、素早く飛び出し  
て小走りに出口を目指した。

扉の前に到着するとすぐに扉の両脇の壁を確認する。

どうやら右側に操作ボタンがあるので、ボタン式開閉ドアだと認識  
する。ドアのボタンの確認をしている間も何だか外は騒がしい、悠  
呂はその内容が知りたいのもややあって扉にそつと耳を当ててみた。  
表では、バタバタ何人か走る音とそれに混じって切れ切れに声も聞  
こえる。

「ヤバいぞ……が……でバレたら……。」

「……が裏切った……。ちきしょー！」

良くは聞き取れないがどうやら、大事があつたらしい……。悠呂は、  
これは『しめた』と思った。

この騒ぎに乗じてアスラビ・尾崎のいる最深部の部屋まで行けるの  
ではないかと考えた。

しかし、今出て行つては捕まってしまう……騒ぎが少し収まってから

「」を出しつと結論に達し、しばらく倉庫に潜む事にした。

### 第三十八章（後書き）

（・・；） えゝ…長らくかな？お待たせしました…えつとずつとどう展開するか思案中でした……はいつ嘘です…ごめんなさい（T|T）実は全然思いつかなくて、小説本を本屋に漁りに行ったりしてました…これほんとはゲームなんか今回は一切してません！後、それとここに投稿されている他の先生方の小説を敵情視察（良い意味でよっ！）も兼ねて読み漁っておりますっ！こんな私ですが…どうか…（<口>；）見捨てないでえゝ

### 第三十九章

はじめは星羅を後ろに乗せている事も忘れ、禁止区域へ向けてコラルロッドを物凄いスピードで走らせていた。勿論、女の子を後ろに乗せて走るなんて生まれて初めての事なのに、そんな事は頭の片隅にもなかった。

そんな事より悠呂の心配：いやっほんとんど怒りで、『あいつに会ったら一発殴つてやるうか？それとも飛び蹴りをくらわしてやるうか？』とそればかりぐるぐる考えていて、後ろで星羅がいくら話し掛けても、全然気付かないでいた。

そして、目の前に障害物が見えて思いつきり避けた時に自分の腰に手をまわしている誰かの腕がクツとキツくなって、改めて星羅の存在を思い出した。

「あつ！…ごめん…大丈夫…か？」

とスピードを緩め後ろを向いた。

しつかり、はじめの腰に抱き付く形でいた星羅は緩くなったスピードに気を許し力を抜いて顔を上げた。

「ふう…ちよつと…ううんっ…かなり辛かった…。」

と不満顔で口を尖らせた。

「いやあ…わりい。考え事してたら、夢中になっちゃって…。」  
と照れくさそうに頭を掻いた。そんなはじめの顔を星羅はじつと見て…。

「多分…こんな事になったのは…私のせいね…私があんな事言わなければ…こんな事には…ごめんなさい。」  
と震える声で言った。

その表情と言葉に一瞬、驚いたはじめはすぐに真面目な顔になって「なんであんな謝んだよ…謝られる意味がわかんねえ…」とすぐに視線を逸らし前を向いた。

そんなはじめに星羅は



「だって…あたしがっ…。」

と言いかけたのを遮ってははじめは、少し怒っているような口調で星羅に背中を向けたまま

「何をあいつに話したのか知んねえけど…でもっ！一番わりいのは、後先考えずに飛び出して行って…俺を…いやっ…みんなを心配させてる悠呂だっ…！」

と言うと、怒りでかはじめの背中は少し小刻みに震えていてそんな背中が、彼と悠呂の絆の深さを物語っていたのが星羅には、羨ましいようで申し訳ないような複雑な気持ちにさせた。

禁止区域、もとい研究所付近に到着した二人は少し離れた建物の陰にコラルロッドを止め、様子見をした。

正門から、フェンスにかけて相当数の警備兵が嚴重に周りを固めていた。

「ふえ〜かなりの数がいるなあ〜くそっ！」

とはじめはボヤきながら壁に背を預け、外を見ていた。星羅はその様子を見て、何か方法はないかと辺りを見ると、ふっと何かが目に入った。なんだろうとその物に静かに近づいて行き、クッキリその物の形を捉えてはつとした。

外の様子を見ていたはじめの肩を叩く者があって

「ああ？」

と振り向くと、星羅が緊張した面もちで何か言いたそうに立っていた。

「何？なんかあったのか？」

とこの状況に苛立つはじめは少しキツイ口調で問いかけた。

「うん…ちよつと…こっち…来て。」

と星羅は手招きしながら、先に歩いて誘導する。訳のわからないはじめは星羅の後について行った。

歩き出してすぐの所で星羅はこちらを向きながら、どこかを指さし

ていた。

「？」

とその先を辿ると、見たことのあるコラルロッドが何かから隠すように置いてあった。

「……！」

思わずはじめは、そのコラルロッドに駆け寄った。

「……っ……これ……。」

「うん……そう……じゃない？」

と星羅の言葉を聞いて、すかさずはじめはコラルロッドの運転部にあるボタンを操作し、ある画面を出した。

そう、このコラルロッドを支給される時に最初に打ち込む所有者データ。その画面には悠呂の顔写真入りのデータが表示されている。

「あいつ……こんな所に……所有者データの存在忘れてんじゃねえのか……あの馬鹿……。」

と呟くとはじめは、座席部のクッションに思いつきり拳を叩きつけた。

そんなはじめを見ていた星羅は、はっと気付き改めてそのコラルロッドを置いている場所を確認した。

「……！」

星羅は、はじめがさつき様子を見ていた反対側の壁、そのコラルロッドの置いてある側の壁の隙間へ駆け寄り、そこから外を見た。

「……おっ……おい？どうしたんだよ？」

と星羅の行動を見ていたはじめは不思議そうに声を掛けた。

「……まさか！」

その声を発した星羅は何を思ったのか、そのまま外に飛び出して行った。

「……！……っ……おいっ！まつ待てっ！」

あまりの事にはじめも釣られて自分も出てしまった。

「あっ……。」

### 第三十九章（後書き）

（　○　）　今回は！はじめきゅんと星羅ちゅわんのお話し！…（　Ｔ  
　　―　）　愁真…頑張りました…さてさて、この一話に収縮してはじめ  
きゅん話を詰めようと思った愁真ですが…編集、付け足し等々をし  
ている内にですねえ…

（　Ｔ皿Ｔ　）　こんななっちゃった…（　\*　^　-　^　）　bなるの〜でっ次

回　もこの続き！はじめきゅんと星羅ちゅわんのお話しになります

（　+　―　+　）　お楽しみ！

## 第四十章

はじめが見ている光景は、まるでＴＶで見るスローモーションのようだった。目の前を走り去って行く星羅の後ろ姿、自分達に気付き群がるようにこちらに駆けてくる数人の警備兵達。全ての動きがゆっくりゆっくりと、はじめの瞬き一つ一つでコマ送りのように場面が次々変わってゆく。

その内の一コマに、星羅が何人かの警備兵に囲まれ、それを振り切るうとするがその中の二、三人に捕まりもがく彼女の姿が見えた。それまで現実を把握できず客観的に見ていたはじめだったが、はつと我に返り彼女を助けなければと気がつけば走り出していた。

「は〜な〜しい〜…。」

とその走った勢いのまま、はじめは足に力を入れ飛躍した。

「やがれっ！！！」

目の前で星羅を囲って居た一人の警備兵の横面めがけて、はじめは跳び蹴りを食らわした。

蹴られたその男は、

「ぐあっ！」

と呻き声を上げ、少し飛ばされる形で地面に倒れ伏した。

それを目の当たりにした、もう一人の警備兵はギョツとして星羅を捕まえた手を引き寄せ後退った。跳び蹴りから着地したはじめは、

「だ〜か〜ら〜…！」

その足で星羅を捕まえているこの警備兵の隙だらけの懐めがけて、

「離せっつってんだっ……。」

頭から突っ込んだ。

「よっ！！！！！」

思いつきり腹に頭突きを食らったその警備兵は、

「ぐぶっ！！！！！」

と声を上げ、はじめと共に後ろに少し飛ばされ仰向けに倒れた。その拍子に警備兵の手から離れた星羅もまた、勢いに釣られ尻餅をついた。

「きゃっ！！！！」

その警備兵の上で四つん這いになっているはじめは、頭をブンブンと振った。意外とこの男の腹は堅かったのだ、頭がクラクラする。はっと気づいたように顔を上げ、星羅を見つけると

「今の内だっ！早く行けっ！」

と促した。

痛そうに腰をさすっていた星羅は、はじめを見て

「でもっ…あなたは？はじめくんはどうするの？」

と訊いてきたので、

「俺も後からついていくからっ！早くっ！」

と急かした。すると彼女は頷き、ゆっくり立ち上がると背を向けた。そして一度こちらを振り向くとすぐに顔を戻し走って行った。

それを見て、はじめもゆっくり立ち上がり後を追おうと踏み出したその時、目の前に大柄な警備兵が立ちふさがった。

「！！！！！」

はじめは、その大きく横に手を広げた大柄な警備兵を、睨みつけ

「どけよっ！」

と無理に行こうとする。しかし、大柄の警備兵はテコでも動こうとせずかわりに

「少し落ち着け…これには…わけっ…。」

ガスっ！！！！！！

「%&…！！！！！」

はじめの蹴りが、彼の股間にクリーンヒット。大柄な警備兵は言葉にもならぬ呻きを上げうずくまった。

「どけって行っただろっ？んじゃ〜なっ」

とうずくまる大柄な警備兵を避け、その先へ行こうとして足が止まった。フェンスの近くで再び警備兵と揉み合う星羅。

「くっそっ！あいつら！次から次へと…！」

殆ど、溜め息混じりでそこへ向かおとして誰かに肩を掴まれた。

「!?!?!」

『またかつ！』と思いはじめは後ろを振り返り……………

絶句した。そこには見覚えのある、自分と同じ青い髪をした青年が苦笑いをして立っていた。

「…しっ…清…兄い…ちゃん？」

その見覚えのある青年の背後から、間抜けな聞き覚えのある声があった。

「あ〜あ〜。俺等の可愛い後輩達をこんなにしちゃってえ〜。」

はじめは、清の後ろに目をやってみる。先程倒した大柄の男の傍にしゃがんで、彼の腰をポンポンと叩いてやっている細身の中年男性。

「おっ…おじさん…。」

そのはじめの声を聞いた悠呂の父親は、ズボンのポケットに手を入れたままゆっくり立ち上がってこっちを見た。

「よくも…まあ〜。」

と言いながらゆっくりこちらに近づいて、ポケットから手を出すと

はじめの肩に手を置いた。

「ここまで暴れまくっちゃって…だあれに似たんだか…。」  
と大仰に傍に立つ青年に悠呂の父親はチラリと目をやった。

「ちよっ…ちよっ先輩っ！俺のせいなんすかっ？」

と清が抗議すると、悠呂の父親は顎をしゃくらせて

「はあ…い…この事件が解決したら始末書、お前が全部書け！」  
と清の前に指先を突きつけた。

「そっ…そんなあ…ズルいですよっ先輩！」

そんな二人のやりとりをはじめは、ぽか〜んと見ていた。

ギャーギャーと二人がやり取りしているとキビキビした声が割って入ってきた。

「お疲れ様ですっ！浅乃木警部！桐矢警部補！」

と一人の年若い警備兵が二人に敬礼した。

その意外さにはじめは驚いた。



## 第四十章（後書き）

（\*^ - ^）b予告通り、はじめきゅんが暴れたくりました。しかし…（T | T）アクシヨンシーンって表現するのって難しい…シクシク。（- - - ;）今回も、打ち込みながらあーでもないこーでもないと編集しもつての執筆だったのでかなり時間がかかりました…（^ | ^ ;）途中で逃避行しちゃったりなんかもしましたが、無事四十章を書き上げる事ができました。m（ | | ）mこれからも頑張りますので応援の程宜しくお願いします。

## 第四十一章

星羅がある少年に連れ去られてしまつて以来、私（修造）は自宅に戻らず研究所に詰めていた。しかし、研究に手がつく筈もなく自室でただただ廃人の様に机上に飾つてある娘の写真を瞳に映していた。

何時間かに一回、研究員が食事を持って来たり、研究内容の指示を仰ぎに来たりしていたが、私はそれにも一切応えずにしていると、次第に出入りする数も減つていった。

そんな中、静かに部屋に入って来る者がいた。

また研究員だろうと見向きもしなかつたのだが、私の姿を見るなり大きな溜め息をつき、聞き慣れた靴音を鳴らしながら傍に歩いてくる。

「何時間……いやっ何日そうしているつもりだ……修造。」

若い頃と変わらぬ低い声で問いかけながらいつもの様に後ろに立つ。私はゆっくり後ろを振り向いた。そこには自分と同じように歳を重ねた老齡な顔、しかし私を見る彼の瞳は昔のままで真っ直ぐこちらを見て離さない。私は初めて会つた時から彼の力強く、正義感に満ち溢れたこの瞳が苦手だつた……何か自分が責められているような……。彼から視線を逸らし、真正面に向き直ると机の引き出しから葉巻を取り出して、火を点けた。

煙りがゆつたりと周りを包む

そうするといつも黙つて彼は灰皿を差し出してくれる。そんな彼の気遣いが、なんだか安堵する。ひと吸いしてからその灰皿に灰を落としてやる。

「村瀬……覚えているか？」

そんな切り出して私は話し始める。

あれは確か、まだ名の通った病院の研究チームに在籍していた頃、総合研究長から呼び出しを受け、研究長室に行った時だった。当時、すでにその課のチーム長を就任していた私に研究長は言った。

「アスラビ・尾崎君、君のチームの研究がなかなか良いと聞くよ。」  
「はいっ…ありがとうございます。」  
「ふむ。ところで君は何故私に呼び出されたのか分かっていないだろう…。」

「……はい。」

「ふむ。今の研究…はどう言った物か君には理解できているかね？」

「……はい。」

「ふむ…では、話そう。今の研究が成功すれば、君にその課の研究長の座を譲ろうと思う。」

「えっ!?!…あのっ本当ですか？」

「ああ…頑張りたまえ。」

その言葉に興奮したが、次の言葉でその気持ちは一瞬にして凍りついた。

総合研究長は顔の前で手を組み、鋭い眼孔でこう言い添えた。

「今の研究の更なる高みへ…ひいては3000年前に失敗した我らの望み…人のクローンを作り出す…アスラビ・尾崎君、任せたよ。」

頭を深々と下げ、研究長室を後にした。

『研究長の座を譲る』

その意味が分かったような気がした……しかし、すでに娘の具合が悪くこの病院に入院をさせていた。研究長に就任すれば莫大な研究費が貰えるのは確実。もしかしたら、娘の病に効く薬の開発も夢ではない……。

そういう思いもあって研究長就任の件を引き受ける事にした。

そんな時、私付きの警備兵が変わったのだ。私の研究の危うさを考慮し総合研究長が送ってきたのが彼、アジュラーチ・村瀬 湛三。彼も副隊長の座を譲られたばかりで私の元に送られてきた。言わば、捨てゴマ同士と言ったところだろうか……。

彼は、私の自室に入ってくるなりビシツと背筋を伸ばすとかかたとを鳴らし、スツと敬礼をして配属の挨拶をした。

「初めまして、アスラビ・尾崎教授。今日から配属になりました。アジュラーチ・村瀬 湛三と申します。」

そう言っで見つめてくる彼の瞳は、力強く正義感に満ち溢れた目で警備兵に最も適した男……といった印象を受けた。私はこれからしていかなくてはならない法律スレスレの研究の後ろめたさもあってか、真っ直ぐこちらを見て離さない彼の瞳をまともに見る事ができないでいた。

「あつ……ああ。これから、よろしく頼むよ。」

それから、数年後私のチームの研究は順調に進んでいた。そして、

ある日再び総合研究長に呼び出しを受けた。

研究長室に行くと、そこには他課の研究長及びチーム長が数を揃えていた。何事だと総合研究長に目を向けると、彼はただ入室を勧めてくるだけだった。

仕方なく勧められるがまま、一つのソファに腰を下ろすと、総合研究長は話始めた。

「君に来てもらったのは他でもない…、皆と話しをしていたのだが…。」

と総合研究長は、自分専用の椅子に腰掛けると、いつものように顔の前で手を組んだ。

「君に、今の研究の論文を書いて貰いたい…勿論、君の名でだ。」

「えっ？…しかしっ…。」

「今の研究の成果を世に知らしめるのだ…やってくれるね？アスラビ・尾崎君。」

とんでもない事を言い出した。今の研究をやっていること事態、法律ストレスなのだ。そんな事をすれば、今までやってきた研究や教授生命を絶たれてしまう。そうなれば、同時進行していた娘の薬の研究も…。

私は、思いつきり机を叩いた。

「冗談じゃありません!!!」

これには黙っていられなかった。

「そんな事をすれば、マスコミは愚か警察だって動きますっ！ましてやっこの病院だって危なくなりますっ！私は賛成できませんっ！」  
そう反論するも、周りはヒンヤリと冷めた反応を見せた。

そこへ、総合研究長が話し出した。

「確か…この病院に、君の娘が入院しているらしいね…。」

「！！！！…そっそれが…何か？」

と言うと総合研究長は何とも不適な笑みを見せて

「彼女がどうなっても構わないのかね？確か…その薬も研究しているのだろう？君は…。」

やられたと思った。全てお見通しだったのだ。

力無くソファアに腰を下ろすと、総合研究長は席を立ち、私の肩に手を置いた。

「頼んだよ…。」

と一言。その言葉を皮切りに、他課の研究長やチーム長は微かに嘲笑しながら退室して行った。

仕方なく、私はそれに従い論文と同時に研究成果の一部を発表した。

…結果、大いにバッシングを受けた。マスコミは医師会追放だなんだと騒ぎ立てる。私はいたたまれなかった…。そんな苦しい折りも彼、アジュラーチ・村瀬は私の護衛だなんだといつも傍にいてくれ、励ましてもくれた。

そんな最中、私は正義感溢れるこの男に質問をぶつけてみた。

「…村瀬さん、あなた…私が何をやっているか知っていますか？」

マスコミの騒動に疲れ、灰になったように自室のソファ―に腰を下ろしながら訊く。

彼は、ブラインドを降ろした窓から外の様子を見ながら答えた。

「ええ…。」

その横顔は、訊くまでもなく全てを知っている様子だった。

「なら何故…。」

と訊くと彼はこちらに顔を向け

「それでも、あなたを守る事が自分の仕事です。」

そうこの男は言った。真っ直ぐな瞳で…。

それからすぐ、娘の最期を看取ると私は医師会から離脱した。総合研究長の狙いは明らかだった…責任の転嫁…娘を失った今となってはもうどうでも良い…。

私は自室で職場の整理をしながら、黙って片隅でいつものように立つ村瀬に言った。

「もう…私の護衛はする必要はない…村瀬さん…元の職場に戻って下さい。」

しかし、彼は片隅でこちらをじっと見ると

「アスラビ・尾崎教授…私もついて行きます。」

と言って私の前にデータを開いて見せた。それは、村瀬が所属していた警備兵所の書類で『退職受理』と赤く記されてあった。そうか…お前も私と同じ捨てゴマだったな…と改めて思い出した。

それから、職を失くした私達であったが私は莫大な退職金をつぎ込み『D-3ブロック』の立ち入り禁止区域の土地を買い取った。村瀬も退職金で自分の警備兵所を立ち上げた。

「私は、お前が理解出来なかった。」

と遠い目で私は、萎れてシミだらけの手に持つ葉巻を口に含み、煙を吸った。

すると、アジュラーチ・村瀬はフツと笑い。

「なんだ…いきなり。」

と言って窓際に歩きだした。

私は遠い目から、机上の写真立てに目を落とし続ける。

「私についてきたって…その先どうなるか…わかっていた筈だ。」

村瀬は、昔と変わらず背筋をシャンと伸ばして手を後ろに組んだ姿で私に背を向けている。

しばらく間があった。

「私は…あなた付きの警備兵になって…あなたをずっと見てきました…そしてあなたの人柄に触れた…そんなあなたに私が惚れ込んだんです。だから私はあなたについて来ようと思った…それがこの先、



どんな運命を辿ろうとも…只、それだけです。」

そう応えた彼はこちらに振り返った。初めて会った時の様な口調とその真つ直ぐな瞳で……………。

私は、初めてその瞳を見返せた気がした。

そんな時、呼び出しブザーがけたたましく鳴った。何事かと、村瀬が私の机上にある応答ボタンを押し、画像が現れた。それは研究員で慌てた様子だった。

「どうした？」

と村瀬が訊くと

「ああ、アジュラーチ村瀬隊長おいででしたか…：大変なんですっ！早く来て下さい！」

と言う。私と村瀬はお互い目を見合わせた。

## 第四十一章（後書き）

お待たせいたしました 四十一章！実は：四十章まで書いて気づいた事が……笑（ ; ）じいさんの事いっこも書いてへえくん！これじゃあ最後に持っていけないと焦った愁真は慌ててこの四十一章にじいさんの話を突っ込みました笑（ ^ - ^ ）（ ^ - ^ ）これで全体の描写がまとまればよいなっ と思います（ ; ）A（ ; ）でも内容的には合ってるのか？とまたまた焦る私なのでした笑

## 第四十二章（前書き）

あのっ…段々書いている内に調子にのっちゃってまた2ページ書いてしまいました…携帯からご覧になる方読みづらいですよね…ごめんなさい

（「—…：（。°。：（「— …）ペロペロ」

## 第四十二章

はじめは、どうして禁止区域を警護する警備兵が警察である悠呂の父親へと挨拶するのか？そして従兄弟である清も居て『桐矢警部補』等と呼ばれているのか？全く持つてわからない事だらけで、頭の中はパニック状態だった。

気づくとギヤーギヤーと言いつけ合っている清の元に近寄り、幼子のように裾をツンツンと引っ張っていた。

それに気が付き、こちらを振り返った清にその疑問をぶつけてみる。「なあ、なんであの警備兵の兄ちゃんが2人に挨拶すんの？つか：清兄ちゃんは何で警部補なんて呼ばれてんの？兄ちゃん、受験失敗して十年も家出してたんじゃねえの？」

その質問責めに…そして、最後の言葉に清は絶句した…。

「あはははははっ！こりゃいいやつ！ぶーっ！十年も家出たってっ！がははははっ！」

と悠呂の父親が腹を抱えて笑い出した。

傍にいた年若い警備兵も必死に笑いを堪えている。

その場で笑いが止まらぬ様子の悠呂の父親と必死に笑いを堪えようとしている警備兵の姿を見た清は顔を赤くすると、はじめの頬を両手で挟み

「お前っ！！そりゃ嘘だっ！つかっどっからそんな話を聞いたんだよっ！」

と詰め寄った。

清に両頬をサンドイッチ状態にされたはじめは、アグアグしながら

「だっ…だれっで…おばっ…おばちゃんから…。」

「ぶあはっはっはっ！ひい〜！こりゃ面白え〜ぶあはっはっはっ！」

と笑いたくる悠呂の父親に清は顔を向け

「先輩っ！笑い過ぎですっ！」

と怒鳴った。

「うい〜っわりい。悪かった。」

と悠呂の父親は涙を指で拭いながら、笑うのやめた。

「一ではいいか？俺は、受験には失敗なんかしていない。ちゃんと警察学校に行つて卒業して、ちゃんと警察として働いてるぞっ。」

とはじめの両頬を挟んだまま、しっかりと目を見つめて訂正する。

両頬を挟まれたはじめは逃れようともがいた。

「うう〜！わがっだっ！わがっだから…離せよっ！」

と振り払った。その勢いにヨロヨロと清は後退ると頭を抱えた。

「くっそ〜お袋の奴う〜なんて嘘つくんだっ…たくっ！」

そう愚痴る声を聞いて悠呂の父親は『そうでもないぞ』とその場に座った。

「どっという事です？先輩。」

と聞くと悠呂の父親は頭をポリポリ掻きながら

「恐らく…あのタコ親父の仕業だな…。」

「へっ？部長の？」

と聞き返すと、悠呂の父親は胸ポケットから煙草を出し、火を点けた。そして煙をひと吸いしてから

「俺なんか、四年も新星開拓に駆り出されてる事になった…。」

「……先輩のがまだいいじゃないですか…。」

と清は恨めしそうに悠呂の父親を見た。

「あははははっ！まっそうだか…あのハゲタコ親父の嘘にや付き合いきれねえな…。」

と煙草を口にくわえると、

「ん？」

と声を出すとすつと真剣な顔になった。

「お疲れ様です！浅乃木警部！桐矢警部補！連絡のありましたお嬢さんを確保してお連れしました。」

とキビキビした声が後ろから聞こえたので、清とはじめは振り返った。

そこには、俯き加減に歩いてくる星羅の姿があった。

「おう…ご苦労さん…で？中の様子はどうだ？作戦通りにことは運んでいるか？」

と悠呂の父親が眼孔鋭く、後から来た警備兵に訊いた。

すると少しガツチリ目のその警備兵が声を小さくして

「はいっ…何とか…でも、浅乃木警部の息子さんの行方はまだ…しかし…先程、息子さんの物と確認できる乗り物が見つかりましたので…中にいる事は確かかと…。」

はじめはその話を聞いて、さっき見つけた悠呂のコラルロッドと気が付いた。

(…こんなに早く見つかるものなのかよ…マジで見つかったらどうするつもりだったんだ…あのバカ…)と爪を噛んだ。

「ねえ？これはどういう事なのかしら？」と星羅がはじめの横に立つ。

「うっ？あっ…ああ。俺も良くわかんねえけど…俺等がここへ来る前、おじさんがどっかに連絡してたから、それがなんか知らねえけど通ったかなんかじゃねえかな…」  
「ふう〜ん。」

と相槌を打って、星羅は何やら話す四人の姿に目をやった。

「…私達…無駄だったのかな…あんな事しなくても悠呂君…助けられたのかもね…」  
とポツリと呟いた。

その言葉にはじめはムツとして…。

「無駄なんかじゃねえよっ！俺等が騒動起こさなかったら警察なんて動きやしなかった筈だっ！それに…ここに来る前にだっておじさん揉めてて、どうなるかわかんなかったんだしよっ！」

とはじめは怒気の籠もった声で言い捨てた。

「警察が動かなかつたら…俺だけでも悠呂を助けに行ってたさ…。」

最後は力無く呟いて、悠呂の父親達の方に目を向けた。

すると話し終えたのか四人の内、警備兵二人が元の場所に戻って行く。それを星羅と二人見ていると

「おいっ！はじめっ！星羅ちゃん！ちつとこっちおいで！」

と悠呂の父親が手招きしながら呼んでくる。

はじめは星羅と二人、清と悠呂の父親の立つ場所に行ってみる。

悠呂の父親は顎の不精髭を触りながら、何から話そうか…といった感じで口を噤んでいた。

話し始めたのはその傍らにいる清だった。

「はじめ…お前、俺に何で警備兵が俺達に挨拶してるんだって質問してきただろ？」

「おっ…おう。まだ理由聞いてねえ。」

「それは、長年かけて潜入させた俺達の仲間だからさ…。」

「えっ？」

「えっ！？」

驚きの声を上げたのは星羅とほぼ同時だった。

「まっさっきの年若い奴は最近潜入させた新入りだけどなっ。」

「長年って…どんくらい？」

「うん…そうだなあ…ここの警備隊長が警備兵所を立ち上げてからだから…。」

「二十数年前からだ…。」

と悠呂の父親が割って答えた。



「でも、一度もそんな素振りはなかったわ。」

と星羅が言うと、悠呂の父親は視線をそちらに向けて

「なかった…じゃない…時期を見てしなかった…という事になる。」

「じゃあ…なんで今更、捕まえる気になったんだよつ！もっと早くすりゃ良かったじゃねえかっ！」

とはじめが食ってかかると悠呂の父親は涼しい視線を向けて

「……そうだな…しかし、この何年もあの爺さんは尻尾を掴ませなかった。」

「……孤児施設…。」

と星羅がポツリと呟いた。

「…そうだ…事実上、孤児施設として通していた…。」

「そんなの！聞いたことないぜ？」

「うむ…俺が調べて分かった事なんだが…どうやら資産家がバツクについていて、そいつの名義での運営という裏工作をしていたようなんだ…。」

「……そんな事まで俺等に話して大丈夫なのかよ…。」

「まっ 話しちゃったもんは仕方ないね」

と悠呂の父親はおちやらけた。そのおちやらけた親父を見てははじめは無然として続ける。

「で？…確かおじさん諜報部だったよな？何でおたくらここにいん

の？捕まえるのって刑事課の役回りじゃないの？」

その質問には、清が答える。

「作戦会議中に、お前等がここで暴れてるって報告があったから慌ててきたんだよっ！部長もカンカンだったんだぞっ！」

といきなりゲンコツが降ってきた。

「ってえっ！…思いだし怒りはやめろよっ！」

と頭をさすった。

「話が変わるが…うちの息子はどうやってあの中に入ったんだ？…潜入員に聞いたら誰一人あいつを見たという奴がいなかった…」

と悠呂の父親は腕を組んで頭を傾げた。

「言われてみれば…そうですね…一体悠呂君はどうやって…。」

と清も頭を傾げる。それには星羅が答えた。

「…こないだ…私が悠呂くんに助け出される前に…警備兵に見つかりそうになって…私とお父様しか知らない裏の入口に潜んだ事があるの…多分…そこから。」

「ほお…なるほど。」

と悠呂の父親は手をポンと叩いた。その傍らで清が何やら顎に手を添え考え始めた。

「…先輩、良いことを思いつきました。」

と悠呂の父親を振り返ると、彼は大仰に鼻をほじっていた。

「先輩っ！…！真剣に聞いて下さいっ！」

と言われてすぐに悠呂の父親は何か悟ったような顔になり、

「…分かってるよ。奴らが来る迄の時間稼ぎを彼女にさせようってんだろ？」

「ええ。悠呂君を安全に助け出せ、アスラビ・尾崎を誘き出す方法…彼女の中に入れてもらうんです。」

「俺はっ？俺はなんかする事ねえのっ？」

とはじめが前に出ると、悠呂の父親はすっとこちらに視線を向け何か言い掛けたがすぐにいつものおちゃらけ親父になり、

「いっちゃんはく仲間はすれだよお」

とデコピンをした。その手をはじめは鬱陶しそうに払いのけ

「おじさんっ！ふざけんなよっ！俺は真剣に聞いてんだっ！！」

と訴えた。

それに、悠呂の父親は真顔になりはじめの肩にポンと手を置くだけだった。それをも払いのけようとした所で清が言う。

「一、悪いがお前は何もしくない…お前が居たら逆に彼女も、悠呂君も危険に曝してしまうかもしれない。」

…そう言われて、はじめは俯くと

「……………くそっ！」

と拳を握り小さく呟いた。

## 第四十二章（後書き）

（^|^:）え〜…お待たせしました…あのっほんとはもつと短文でシリアスにしたかったのですが…なんせ前話がシリアスでしかも今回は悠呂の父ちゃんがいるって事でシリアスになりませんでした…でもまつ…前話のシリアスの次なんで休息も兼ねて…（;口;）こんな駄文と私ですけど…見捨てないでえ泣

## 第四十三章（前書き）

。A。：あのっ…また長くなっちゃいました…完結に向けて  
なので許してやって下さい！

## 第四十三章

外の騒ぎが収まるまで倉庫に潜む事にした悠呂だったが、この騒ぎの中でもここへ入ってくる研究員がいるかもしれないと用心する事にした。

取り敢えず辺りを見回し身を隠せる物を探す。すると丁度歩いて2、3歩先に大きな空き箱らしき段ボールを見つけた。それを出口近くで、外の様子を窺える壁際でこの箱を置いていても怪しまれない場所はないかと探してみる。

「!?!?!」

この箱と同じ様な段ボール箱の群を見つけた。

悠呂はその置き場所の周りをじっくり目で追ってみる。

「…なんとかいけそうだね。」

と独り呟くと、空箱の近くを腰を低くして素早く移動した。その箱の中を覗き込み、何もない事を確認するとそれを頭から被って、取っ手口を中からつついて開けた。

「よしっ!」

悠呂はそのままの恰好で、カサカサと段ボールの群に移動する。

(…何だか、コントみたいだけど…仕方ないよね…)

そんな事を思いながら、なんとか段ボールの群に到着すると一度空き箱を脱ぎ、壁際にある群の段ボールを除ける。

「……………っ!」

どけようと持った段ボールはやはり、箱の大きさ通り重かった。

「ふわ〜…、やっぱり重いや…。」

と手の埃をパンパンと叩きながら独りごちた。

(…ここに、はじめ君がいたら張り切ってどけてくれるだろうな…  
…いやっ面倒臭え！ってむくれるかな？)

ふとそんな事を思って、悠呂はハツとすると首をブンブンと振った。顔と気持ちを引き締めて、先程の箱の端を掴むとズルズルと手前に引く。

その箱を横によけると、再び空き箱を被りその空いた隙間に潜り込んだ。

壁際だけあって外の物音が聞こえる。どうやらまだ騒ぎは収まる気配がないようだ。

(…一体、何があっただらろう?)

壁に耳を近づけてみるが、箱の厚みもあってはつきりとはわからない。何か叫んでいるだろう声と、廊下を走る数人の足音と振動、それだけが今わかる情報の全てだった。

(……何だかわからないけど、もしかしたらこれがチャンスかもしれない…この騒ぎに乗じて動いていれば難なくあいつの居る場所に辿り着けるかもしれない…。)

箱の中で高鳴る鼓動を感じながら、悠呂はこの騒ぎが収まるのを待った。

何分経っただろうか、ガクンと自分の頭が動いた感覚で目が覚めた……どうやらこの箱の暗さと狭さ、見つからないだろうという安心感で眠ってしまっていたらしい。

(あつ…しまった…寝ちゃった…)

慌てて悠呂は壁際の方へ耳をやり外の様子を窺う。

…何も音がしない。箱の穴から倉庫内を見て誰もいないと確認すると、箱を脱いで今度は直接壁に耳をそば立ててみる。

…やはり、音がしない。

「…収まった…のかな？」

と呟くと後ろを振り返り、倉庫内の音も拾ってみる。

やはりシーンとして耳鳴りがする位静かだ。

悠呂は、意を決し箱の群から静かに這い出て辺りに警戒しながら、度々棚等に身を隠し出口付近に近づいた。

そこに身を縮めて再度、冷たい扉に耳を当て外の様子を窺う。やはり、音はしない。

さっと右側の開閉ボタンパネルのある壁に移動し、立ち上がって壁にぴったり背をつけると開閉ボタンに手を伸ばした。

扉はプシュツとエアが抜けるような音を上げ、ゆっくり開いた。しばらく開けたまま、誰か入ってこないか警戒する。

誰も入って来ないようなので、そろりと外の様子を窺った。

「…ううっ!!」

ずっと薄闇の中にいたせいかわ外の蛍光灯が眩しい。目をすぼめながら外を見回してみる。

眩しいのもわかる…蛍光灯に次いで、壁や天井までが清潔感を見せる為、真っ白なのだ。

そんな壁や天井から目を離し、だいぶ明るさに慣れた目は左右に伸びる廊下を捉えた。

先程の騒ぎが嘘の様にガランとした廊下だった。

(…今しかない!)



そう思った悠呂は、倉庫からゆっくり廊下に出た。

左右に伸びる廊下を交互に見て、どちらに進むべきかと悩んだ。

(うーん…どっちだ?)

何度左右を見ても見当もつかない。

(……よしっ！右だっ！)

と右へ進むことを決め歩き出した。奥へ奥へ進むにつれて一抹の不安がよぎる。

今は誰一人出くわす事はないが、こんな事がずっと続く訳がない。研究員に見つかってしまえばアウトだ。

その思考が自然と目を動かす、どこかにすぐ逃げ込める場所はないかと…。

一つ扉らしき物を見つけた時だった…。

どこからか人の声と靴音が、自分が歩く先の角の方から聞こえてくる。慌てて先程見つけた扉に何の確認もせず飛び込んだ。

あまりの事で心臓も早鐘のように鼓動を打つ。

本当に危機一髪だった。すぐに目の前を通る人の声。内容は良く聞き取れないが低い年齢な感じの声の男性と、なんだか慌てたような口調の…研究員だろうか？年若い声が会話をしながら通って行った。

2人の声が遠ざかっていったのを聞いて、悠呂は溜息をつくとき息を抜かれた様にヘナヘナとその場に座り込んだ。

「はあ…危なかった…」

と片手で顔を覆うと、はっとした。何も確認せずここに入ってしまった事を思い出し、顔を上げ辺りを窺った。

幸い、人は居ないようだが辺りが静かなせいもあって、何かこの部

屋の奥から聞こえてくる。

もっと良く聞こえるように、悠呂は四つん這いで奥に行ってみる。

今度はハッキリと聞こえる。水を沸かすようなコポコポといった音。

「……なに？」

悠呂はゆっくり立ち上がって更に奥に進んでみる。

この部屋も、倉庫同様に薄暗いのもあって周りの様子が良くわからない。

何かに蹴躓きながら音のする方へと歩く。

進めば進む程、音は大きくなる。

段々と辺りがうつすら明るく足元が見えてきた。本やら資料やらが床に散らばっている。

その資料の一枚を手にとって見てみるが、良く解らない。

それをもったまま、先へ行こうとして足が止まった。

微かだが薬品の匂いがしてくる。

「……ここは…実験室？」

そう呟くとまた歩き始める。

ぽろりと光る入り口をくぐると、悠呂は啞然とした。

目の前には蛍のような光りを放つ大きな水槽が現れたのだ。

悠呂はその大きな水槽を見上げた。

「……ん？」

しかし、良く見てみるとそれは大きな水槽ではなく、壁の端から端までびっしり並べられた指三本くらいの太さの試験管だったのだ。

「…なんで？」

驚いた悠呂は更に近くまで近づけて、そのズラリと並べられた試験管の内の一本に目をやった。

コポコポとする水泡以外に、何かが見えた。

「……………何だろう？」

目を凝らしてみる。中で何かがピクリと動いた。

「へっ……………？」

と声を漏らすと、手に持った一枚の資料を落とした。

試験管の中で、再び何かが動く。

「……………ふっ……………ううっ……………うわああああっ！！！」

と悲鳴を上げて、腰が抜けたようにその場に尻餅をついた。そのまま、後退ろうと足をバタつかせたが上手くゆかない。

「……………うっ！！！」

途端に、胃の中の物がせり上がってくる感触がして慌てて口を押さえたが、堪らず横を向きもどした。

蛍光色の水の中には胎児らしきものが入っていた。

大量の投薬による副作用なのか、人とは似ても似つかぬ姿に変形してしまっている。

「…かはっ！！…はあはあ…。」

口を拭い、荒い息をしながら悠呂は呟いた。

「……………なんなんだよお……………こじは…。」



## 第四十三章（後書き）

（、・、\*）え、長らくお待たせしました 四十三章：いやあ、週刊誌並みに更新と意気込んでいましたが：（TOT）ドツボにハマったスランプ期：（T T）抜け出せませんでしたあ、なはははは、泣今回ののはいつもに増して、脱出不可能な迷路に捕らわれた様でした：（・・・）9、しかし！それでも読者様のおつつい声援により更新する運びになりました！（、・、）応援してくれてる読者様 あ、いつもありがとうございます 次回も見捨てず、楽しみにして下さいね

## 第四十四章

アジュラーチ村瀬は、警備兵舎のあるブロックへ急ぎながら研究員ロツチ武田の話を聞いていた。

「…それが、思いもよらない情報でして…。」

「ふむ。」

「警備兵の中に裏切り者がいて、ここの情報を外に漏らしているというんですよ…。」

その話に、村瀬は眉を寄せてロツチ武田にチラリと目をやり口を開く  
「その情報は確かか？」

少し、間があつたがロツチ武田は『はい』と答えた。

村瀬は眉間の皺をさらに寄せて、先を急ぎながら思った。

(…何故だ？…何故今頃になってこうもボロが出る？…警備兵の中にいたというのか？スパイが…)。

無言でズンズン進んで行く村瀬を見て、ロツチ武田は威圧感を感じていた。

「それで…。」

と村瀬が振り向いた時だった。

『うわあああつ！！』

「…!?？」

と村瀬はその場に足を止めた。

武田も聞こえたのだろう、足を止めて声をした方を振り向くとすぐに村瀬の顔を驚愕したような表情で見た。

その視線に村瀬は軽く頷いて、先程歩いてきた第五研究所の方に目をやった。

人気のないガラんとした廊下……。

もう一度、武田に目をやると彼は静かに頷いた。二人は向きを変え、もと来た道を戻り始める。なるべく靴音を鳴らさぬように……。

第五研究所前にさしかかり、アジューラーチ村瀬はロツチ武田を右手で制すると彼も村瀬に信頼を置いているのだろう大人しく従い、そこで歩みを止めた。

それを確認した村瀬は一人、静かに研究所の前に移動した。壁に背中を預け、腰のホルスターから小型シヨックガン（この設定では、相手を電気シヨックで気絶させる……いわば警棒のような役割の銃）を抜き顔の前で構えると、研究所のドアの開閉ボタンにゆっくり手を伸ばした。

プシュツとエアが抜ける音とほぼ同時に、シヨックガンを持つ手に左手を添えて、臨戦態勢で銃を構え扉の前に立つ。

構えた先、研究所の中は薄暗く何も見えないが村瀬はその闇に目だけを動かして、侵入者を探す。

その場は気配を感じないので、シヨックガンを顔前に構え直し慎重な足取りで部屋の中に踏み込んだ。

目だけは忙しく闇の中の侵入者を探す。外では不審者が研究所から飛び出て来ないかロツチ武田が目光らせている。

村瀬はわざと明かりは点けず、そのまま奥へ警戒しながらゆっくり進んで行く。

実験室の入り口にさしかかり、再び壁に背中を預けてそつと中を覗き見る。試験管の中の液体の明るさで、中がある程度見えるが怪しい人影は見当たらない。

村瀬は壁から背中を離すと、顔前にショックガンを構えたまま実験室の中に入った。辺りを窺いながら部屋じゅうを見て回る。何かに躓いてとっさに銃を構えたが、それは床に散らばった資料や本の山だった。

すぐに銃を顔前に構え直し、何か盗まれた物はないか色々と調べてみるが特に異常はなく、奥の試験管環境制御室に行こうとした足が止まる。クローン精製試験管の前の床の一つに目があった。

「!?!」

そして、無言でゆっくり視線だけを試験管環境制御室の扉にやる。近付こうと一歩足を踏み出した時。

「たっ隊長おゝ！大変ですっ！」

ロッヂ武田は中に入ってくるなり大声で村瀬を呼んだ。

村瀬は眉根を寄せて振り返り

「何事だ？」

と聞く。するとロッヂ武田は、ズレた眼鏡を直しながら肩で息をして

「おっ…お嬢様が…せつ星羅お嬢様が帰ってきました!!」

「何い？それは本当か？」

と聞き返すとロッヂ武田は何度も頷いて

「はいっ…さつき研究員の一人が知らせてくれました！」

その報告に驚いたが、試験管群の前の床に振り返り、少し何事かを考えるとロッヂ武田に頷いて



「わかった、私は後で行く…お前はお嬢様をお迎えする準備を急がしてくれ。」

「えっ？ たっ隊ちよっ…。」

と言いかけてロッチ武田は止めた。村瀬の表情が固いからだ。

「わかりました…じゃっ先に行ってます。」  
と武田は部屋の外に出て行った。

それを見送ると村瀬は、銃を顔前で構えゆっくり試験管環境制御室に近付いて行く。

そして、開閉ボタンを押した。

再びエアアの抜ける音が実験室内に響く。周りを警戒しながらゆっくり中に入る。

中は更に暗く、制御装置の小さな赤い明かりしか見えない。

一步一步、警戒しながら奥へ進むと何かが目の前を掠めた。暗闇と一瞬のことなので反応が遅れ、何かがショックガンを持つ手に当たりその衝撃で銃を落としてしまった。

「うっ…！」

銃は重い音を鳴らし足元に落ちたようだった。アジュラーチ村瀬は、冷静に銃を取ろうと屈むと何者かに銃を蹴飛ばされ見失った。

「…！！！」

村瀬は銃を取ろうとした姿勢のまま、闇を見据えた。誰かがいるのはわかる。息づかいが聞こえるからだ。

村瀬はゆっくり口を開いた。

「何者だ？……」

## 第四十四章（後書き）

（、、；）お待たせ致しました 第四十四章：いやゝまたまた気がつけば1ヶ月経ってました…本当に申し訳ない…なかなか次の展開が思いつかず苦勞しました…こんな遅筆な私ですが、最終話に向けて頑張りますので見捨てず応援のほど宜しく願います  
今回は真面目笑

## 第四十五章

―数時間前―

悠呂の父、清、星羅そして一応おまけではじめ達は中に入ってからの作戦を考えていた。そこで不意に疑問に思った清がそのまま疑問をぶつけてみる。

「……………ちよつと疑問に思ったんだけど……………悠呂くんは何故ここへ？」

その質問にはじめの顔が曇る。清ははじめの表情を見て聞く。

「はじめ、何か知ってるのか？」

と顔を向けると、それには悠呂の父も耳を傾ける。しかしはじめは、眉根を寄せて

「知らねえよ！」と吐き捨て俯いた。そんなはじめを星羅は黙って見つめ、そして静かに口を開いた。

「……………多分、私のせいです。」

そう言った星羅に視線が集まる。

「それは……………どういう意味かな？」

と清は丁寧に聞き返すと、星羅は少し口ごもったが何か決心したように一度唇をキュッと結ぶと堰を切ったように語り出した。

「……………信じてもらえないかもしれないけど私は……………そのつ……………クロインなんです……………」

「えっ？」

「うえっ？」

驚きの声を上げたのは清とはじめ、殆ど同時だった。

「そっそれで……恥ずかしい話なんですけど……私、今朝方悠呂くんがこの話をそのっ……泣きながら話したんです。その時は彼、普通だったんですけどもしかしたらそれが原因で……」

そっ話す星羅に驚きもせず、悠呂の父は空を見上げながら煙を吹きました。

「おじさん！ なんでおじさんは驚かねーの？」はじめが聞くと、悠呂の父親は何も言わず携帯灰皿に灰を落とすと再び煙草をくわえ

「そっ言えば……」

と思いついたようにポツリ呟いた。

「今朝、あいつが変な事を聞いてきたな……」

「えっ？ それで何を悠呂くんは聞いてきたんです？」と清が先を促した。

悠呂の父親は、煙を空に向かって一度吐きそのまま見上げたまま話し出す。

「この世に人のクローンは存在すると思うか？ と……何故そんな話をしたのかそんな時は良く解らなかつたんだが……そんな事があつたのか」

そっ話を聞いて清は顎に手を当て考え込んだ。その横ではじめは

先程かわされた質問を再度ぶつけてみる。

「おじさん……話逸らすなよ。俺の質問に応えろよ」

「そつそつです！ あのつなんで驚かれなかつたんですか？」

と星羅も悠呂の父親に聞いた。

悠呂の父親は、ずっと空を見上げていた視線をこちらに向けた。はじめは顔をしかめて悠呂の父親を睨むと

「おじさん……もしかして、全て知ってたのかよ？」

と聞くと、悠呂の父親は煙草を携帯灰皿にねじ入れながら

「知っていたさ」

と目を伏せた。その態度にはじめは頭に血が昇り勢い良く立ち上がると

「もしかして……こつなる事も初めつから知ってたんじゃないのか  
！」

と食ってかかりそうな勢いのはじめを遮る様に清が口を開いた。

「そうになると、悠呂くんはアスラビ・尾崎 修造本人に接触を試みる筈ですね」

と逸れた内容を訂正するように清は話す。

「……兄ちゃん！」

と言いかけたはじめを清は目で黙らせた。それに不満そうにはじめは鼻をフン！と鳴らすとドカリと座る。

その様子を見無視するかのようにはじめは話を続ける。

「潜入後は、恐らくアスラビ・尾崎の自室に向かう筈……星羅さん、この時間帯は彼は今どこにいるだろう？」

と清が質問すると星羅は口元に手を添えてしばらく考え込むと、多分と付け足して

「この時間帯なら、研究所のお父様の部屋にいる筈です」

と答える。再び清は難しい顔をして顎に手をあて

「なるほど」

と頷いた。そこへ悠呂の父親が口を挟んだ。

「それは確実なのか？ そこにいるという保証はあるか？」  
と星羅に聞くと更に横からはじめが口を出した。

「そうだ。お前を攫らわれちまってまだ動転しててあちこち中を動き回ってるかもしれないねえじゃん」

「それは……ないと思う。お父様は足が不自由だから」

と星羅は答えた。

「ふむ……確かに……。」

そう言うと悠呂の父親は正門前に立つ先程の体躯の良い警備兵を手招きして、何やら話すと再びこちらに戻ってきた。

「中で騒ぎを起こしてもらっていたが、アスラビ・尾崎は自室を出

た様子がないそうだ。」

と悠呂の父親は言う。

「じゃあ？」

と清が聞くと悠呂の父親は頷いた。

「後は中を自由に動ける星羅ちゃんに頑張ってもらうしかない」

そう言つて悠呂の父親は、星羅を見ると清達も彼女に視線を向けた。皆の視線を受けた星羅だったがその表情は浮かない。

その様子にはじめが首を傾げると、彼女は俯き震える声で質問をしてきた。

「もし、悠呂くんを助け出した後……お父様……父はどうなるんですか？」

その質問に一同は口を噤んだ。しかし悠呂の父親はだけは違った。その質問に淡々と答える。

「中に居る潜入隊に確保させ、刑事課に引き渡す……それから」

「先輩！」

淡々とその先を続けようとする悠呂の父親にたまりかねて清が止める。



悠呂の父親は清に鋭い眼光を向け、低い声で話す。

「何だ？」

その気迫に負けず清は応える。

「それは、あまりにも酷です。今話さなくなっただけ……。」

「何がいけない。彼女が知りたがっていたから応えただけだ。それに彼女は家族だ知る権利はある」

「だからって！ これから潜入させようと言う時に、彼女の心を乱すような事をしなくたって！」

激しい口論をする二人を見ていたはじめは、その口論の発端となつてしまつた星羅に目を移す。

彼女はこの口論を聞いてか、それとも先程の話の内容でなのか俯いて小刻みに震えていた。

幸い長い彼女の髪が上手い具合に表情を隠し、どんな表情をしているのかはじめの見る角度では良く分からなかった。

「だっ、大丈夫か？……何て言っただけか……そのっ」

声を掛けてみたもののどう言えばいいのかわからず先が続かない。

そんなアタフタしているはじめに星羅は俯いたまま

「大丈夫」

と応えた。

しかし、どう見ても全然大丈夫なように見えないはじめは続ける。

「なんなら俺が代わりに……」

と言いかけると星羅は顔を上げ、何か決心したかのような強い面構えではじめを見て。

「大丈夫。ここは私に任せて欲しい。」

そう言つて、星羅は無理にでも笑顔を見せた。

とりあえず作戦として、星羅は正面から潜入、中を自由に動ける彼女に悠呂の居場所を突き止めてもらい、彼女と一緒に研究所の外へ刑事課の到着時を見計らい、潜入隊に修造を確保してもらう、そして刑事課に引き渡すと言つた作戦が纏まつた。

最後に悠呂の父親は付け加える。

「作戦というのは、スムーズにいけば万々歳だがそう簡単にいかない事もある。時と場合によっては、二転三転する事もある。もしもその事もそれぞれ考えておけよ」

その言葉に一同は頷いた。

「それじゃ……行こうか？」

と悠呂の父親は星羅の肩にポンと手を置いた。

「……大丈夫か？」

そう悠呂の父親が聞いてやると、星羅の表情は堅いが強く頷く。

「じゃあ……行ってきます」

そう言うと星羅は正門に向かって歩き出した。その後ろ姿をはじめ達三人は見送った。

## 第四十五章（後書き）

お待たせいたしました 第四十五章！いやあ、頑張りました！ 後  
何話かで完結させたいのであるべく内容を纏めるように練っており  
ますが、出だしが失敗してますのでなかなか難しい。しかし、私も  
頑張りますので応援の方よろしく願いますm（）（）m

## 第四十六章

悠呂は銃を手に、警備兵隊長だろっその暗闇の中の人物と対峙していた。

数分前、自分が大声を出していた事に気付きその場をいち早く後にしようとして研究室出口に向った。

しかし扉に近づいたその体は、近づくのを止めた。

微かな衣擦れの音がしたのだ。何者かが外にいる……そんな嫌な感じがしたので悠呂は出口から静かに離れると、なるべく音を立てないように奥へ引き返し何処か隠れる場所はないかと辺りを見回した。するとあの試験管群の横に扉を見つけ、すかさず中に入り、暗闇の中を手探りで身を潜める物はないかと探す。

そうしている内に、エアールが抜けるような音が外から聞こえてきた。何者かが研究室に入ってきたのだ。悠呂の背中に冷たいものが走るとりあえず、何かの柵らしき物の陰に身を隠すと膝に顔を埋め、この場が無事にやり過ごせるように祈った。

しばらく何も音がしなかったので悠呂はそっと膝から顔を上げ扉がある方に顔を向ける。

（何もないから、諦めたのかな……）

悠呂はその陰から四つん這いに、扉の方へ移動しようとして再び体を硬直させた。

……床についた手から判る。人が歩く振動。

悠呂は、四つん這いを解き再び元の位置に戻ると膝を抱えた。どうか、ここには入ってこないで……そう祈るしかなかった。

外から聞こえる。この扉のある場所へ進んでくる足音。向こうも警

戒しながら慎重にこちらに向かってくる音がする。悠呂の鼓動は息苦しい程にドコドコと音を立てている。

扉の外で相手の足が止まった。もう息ができないほど、鼓動は跳ね上がる。そこへ

「たつ隊長！ 大変です！」

と誰かの呼ぶ声があった。

(隊長？じゃあ……今、この扉の近くにいる人は……警備兵隊長さん？)

話の内容を聞こうと悠呂は、耳を澄ましてみたがそれ以外は、ごによごによと会話を交わすだろう声が聞こえるだけで、内容は聞き取れないでいた。

もしかして……と悠呂は思う。あの倉庫の中に居た時の騒動と何か関係があるのだろうか？

すぐに会話は止み、足音が遠ざかろうとしているのに悠呂は胸を撫で下ろした。

(ふう……やり過ごせたかな。暫くあの人達の気配がなくなるまでここにしよう)

そう思い、天井を見上げた時だった……傍近くでエアールが抜ける音がした。

「えっ？」

自分の声が掠れて聞こえた。

その警備兵隊長だろう人物がここへ入ってきたのだ。

(どっどっして！？ ここを出て行ったんじゃない……)

とっさに棚に背を押しつけ、息を殺した。目の前を黒い人影が通る。

「！」

閉まりかけた扉の僅かな光で、相手の持つ何かが見えた。

(……武器!?)

悠呂はこれはまずいと思った。あの武器を何とかしなければと……

…。

何かないかと辺りを手で探る。

指先に何かに触れた。その物に目をやると棚から落ちたのだろうか？ 分厚い本があつた。

迷わず分厚い本を手にする、相手に投げつけた。すると運良くその一冊が武器を持つ手の甲に当たり、暗いこの部屋にガチャリと鈍い音を響かせた。

(今の内に外へ!)

悠呂は棚の陰から飛び出そうと足を踏み出したが、一步先にいるその人物は慌てた様子もなく落ちた武器を拾おうと屈んだ。

「!?!」

慌てた悠呂は、相手が拾うより先に足で武器を蹴飛ばし、その武器を手にした。

手にして改めてその物が何かを知り、悠呂はドキリとした。手にずっしり重く、引き金のようなものがあるその手触り。

(じゅっ……銃?)

自然と喉がゴクリと鳴った。それに驚いていると、声が掛かった。

「何者だ?」

凄みのある、落ち着いた低い声……。

その声に悠呂は少し体を硬直させたが、暗闇の中のその人物を見据えた。勿論、応えるつもりはさらさらない。

ゆっくり悠呂はその人物の後ろに廻る。

相手は自分が見えていないのか、目で追おうとしない。

そのずっしり重い手の中の物を相手の背中に突きつけた。相手が

一瞬体を強張らせたのが分かる。

しかし、すぐにカチカチと鉄が鳴る音がする。悠呂はなんの音だと手元を見ると、自分の手が小刻みに震えていた。慌ててあいた手で震えを抑えたが、多分この震えは相手に伝わっただろう。

悠呂はなるべくはつきり、低く調子の声で言い放つ。

「そんな事はどうでもいいんだ。あなた、アスラビ・尾崎 修造の居場所、知ってるんでしょ？」

しかし、相手は正面を向いたまま応えようとはしない。

悠呂は構わず続けた。

「連れてってもらおうよ。さあ！ ここから出る！」

なるべく語気荒く言い放ち銃でその人物をつついた。

相手は何も言わず従い、研究室に出る。悠呂もその人物に銃を突きつけたまま、ついていく形で一緒に出た。

研究室に出て、初めてその人物が見えた。あの試験管の中の発光する液体でうつすら照らされたその相手。

自分より頭一つ分背が高く、がっしりした体、髪が綺麗な緑色、チラリと窺い見るその顔は体格から想像も出来なかったが、かなり年を重ねている人物だった。

相手は、何も言わずそのまま歩を進め、第五研究室を出る。悠呂も警戒しながら出た。

廊下に出てびっくりしたのだが、悠呂はてっきり外にも誰かいて、もしかしたらこの銃を使わなければいけないかもしれないと覚悟し



ていたのだ。しかし、廊下には誰もおらず物音すらしない。何だか奇妙だと首を巡らしながら、廊下を歩き研究室が見えなくなる角を曲がり、暫くすると前を歩くその人物が顔をこちらに向けた。悠呂は身構えた。

「ふっ……随分、幼い侵入者だな。」

そう鼻で笑う。それに少しムツとした悠呂だが何も言わなかった。相手は正面に向き直り、歩を進めながら尚も話しかけてくる。

「そんな坊やが、所長になんの用だね？」

無論、応える気はない。黙って彼の後を歩く。その人物はまた、チラリとこちらを窺い見たが再びふつと笑って前を向き歩く。

「まあいいさ、連れて行ってやる。所長のところへな。」  
何か含みのある声でそういうと歩みを速めた。

## 第四十六章（後書き）

（´・、・;）大変お待たせ致しました

かなり間があいてしまいましたが、やっと更新できました笑

主婦業の傍らの執筆で……（罪悪感）

（・・・;）うっ嘘です。確かに主婦業のやることをやってから執筆をしようとしたのですが、そのっ意欲を削がれてしまいましたね

（言い訳モード）それで、気が付いたらですね、またゲームのコントローラーを握って逃避してたんですねえ〜人間ってほんっと不思議ですねえ（水野晴郎風）

（;口;）ごめんな〜ざい！頑張るから見捨てないでえ泣

## 第四十七章（前書き）

少し、いつもより長めになっております。しつこく承して下さい。

## 第四十七章

はじめ達に見送られた星羅は正門に着いた。

その場所には、先程悠呂の父親と話をしてきた年若い警備兵と体格の良い警備兵、二人が立っていた。

「もう、準備はよろしいですか？」

そう柔らかい声で年若い警備兵が聞いてきた。星羅は真正面を向いたまま、ゆっくり頷くと今度は体格の良い警備兵がハキハキした声で補足ですがと話始めた。

「予め、あなたが帰って来たことは中にふれて回っています。中に入りましたらいつものあなたでいらして下さい」

と軽く説明を加えた。星羅はその説明に同意するように強く頷いた。それを見た体格の良い警備兵は、星羅に背を向け少し前に出ると右手にはめた何かを操作する。すると、軋む様な音をたてゆっくり門が開いていく。

開いていく門にじっと目をやりながら星羅は大きく深呼吸した。

正門が開ききると体格の良い警備兵はこちらに向き直り、右手を揃え額近くに持っていき、敬礼をした。その横でも年若い警備兵が敬礼をし、あの柔らかい声で

「お気をつけて」

と見送ってくれた。

二人に見送られ、しっかりした足取りで星羅は中に入る。

何も無い原っぱ、一見、空き地の様に見えるこの場所……。

その中程まで歩いて、立ち止まる。星羅は足元に目をやると、軽く地面から振動が伝う。

禁止区域の中に入って行く星羅をはじめはフェンスから少し離れた、小高い土手から見守っていた。

どう見てもただの空き地に見えるその場所に、研究所が存在するのが信じ難く、どうやって中に入っていくのか興味津々だった。

すると、彼女の立っている足元からゆっくり現れた鉄扉に驚愕した。「なっ……なんだありゃ!？」

一人驚きの声を上げていると、後ろに何台かの車が止まった。何だろうとはじめが振り向くと、丁度一台の車から二人の男が降りてきた。

一人は、清潔感漂うピシツとした淡い色のスーツを着て若く、いかにも助手といった感じの男、もう一人の男は、悠呂の父親と同年代か少し下位の年格好で、髪が伸び放題のボサボサ、髭も何日も剃っていないような無精髭、何となくダルそうな猫背の男だった。

(うえっ……なんだあいつ等)

はじめが見ていると、猫背の男のドロリとした目と合ってしまった。

(うわっ……あの、気持ち悪りいおっさんの目と合っちゃったよ……)

その男二人組は、真っ直ぐこちらに向かって来た。

(うわっわっ！ こっち来るんじゃないやねえ)

しかし、その二人組ははじめではなく、悠呂の父親の後ろに立った。

(……………なんだ?)

しかし、悠呂の父親は顎に手を当てたまま何か考えごとをしているようで、その二人に気づいていないようだった。横に立っていた清がようやく気づき、二人に声を掛けた。

「あつ……………これは、ご苦労様です。澤田刑事、アゲイス刑事……………先輩、刑事方が来られましたよ。」

そう清に言われて、ようやく後ろに振り向いた。

「おう……………ご苦労様。」

悠呂の父親が声を掛けると、猫背の男はニヤリと笑って

「偉くご無沙汰してましたねえ……………浅之木警部。」  
とガラガラの嘎れた声で挨拶した。

「まあな……………。早速本題に入らせて貰う。」

と悠呂の父親が言うとその二人は、顔付きを変え話を聞く態勢に入った。

はじめはそのボソボソと話しているのを背中越しに聞きながら、星羅があの特徴に入って行くのを見守った。

星羅がその鉄扉に入り、坂になっているスロープの道を下ると人だけが出来ていた。

星羅の姿が見えるなり、その人だけは口々に

「お嬢様、お嬢様」

と出迎えてくれる。それに有難うと答えながらスロープの坂を下りきると、鉄扉は自動的に閉まり、平坦な道にゆっくり戻る。

いつも出迎えてくれるアジュラーチ村瀬の姿がないのに気付いた星羅はその人ばかりの中、首を巡らし探してみた。どこに目をやっても見あたらず、すぐ傍にいた研究員に聞いてみる。

「村瀬が見えないけど……」

すると聞かれた研究員も辺りを見て

「そう言えば……見当たりませんね。どうしたんでしょう」

と首を傾げた。嫌な予感がする。星羅は人だかりを突き進んで奥に行こうとした時、一人の研究員に肩を掴まれた。振り向くと、眼鏡をかけたちよつと小太りな研究員だった。

「……？ あなたは？」

と聞くとその研究員は慌てた様子で、星羅の肩から手を離すみませんと頭を掻いた。

「第三研究室、オロダ・高城の元で助手をしているロッヂ 武田という者です」

と頭を下げると、すぐに顔を上げ先を続ける。

「隊長は、少し用事がありまして外しております」

「？」

何か胸騒ぎがする。星羅はそう感じたがそれを悟られぬように平静を装い

「そう」

と応え奥に進もうとすると再び、ロッヂ武田の

「お待ち下さい」と声が掛かった。

「どうして？ 私はお父様に……」

と言うとその研究員が星羅に失礼と耳元に寄り他に聞こえぬような

声でこう話した。

「……実は、侵入者が入った可能性があります。今、それを隊長が調べておいでです。ですので、お嬢様は安全の為こちらに……あっ！」

『侵入者』と聞いて星羅はすぐに悠呂だと悟った。ロッチ武田の話  
を最後まで聞かずその場を飛び出し走った。

(何とか、悠呂くと会わなきゃ……)  
そう思っていると、不意に清の声が蘇ってきた。

『そうなるよ、悠呂くんはアスラビ・尾崎 修造と接触を試みる筈  
ですね』

それに気付いた星羅は

「お父様……！ お父様は？」

と声を漏らすと、こちらに向かってゆったり歩いてくる研究員に飛  
びつき

「お父様は？ 今日はこちらに？」

その星羅の形相に少し、驚きながらその研究員は

「おいですよ」

と告げると、星羅は有難うと言葉を残し父親の自室へと急いだ。

その途中、第五研究所の前を通り扉が開け放したままになってい



るのに気づき足を止めた。

後ろから追いかけてきたロッチ武田は肩で息をしながら

「お嬢様……ここです。侵入者がいた場所……」

と吐息紛れに話す。星羅は、しばらく扉を見つめると迷わず中に入った。

「おっ……お嬢様！ まだ中に侵入者がいるかもしれません！ 危険ですお止め下さい！」と止めるのも無視して部屋の中に入ると電気を点けた。

部屋の中は資料や本が散乱している、これはいつもの通りだと星羅は気にせず床や柱にしきりに目を凝らす。

村瀬と争ったかもしれない――

血痕などはないかドキドキしながら探す。もし怪我などしていたら……そう思うと胸が痛んだ。

必死に床や柱を見ながら奥に入り、ひとつの場所で立ち止まった。

その床からゆっくり視線を上げ、星羅は小刻みに震える……。

「……悠呂くん、これを見たんだ」

そう呟くと、目の前に怪しく緑色に光る蛍光色の試験管群を見て涙を流した。

## 第四十七章（後書き）

今回は、間隔が少ししか開いておりません 頑張つて書きました。  
一応、完結は50章と思つておりましたがなんせ纏めるのが苦手な  
愁真です…恐らくプラス5辺りで完結させることになりそうです。  
それまでお付き合い下さい！完結の暁には評価などしていただける  
と凄く嬉しいです。長くなりましたが…次回をお楽しみに

## 第四十八章（前書き）

この章も少し、長めです。読みづらいかと思われませんがご了承ください  
い m ( ) m

## 第四十八章

悠呂は、目の前の人物に気を張りながら歩いて歩く。

静かな周りは、二人の歩く靴音が響くだけ。相手は歩調を緩めず自分のペースでグングン歩いていく。背丈の違う悠呂は、それを小走りに追う形で相手の背中を睨みつけながらついていく。すると相手が急に立ち止まり、壁に向かって何やら右腕を掲げ操作している。何だろうと悠呂も歩みを止め、相手の様子を見ていた。暫くして、急にその壁がバシツと音を立てた。次に電気が帯びたように光るとエアールが抜けるような音を出し壁がゆっくり、左右に開いた。

「!?!」

悠呂が驚いていると、相手は再びこちらにチラリと目をやりフツと笑う。

「さあどうぞ、こちらが近道になります」

と相手は悠呂を中に促す。

畏かもしれないと警戒した悠呂は彼を睨みつけながら

「あなたから、先に入って下さい」

と銃を向け先に入る事を拒否した。相手はヤレヤレと言った感じで両手を上げ、溜め息を零すと

「では、お先に」

と先に入った。それを見届けた悠呂は、警戒しながらゆっくり彼の後に続き、中に入る。

中に入ると景色が一遍していた。先程の全体真っ白な空間から少し落ち着いた色合いに、廊下は冷たい鉄板からフカフカの渋みのあ

る朱色の絨毯が敷いてある。壁や天井にはシックなベージュ色の壁紙。

その雰囲気にも、驚いて首を巡らしていると後ろでエア音を出し、先程入ってきた壁が自動的に閉じていく。

そちらに気を取られていると、後ろから

「こちらだ」

とその人物は歩き出した。悠呂は、先程の壁に一瞥すると慌ててその後を追った。

長い廊下を歩きながら、悠呂は壁や飾り棚等に目をやる。3D絵画やら、古代風タペストリー古い花瓶など、悠呂の目には珍しい骨董品ばかりだった。

その中の3D絵画の一つを見つけて、悠呂はおもむろに足を止めた。

その絵には小さな女の子が花冠を頭に寄せ、幸せそうに微笑む姿があった。

真正面から見ると写真のようで、左右に動いて見てみると、ちゃんと横から見た絵になっている。

ゆっくり真正面に戻って、その絵の中の女の子を見つめた。

幼いが、これは星羅なのだろう。頭のとっぺんから少しずつ色が抜けて白銀色になっている。

絵の中の彼女は幸せそうに微笑んでいる……今は一度も笑わない彼女の面影がチラついた。

そして、すぐに涙に濡れた彼女の顔が浮かび、忘れていた怒りが込み上げてきた。堪らず拳を硬く握る。

そこへ横から低い声がした。

「これは、星羅お嬢様が三歳の頃の絵だ……」

はっと隣に目をやるとその人物は愛おしいそうな眼差しで、その絵を見ている。悠呂は何も言わず、再び絵に顔を戻した。

「彼女はよく、邸を抜け出す癖がありましたね……」

いきなり隣の彼はそう切り出した。悠呂は目だけを彼にじっと向けた。その彼も目だけを悠呂に向けたまま、話を続ける。

「つい先頃、そのお嬢様の行方が知れなくなつた……私の部下によると、ある少年に攫らわれたと報告を受けた」

そう淡々と話しながら彼はじっと悠呂を見下ろしている。悠呂も無言でじっと睨み返す。

彼は暫く口を嚙み、悠呂を見ていたがすぐに背を向け歩き出した。悠呂も何も言わず後をついて行く。

歩いて暫くすると再び、低い声で話し出した。  
「そのお嬢様が、先程ここへ帰つてこられた」

「えっ？」

悠呂は思わず声を出してしまった。

その声に相手は、やはりと言つた視線を背中越しに向けてくる。その視線に悠呂は眉を寄せ睨み返し、無言で歩く。

目の前の彼は、悠呂から視線を逸らすと、歩くのを止めた。すつと悠呂は身構えたが、襲いかかってくるようすはなく彼の先に目をやると一つの扉の前に立っていた。

目の前の人物は扉の横に設置されているタッチパネルの呼び出しボタンを押した。ブーとブザー音なる。

(……するとここが)

と悠呂が扉を見つめっていると、タッチパネルモニターのスピーカーから老齡の囁れた声で応答があった。それに目の前の彼は、チラッと一度こちらを見てタッチパネルに顔を近づける、会いたい旨を伝えると、余程この彼を信用しているのか、中の相手は容易く部屋のロックを解除した。

目の前の扉がエア音を鳴らし、静かに開いていく。悠呂は鼓動が早くなった。もうすぐ目当ての人物と接触をする。手が汗ばんでくるのが分かった。

先に目の前の人物が一步中に入り、こちらに体を向けると

「入れ」

と目だけで合図をしてきた。

悠呂は喉元をゴクリと鳴らし、右手を少し動かした。カチャリという音を聞いて手に持っていた銃に目をやった。その銃を暫く見つめて、静かにズボンの腰にねじ込むと、ひとつ息を吐いて中に進む。

中は大きな窓があるようだが、分厚いカーテンで閉め切っており、少し薄暗く先程出てきた研究所の様な薬品の匂いが微かにする。

目の前には、年季の入った書斎机がドンとあり、良くは見えないが机の上に写真立てが置いてあった。机の側に背の高いスタンドランプがついている。明かりはそれひとつだった。

一通り、首を巡らし警備兵の彼の目の前に立つと悠呂は顔を見上げた。彼は、その視線を受けると顎であそこだと示した。示された場所に目をやると、書斎机の横にもう一つ開け放したままの扉が見えた。そこから、微かなもうひとつの光りが漏れており、人の影が渋い色の絨毯に映っている。

「修造」

と呼ばわり、横にいた警備兵の彼はその扉の中へ消えていった。

何事か話しているのだろう、絨毯に映る影が二つ動いている。

すると、すぐに一人の老人が車椅子で現れた。その後ろには先程の警備兵の彼も付き添っている。

悠呂は目を見張った。あの国立図書館の書物の中で見た人物が目の前にいる。そして、その写真の中よりえらく年老いている事にびっくりした。

今にも倒れてしまいそうな意気消沈しきった表情、顔色は悪く土気色でまるで死人のようだった。

(これが……アスラビ・尾崎・修造……)

尾崎は入り口近くで茫然と立つ少年に目を細め認めると、傍らに立つ警備兵の彼に

「なんだ、あいつは？」

と声を掛けた。

警備兵の彼は落ち着いた様子で応える。

「修造に話があるそうだ」

とこちらを見た。

「何？ 私に話だと？」



と怪訝そうに尾崎は彼に聞き返した。

彼は静かに

「はい」

と応えた。

すると尾崎は、再びこちらに目を向けた。

## 第四十八章（後書き）

続けて投稿となりました。このシーンは構想を書いても早く読者様の目に入って欲しい〜と思っておりました。それで頑張って書き込み致した次第です。完結に向けて日々、苦戦しておりますが何卒応援のほどよろしくお願いします。感想、ご意見は随時承っております

次回も楽しみにして下さい。

## 第四十九章

星羅は肩を震わせ泣いていると、ロッチ武田が後ろから声を掛けてきた。星羅は慌てて涙を拭き、何事もなかったように振り向くと。

「お嬢様、ここはまだ危ないかもしれません。早々に退室して下さい」

辺りをキョロキョロしながらロッチ武田は言う。

星羅はそれに頷き、先に研究室の出口に向かうロッチ武田の後を追って歩いた。そして、出口付近で一度振り返り目を瞑ると一瞬深呼吸して部屋を出た。

部屋を出たところで星羅は、ふと疑問に思ったことをロッチ武田に訊いてみる。

「村瀬は何処に行ったのかしら？」

その質問には、彼は首を傾げて

「わかりません」

と申し訳なさそうに頭を掻いた。

仕方ないと軽く溜め息をつき、次に父親は自室にいるのかと問うとこれには頷くが、なんだか自信なさげだ。全く以て役に立たない男である……。

星羅はそんな彼を置いて、先を急いだ。

「あつ！ おつお嬢様！ お供します！」

としつこくついて来た。ロッチ武田がついて来るのも構わず、先へ先へ早足で歩きふと足を止めた。

（しまった……近道をしようと思ったけど、彼がついて来たんじゃない

……)

星羅は後ろにキリツと振り返った。いきなり振り向かれた本人は、驚いた様子でその場でたたらを踏む。

走ってついて来ていたのか、丸い顔が真っ赤になって滝の様に汗だくになっていた。

「あなた、もうここでいいわ」

そう言うと彼は口をアワアワして、理由を訊きたがる。

「お父様と二人でお話したいの」

落ち着いた声色で応えると、渋々といった感じで星羅に背を向けて元来た道に戻って行く。

星羅は、その背中が完全に見えなくなるまで見送ると、すつと踵を返しすぐ側の角を曲がった。

数歩あるいて辺りに人がいないか確認すると、壁に手を当ててやる。

「指紋照合を開始します」

と壁から機械的な声があったかと思うとすぐにまた

「指紋照合が完了しました」

と返ってきたので、星羅は壁が開くのを待つ。

しかし、一向に開く様子がない。おかしいと思った星羅は壁にもう一度手を当てて

「ロック確認」  
と声を出した。

「ロック確認します。しばらくお待ち下さい」  
と機械的な声がまた応対する。

数秒待たずに再び声が返ってくる。

「只今、ロックされています。ロック者番号0001……ロック形態種別……緊急警備……Bパターン」

星羅は機械的な声に耳を傾けながら、眉を顰めた。

しばらく壁を見つめ、軽く拳で壁を叩くと諦めたようにその場を離れ奥へ歩いた。

（遠回りになるけど……仕方ない。研究員が使う通路を使うしか……）

自然、歩く速度が速くなる。気がつくとき一心不乱に走っていた。

（……あの角を曲がれば、お父様の部屋に繋がる廊下に出れる）

足がもつれそうになりながら角を曲がったその時、派手に何かにつかった。

「きゃっ！」

「うっ！」

星羅は勢い良くその場で尻餅をついていた。どうやらぶつかったのは人らしい……相手も同じように尻餅をついたのか痛そうに声を漏

らしている。

星羅は痛い腰をさすりながら顔を上げ相手を見た。相手も痛そうに腰の辺りを押さえ、顔を歪めている。

少年だった。歳は星羅より下のようだ。しかし、この研究所では初めてみる顔だ。

相手もこちらに気付いたようで、あつという表情をした。

端正な顔立ちに、色白でそれに映えるようなエメラルドグリーンの綺麗な瞳をした少年。

彼に見入っていると、彼が先に立ち上がり星羅に手を差し伸べた。

「あのっ……ごめんなさい。大丈夫？」

とても耳に優しい声だった。星羅は彼の綺麗な瞳を見つめながら、手を借り立ち上がると背の低い彼の登頂が見えてはつとした。

彼のサラサラした髪色は綺麗な栗色だが、今見る登頂は色素が抜けて星羅と同じ色をしている。そこですぐに彼も誰かのクローンなのだ気付いた。しかし、こんな子は星羅が見ていた子供達の中にも見たことがない。

ましてや最近生まれたのであればもっと小さい筈だ。

見た感じ、この少年の年の頃は七、八歳くらいだ。

「あなた……誰？」

星羅がきくと、きかれた本人はびっくりした表情をしたがすぐに顔を曇らせた。

「名前、ないの？」

ときくと彼は首を横に振り、

「シュウ」

とだけ呟いて俯き、また暗い顔をする。

「そう、シュウて言うの」

と彼の前に屈もうとした時、すぐ側のドアが開いた。

そちらに顔を向けると、一人の研究員が飛び出してきてシュウに目を止めると

「あっ！ シュウ！ いないと思ったらまた！」

とシュウの腕を取った。シュウはしまったという顔をして捕まった腕を必死に解こうともがいた。

「勝手に出ては駄目だといっただろう！ まだ検査も途中なんだぞ！」

研究員は嫌がるシュウを抱き上げると、シュウはジタバタともがき、なんとか逃げようと身を擦る。

「その子は？」

という質問に、やっと星羅の存在に気付いその研究員は、慌てたように畏まった。

「おっ……お嬢様！」

その隙にシュウは研究員の腕に噛みついた。

「あでっ！」

研究員の腕から逃れたシユウは、あっかんべをしてすぐに星羅の背に隠れた。

痛そうに腕をさすりながら研究員は、星羅の背に隠れたシユウに目をやり、すぐに星羅に視線を戻した。

研究員は何か言いかけて、すぐに口を閉じてしまった。

そして無言で一礼すると、大股で星羅の後ろに行きシユウの腕をまた掴むと、暴れるシユウを小脇に抱えすぐ側のドアに消えて行った。



## 第五十章

悠呂は暫く無言のまま、アスラビ尾崎と対峙していた。

先に視線を逸らしたのは、アスラビ尾崎の方だった。

彼は車椅子を手元のパネルで器用に操作して書斎机に向かい、机の裏側の何かを操作した。

数秒して悠呂が立つ目の前にゆっくりと応接セットが浮上してきたのだ。

悠呂は少しその場を後退りし様子を伺う。

アスラビ尾崎が書斎机から離れるのを見て、あの傍に控えていた老齢な警備兵が、何も指示される分けでもなくキビキビと慣れた様子で応接椅子の一つを脇へ避けた。

そこにアスラビ尾崎は車椅子ごと収まると、こちらに目を向け、向かいにある卵型の椅子の一つを悠呂に勧める。

悠呂はアスラビ尾崎をじっと見たまま躊躇いもせず、勧められた椅子に腰を降ろした。

悠呂が椅子に腰を掛けるのを認めると、アスラビ尾崎は改めてエメラルドグリーンの瞳で悠呂を見つめる。

悠呂も見つめ返すが、見るからに弱りきっている人物の何処にこ

んな力強さがあるのだと疑う程、ギラギラした瞳が悠呂を捉えて離さない。

すると、アスラビ尾崎のガサガサで色の悪い唇が微かに動いた。

「随分と若い侵入者だな」

囁れた声だった。あの老齡の警備兵と同じ科白。

しかし、こちらは関心した風な話し方だ。

間を於かずアスラビ尾崎は、悠呂の瞳を真っ直ぐ見たまま続ける。

「私に……話があるそうだが？」

やけに余裕のある口調だ。いや、むしろ小馬鹿にしたような……。

悠呂は小馬鹿にされたような感じがして、くっ唇を噛んだ。

アスラビ尾崎は悠呂の応えるのを、じっと待っている。

子供だから甘く見ている。ありありと分かる態度に悠呂の怒りは増す。

その怒りが、自分でも予想だにしない言葉を発していた。

「僕が、あなたのお嬢さんを攫った者です」

アスラビ尾崎の右眉がピクリと動いた。

悠呂は視線を逸らさずじつとエメラルドグリーンの瞳を見返す。

しかし、相手の反応はそれだけで土気色の顔からは表情が伺いしれない。

いや、もしかしたらかなりの衝撃を受けたのかもしれない。  
それからの会話は、お互い見つめ合ったままで無言だ。

二人が口を噤み、暫くして傍に控えていた老齢な警備兵が口を開いた。

「……間違いない。部下が言っていた特徴が一致している」

と低い声で告げると、石像のように動かなかったアスラビ尾崎が重い溜め息を漏らし、車椅子の背もたれに体を委ねた。

「ふむ……」

そう唸ったつきり、目を閉じてしまった。

悠呂はここで引いてはいけないと、声を出した。

「あなたに一言いいたくて！ わざわざ、侵入者みたいな真似までして……僕は来ました」

そう話す悠呂の言葉に、アスラビ尾崎は目を開き体を起こした。

「ほお〜」

それで？と言わんばかりに悠呂の瞳を再び見つめてくる。

負けてたまるかと悠呂は続けた。

「僕は、あなたが禁止区域の……ここ、地下で何をやっているか知っています！」

初めてアスラビ尾崎の表情が変わった。それも驚きの表情ではない。目を細めて興味深そうな顔だ。

怯むなど自分を叱咤しながら悠呂は続ける。

「あなた達は、法律に則った皮膚や骨等の医療用の物でないものを……人間そのもののクローンを作っている！」

目の前のアスラビ尾崎は、膝の上に両手を組みそこに顎を乗せて悠呂の話をじつと聞いている。先を続けると言わんばかりに――。

「くっ……」

その余裕の態度に悠呂は頭にきていた。

「……君の言いたいことはそれだけかね？」

尚も余裕な態度を見せるアスラビ尾崎。

「あなたは、自分が何をしているのか分かっているんですか！」

悠呂は思わず声を荒げてしまった。

すると、アスラビ尾崎は何を思ったのか狂ったように笑い出した。

そんな嘲け笑うアスラビ尾崎を悠呂は睨み付け、口を嚙んだ。

ひとしきり笑うとアスラビ尾崎は、射抜くような眼を向け逆に悠呂に質問してくる。

「私達のやっている事を知っている……か。じゃあ、聞くが君には大切な者はいるかね？」

「……大切なモノ？ それが何だと言うんです？」

「君には、大切に思う人間がいるかと訊いたのだよ」

悠呂は、アスラビ尾崎が言わんとしている事を諮りかね、無言で返答を返す。

「……無言は肯定と捉えてよいのかな？」

「……」

「……まあいい。そこで本題だ。」

そう言つと、アスラビ尾崎は近くに控える老齡の警備兵に顔を向けて手をひとふりすると、彼は書斎机から葉巻を取り出しアスラビ尾崎に渡す。

それをくわえるとアスラビ尾崎はおもむろに火を点け紫煙を煙らせた。

肺に含んだ煙を一吐きし、話し出す。

「もし、その大切な者が理不尽な死を遂げた時……君ならどうするかね？」

「理不尽な死を遂げた時？」

悠呂は葉巻から出る煙に目を向けたまま問い返した。

アスラビ尾崎は、悠呂の言葉に触れず先を続ける。

「その大切な者が、理不尽に誰かの手によって殺されたり、助けられるかもしれない命を助けられなかったら……君はどうするかね？  
そして、何を望むかね？」

悠呂はその言葉にやっと質問の意が分かった。

アスラビ尾崎は、再び葉巻を吸う。

その二人の様子を傍に控える老齢の警備兵はじっと見ていた。

## 第五十章（後書き）

お待たせ致しました 五十章です……いや、あと五話で完結させる  
ことが出来るのでしょうか…少々不安です笑

今回は、『念願叶った対決』でしたので構想がかなり苦戦を強いる  
ものでした。しかも、まだ途中だしね…汗 まっ！何とか頑張りま  
すので応援の程宜しくお願い致します！

（、；）あ、また前回の章みたいはこの後書き消えるんじゃない  
いだろうか？ちょっと心配……管理人さんはあの時の対応として『  
修正からまた後書き書いて』て言ってたけど…私なんかその場の気  
持ちで後書きかくから、いきなりまた書いてって言われても書く気  
になれなくて……どうか、この後書きが消えませんが！

## 第五十一章（前書き）

最終話に向け、多少文字数を増やしております。読みづらくなるかもしれませんがご了承ください。



## 第五十一章

悠呂は静かに応える。

「例え……理不尽な死や助けられずに悔しい思いをしたとしても……僕はあなた達のようなことは……しない」

言い終えると急に目頭が熱くなる。それを隠すように悠呂は俯いた。

「ふっ……果たして、それは本当かな？ 実際その場でお前の愛しいモノが病で倒れたらば？ 友人が目の前で刺し殺されたら？

お前は今言った答えとは違う行動をするのではないかな？」

そう言われ顔を上げた悠呂は、アスラビ・尾崎の瞳を見る。

エメラルドグリーンの瞳……綺麗な色だがどこか淋し気で深い色。

その色と深さに惑わされたか、悠呂の脳裏に父母や兄、はじめの微笑む顔が走馬灯のように浮かんでくる。

「……愛しいモノが……」

はっと気が付き、口を噤む。

(……何を、言ってるんだ！ 僕は！)

アスラビ・尾崎に目を遣ると、彼は口端を上げてこちらを見ていた。

「君はどつちら思っている事と、口にする事が相反しているようだな？」

心を言い当てられたようで、何だか悔しかった……。悠呂は硬く拳を握る。

アスラビ・尾崎は葉巻を村瀬の持つ灰皿でねじ消すと、先を続ける。

「ふふふつ。私に文句があるところへ飛び込んできた時の威勢はどこへやったのかね？」

また、馬鹿にされているー。悠呂は怒りで頭に血が昇るのを感じ、唇を噛み締めた。

そんな悠呂の表情に一瞥すると、アスラビ・尾崎は氷のような冷やかな瞳でこう言い放つ。

「君の戯れ言に、付き合う時間はもうお終いだ。とっとと帰りたいまえ……村瀬！」

後ろに控える村瀬に顔を向け、帰らせろという合図をすると村瀬は頷きこちらに顔を向けると、ゆっくり悠呂に近づいてくる。

(……まだ、話は終わってない！)

悠呂は腰にねじ込んでいた銃を、素早く抜き取りアスラビ・尾崎に向けて叫んだ。

「動かないで下さい！ 撃ちますよ！」

それを目の当たりにした村瀬は、表情を一つも変えずその場で足を止めた。

銃を向けられた本人も、表情一つ変えずゆっくりこちらに振り返る。

「何のマネかね？」

抑揚のない声で問うてくる。

悠呂は重い銃口を両手で支え、アスラビ・尾崎に向けたまま力強く応える。

「まだ、話は終わってません！」

そう叫ぶ悠呂を、アスラビ・尾崎はじっと見据える。

悠呂も負けじと見つめ返す。諦めたのかアスラビ・尾崎はサッと右手を上げ、村瀬に下がるよう合図した。

村瀬も了承し、無言で元の位置に下がる。

悠呂は銃口をアスラビ・尾崎に向けたまま話す。

「あなたは、僕に訊きましたよね？ 大切な者はいるか？」

アスラビ・尾崎はじっとこちらを見たまま黙っている。悠呂は、続ける。

「今度は僕から訊きます。あなたには大切な人がいますか？」

そう言いながら悠呂がそつと銃口を下げると、彼はそれに合わせたようにゆっくり瞳を瞑った。

「いる……はずですよ？ あなたにとって大切な……最愛の娘さんが」

アスラビ・尾崎はうつすら瞳を開け、応接机に視線を落とすと微かな声で問う。

「それで……君は、何が言いたいのかね？」

悠呂は怯まず先を続ける。

「質問を変えます。……あなたは、作られたモノの気持ちはわかりますか？」

その質問に、アスラビ・尾崎の薄らと開けていた瞳が見開かれ急に頭を上げた。

そして、呻くように訊き返してくる。

「なっ……何？ 今、なんと？」

悠呂の返答を待たず、彼はおもむろに後ろに控える村瀬に振り返った。

「お前！ まさか？」

と問われたが、村瀬は無言で首を横に振った。

アスラビ・尾崎は村瀬の返答を見て、再びこちらに顔を戻すと信じられない事を聞いたと言わんばかりの表情で肩を落とす。

暫くの間沈黙に包まれたが、程なくしてアスラビ・尾崎の微かな声が悠呂に向けられた。

「お前は……何を言っているのだ？ 何のことだ？」

俯いてブツブツと話すアスラビ・尾崎の反応に悠呂は、かなり驚愕していた。しきりになぜだと、呟く彼の姿を見てひとつの結論に辿り着いく。

悠呂は恐る恐る口を開いた。

「あなたは……もしかして、彼女に真実を話されてはいないのですか？」

と聞くといきなり彼は顔を上げ、目を剥き出し興奮気味に叫ぶ。

「当たり前だろう！ 何故、話す必要がある！」

その表情は阿鼻叫喚だったー。

（彼は……隠し通せていると思っている。彼女の出生の秘密を……）

悠呂は彼の憎しみに籠もった視線が、逆にいたたまれなくなり、顔

を背けた。

(……でも、彼女は自分が何者なのか……既に気づいているー)

悠呂は固く瞳を閉じると、胸に手を当てた。

(……胸が苦しい。彼女が気付いていることは、彼以外は知っているんだらうか?)

悠呂はそっと、村瀬に視線を遣った。

しかし、村瀬は表情ひとつ変えずこちらの様子を見ている。

「まさか！ お前が！」

いきなり、アスラビ・尾崎に叫ばれ悠呂はハッと彼を見た。

目の前の老人は、悪魔のように血走った眼で悠呂を睨みつけている。握り締められた肘置きはミシミシと悲鳴を上げる。

「村瀬！ 銃を寄越せ！」

アスラビ・尾崎は悠呂に目を向けたまま背中に控える村瀬に叫んだ。

その要求に、あの無表情だった村瀬の顔が変わる。

「しゅっ……修造っ！ しかし……」

渋る村瀬に構わず、口から泡を吹きながらアスラビ・尾崎は吠える。

「早くしろ！ 何を知ってるか知らんが、コイツをここから出しはせん！ 今すぐ消してやる！」

その剣幕に悠呂は、危機迫るものを感じとつさに膝元に握る銃を更に硬く握り締めた。

「村瀬！ 何をしとる！ 早く寄越せ！」

獣のように叫ぶアスラビ・尾崎に悠呂は意を決して叫ぶ。

「彼女は！」

そう言ったところで二人の視線はこちらを向いた。

その視線を受け、悠呂は続ける。

「彼女は、自分が何者なのか気付いています！ 僕が話したのではなくて、彼女じつ……」

銃口を構える重い音がした。

「それ以上は言わせん！」

そう言つて銃を向けてくる相手は、アスラビ・尾崎ではなく後ろに控えていた村瀬だった。

今にも引き金を引きそうな気迫に、悠呂は手に持った銃を構えた。

間をおかず、手に持っていた筈の銃が床に重い音を立てて落ちた。

「……………っつっ！」

すぐに手の甲に火傷のような痛みが走る。

痛みに歪ませ顔を上げると、村瀬は目の前に来ておりその銃口からは湯気のようなものが立っていた。

「……痛いかな？ これはお前が持っていた警護用電流銃ではない。殺傷能力のある最新レーザーガンだ」

そういうと、銃口を悠呂の眉間に向けた。それを見ていたアスラビ・尾崎は狂ったように高らかに笑う。

「ひゃはっはっはっ！ 村瀬、いいぞ！ そのガキを消してしまえ」

「……くっ」

悠呂が後ろに落ちた電流銃を目だけで確認すると、村瀬に視線を戻し意を決してそのまま体当たりを試みた。

その試みはあっさりかわされ、派手に床に転がった。

村瀬は、こちらに向き銃口を向ける。

（今だ！）

悠呂は村瀬の横ギリギリを駆け抜け、転がるように電流銃に手を伸ばした。

光線が空気を掻き切る音が間近に聞こえる。



「うあゝ ああああ！」

するとすぐに肩に鋭い痛みが走った。

肩を撃たれたようだ。 悠呂は痛みで床に転げまわる。

村瀬は尚も銃口を向け、冷静な表情で転げ回る悠呂を目で追っていた。

## 第五十一章（後書き）

（。°。#） 五十一章！無事投稿だゴルア！

（、、\*） あっ のつけから失礼しました えっとですね、かなり苦勞をしまして、無事投稿できたことに嬉しさを表現しました  
いえいえ、怒っちゃないですよ

楽しみにお待ちいただいている読者様には、毎度遅筆で逃避癖のある  
愁真を温かく見守っていただき、誠に有難く思います

これからも、めげずに愁真を応援していただくと鼻水垂らして号泣  
する程嬉しく思います（T—T）次話も首がキリンになるほど楽  
しみにお待ち下さい ではなく

## 第五十二章

あの『シュウ』という少年と、研究員が消えて行ったその扉を星羅は腑に落ちない気分です暫く見据えていた。

何も教えてくれない……あの時と同じだと爪を噛み、星羅は幼い時の自分を思い出していた。

――あれは、星羅がまだ八才だった頃。

父親が孤児施設の運営をしていることは幼いながらも分かっていました。

だから、研究所に沢山の子供がいることになんの疑問も持たなかつし、自分も遊び相手が欲しくて良く彼等の所へ遊びに行ったり、彼等もたまに星羅の邸やしきに遊びに来ることもあった。

その内子供が一人、二人と居なくなることもあったがそれも良い人の所へ養子として貰われて行ったのだと思っていた。

そんなある日、自分と同年の男の子がゼエゼエと荒い息を吐き不調を訴えたので、星羅は彼に付き添って医務室へ連れて行ってあげた。

彼を医務員に見せると、その子の症状を見ただけで医務員はあか

らさまに青ざめたのだ。

星羅の主治医も兼ねている彼なのでいつもの調子で親しげに訊いてみる。

「ねえ、どう？ イサムくんの具合？」

暫く茫然とした様子だった医務員は、我に返ったようにこちらを向くが彼の顔は引きつっていた。

「どうしたの？ イサムくんの病気、悪い病気なの？」

そう訊くやいなや、医務員は血相を変え星羅の腕を引いて、医務室を出る。「痛っ！ 痛いよ！ ねえどうしたの？」

強引に引きづられる形で医務室から離れると、医務員の手がサッと放される。

強く持たれた腕が少し赤くなっていたのでさすりながら星羅は、医務員を見上げた。

いつも優しく接してくれる医務員の彼……今は星羅に背を向けている。

――何だか怖い。

さっと此方に振り返った彼は暫くじっと星羅を見下ろし、一度堅く目を閉じるとゆっくり視線を合わせるように屈む。

「……今日は、帰りなさい。」

掠れたような声で彼はそう言つと星羅の頭にポンと手を置いた。何がなんだかわからない星羅は問う。

「えっ？ どうして？ だってまだ、来たばかりだよ？」

そう言う星羅に悲しそうな瞳を向け、すぐに彼は首を横に振る。

「お嬢様……お願いします。ご自宅まで誰かに送らせますから……」

そう言われては帰らない訳にはいかず、星羅は渋々頷きその場を後にした。

次の日、星羅はまた子供達と遊ぼうと再び研究所へやってきた。

今日は年下の女の子とお人形遊びをしていると、傍でヒーローごっこをしていた男の子の一人がいきなり、苦しそうに咳き込み始めその内その場に座り込んでしまった。

それを見ていた、女の子は星羅にこんな事をぼつりと漏らした。

「……またよ。昨日からずっとこんな感じ」

「えっ？ どうしてのこと？」

そう訊き返すと、その女の子は周りをチラチラ気にしてから声を落として話してくれた。

「昨日も……ほらっイサムくんが……。」

「あっ……イサムくんか。あの子私が医務室に連れて行ってあげたんだよ。あれからどうしたのかわかってずっと気になってたんだけど……リンメちゃん知らない？」

リンメという少女は、知らないと言った。

「……そう」

「星羅ちゃん、それだけじゃないんだよ。実はあれからまた夜にキャリーさんとタマテちゃんとユズキくんが苦しいって言ってね、医務室に行ったんだけど誰も帰ってこないの」

「えっ？ それ本当？」

つつい声を上げてしまった星羅に、リンメは慌てて自身の口の前の人差し指を当てて

「しい〜！ 星羅ちゃん、声おっきいよー！」  
と咎める。

「あっ……しゅめん」

「……私、施設員さんにどうしてか訊いてみたの」

そう言っつてリンメは施設内の入り口に立つ施設員に目を遣った。

先が気になる星羅は、続きを促す。

「それで？ 何て言っつたの？」

と訊くと施設員から目を外したリンメは、こちらに顔を向け真剣な眼差しで星羅を見て続ける。

「それが、いくら訊いても教えてくれないの……ただの風邪だつて」  
そう言っつとリンメは、軽く息を吐いて人形の髪を撫でる。

そのリンメの手を見ながら星羅は何か、大人達が隠している事に不信感を抱きつっつあつた……。

帰宅の時間が迫り帰り支度をしていた星羅は、先程から慌ただしく声のする方に目を遣つた。

どうやらまた、不調を訴えた子供が出たようだ。 星羅は、その医務室に連れて行かれる子供をじつと見ていた。

すると、後ろから誰かに呼ばれたので振り向いてみるとそこにはあの施設員が立っつていた。

星羅は呼び掛けられた意味がわからなくて首を傾げていると、その施設員の彼女は星羅と同じ視線の位置に屈み、肩に掛かる白銀の髪を後ろへ流してくれる。

「なあに？」

星羅が問うと、彼女は悲しそうに微笑み

「……………うん。お嬢様には大変残念なお知らせがあるので……………お呼び止めしました」

そういので星羅は、じつと彼女を見た。

「……………お嬢様も、知ってらっしゃるでしょ？ それで……………そのつ暫く、あの子達とお遊びになるのは止めただかねばなりません」

「えっ？ どうして？ だってリンメちゃんとか元気だったよ？」

そう問い返す星羅に、施設員の彼女は困った表情を見せて

「リンメは、まだ大丈夫かもしれませんが……………念の為ということでは

そう言って微笑む彼女を見て星羅は何かがおかしいと感じずにはいられなかった。

「……………わかった」

そう彼女に告げると、星羅は出口に向けて歩いた。



「ーそうあの時も皆、私に何も言わず何かを隠していた。あの後、研究所にも入れなくなつて納得のいかなかった私はコツンリ研究所に向かった。そして、自分の生い立ちを知つた……。」

お父様はまた、何か私に隠し事をしている……。

『うあ、あああ！』

誰かの痛みに叫ぶ声が廊下に響き星羅はハッと顔を上げた。

(……まさか。この声は!?)

声がしただろう先を見る。この方向は父親の自室……星羅は嫌な予感がして先を急いだ。

父親の自室の前に来た星羅はドアの前に立つがロックをされていて開かず、苛立ちを露わに扉横の操作パネルを乱暴に操作して中に踏み込んだ。

星羅の突然の登場に、修造も村瀬も驚いている様子を見せる。

「お父様！今のつ……」

と言い掛けて目をみはる。

村瀬の立つ先に、肩を押さえ呻く人物を目の当たりにし星羅の頭の

中は真っ白になってしまった。

ヨロヨロと彼に近づき、傍に座り込むと震える手で彼の体を揺する。

「ゆづ……る。 悠呂…… しっかりして」

それだけ言うと、後は涙で声が詰まる。

彼は小さく呻くと、うつすら目を開けた。

「ううっ……せい……ら」

どうしてと言う言葉は掠れて声にはならなかった。

星羅は、涙を拭き彼の頬に手を添えると小さく頷いた。

そして、ゆっくり村瀬に目を遣る。

「村瀬……あなたが彼を撃つたの？」

村瀬は銃口をこちらに向けたまま、表情も動かさず何も応えない。

「何故！ 何故撃つたの！」

星羅は語気荒く、村瀬に問う。

それでも、眉一つ動かさず彼は銃口をこちらに向け立っている。

そこへ噎れた声が割って入った。

「星羅、そいつから離れなさい」

星羅は声のした方へ視線を向ける。

応接セットの一角に車椅子のまま収まる父親は、冷めた表情でこちらを見ている。

「お父様が命令したの？」

修造は軽く息をつくと、仕方のない子だと言わんばかりに星羅の名を呼ぶ。

「いいか……そいつは」

「応えて！お父様！」

星羅は断固離れる事を拒否するように、悠呂に覆い被さりながら声を荒げる。

仕方ないと言った感じで修造は口を開く。

「ああ。私が撃つよう命令した……そやつは……」

と言いかけたのを遮って星羅は叫ぶ。

「何故撃つたの！ 撃つ必要なんて本当はなかったんじゃないの？」

星羅の怒りを露わにした表情に修造は何も言わずじっとこちらを見ている。

## 第五十二章（後書き）

長らくお待たせしまして、本当に申し訳ないです。

何とか仕上がりましたが、いかがでしょうか？ ちよつと簡説にしすぎたかな？という部分がありますが……汗

もつと掘り下げた内容にしたかったのですがなんせ、纏めるのが下手なもので読みやすいようにとだいぶ省きました笑

以前、ご指摘いただいた説明がしつこ過ぎるといふのを組み入れてみたのですが……意味が違ったかな？（、、\*）

次話もお待たせしちゃうかもしれませんが、どうぞ宜しくお願います

## 第五十三章（前書き）

長らく、更新を停止していたこと深くお詫び致します。これからは完結に向け更新してゆきますので、宜しくお願い致します。

## 第五十三章

星羅はその父親の視線を怒気を露わにした視線で返し、静かに口を開く。

「お父様、他に私に隠していることはありませんか？」

虚を突く質問をされ、修造は顔を強ばらせる。

「なっ……何のことだ？」

その気迫、いや質問に動揺し、修造の声は少しばかり震えてしまった。

星羅は視線をこちらのままに、悠呂に覆い被さるようにつしていた自分の体を起こし、あの少年の名を口にする。

「……………シュウ」

修造の顔が更に硬くなる。

「あの子に……………会ったのか？」

「……………」

娘の無言。修造は星羅から視線を逸らし、車椅子を動かした。

その背に追いつがるように星羅は質問を浴びせる。

「彼は何？ お父様は何故私に……」

そこまで口にして、星羅はあの幼少の頃の記憶と憤りが一気に湧き上がってくるのを感じた。そして抑えられなくなり、体中が怒りに震える。

「お父様はいつもそうっ！ 私に何一つ真実を教えるては下さらない！ イサムくんの時だって！ ……お姉ちゃんのことだって！」  
もう、抑えきることができなかった。

「私の本当の出生だって！」

叫んでしまつて、はたと我に返り慌てて口を押さる。

はたと顔を上げ、修造を見るが彼はこちらに背中を向たままでどこか遠くをみている。

慌てて父を呼ぶと、それを遮るように静かで落ち着いた声が返ってきた。

「そうか……お前は気付いていたんだな……なにもかも」

そう呟くような父の背が痛ましかった。  
感情のままにぶつけてしまった言葉に後悔しながら、星羅は修造の後ろ姿をじっと見つめる。

電動の音をさせ、車椅子をこちらに向けた修造の顔は涙に濡れていた。



――胸が痛んだ。

そして唇を震わせながら、掠れた声で修造は語り出す。

「初めは…隠すつもりではなかった。しかし、日に日に成長するお前を見て、話さなくてよいのではないかと思うようになった…いや、話せなかった。ショックを受けるお前の顔など見たくはなかった」

修造はおもむろに自分の両の掌を見つめる。

とても愛おしそうに目を細め、先を続ける。

「失ったはずの娘が、またこの手に還ってきた。その事が本当に信じられなくて…嬉しかった」  
そう語ると堅く拳を握り、声色を変えた。

「しかしっ、お前が八つの時にあの事件が起きた！何もかも順調にいらっていた！そうだったんだ！そう、思っていたのにつ」

修造の目は血走り、噛み合わせた歯が悲鳴をあげる音が聞こえる。

「たった…たった一人の被験体が妙なウイルスにかかったが為に…成功しかけの他の被験体までも息絶えていった…その様を見て、私は急に怖くなった。息絶えて逝く彼等とお前が重なって…また、この手から奪われてしまうのではないかと…」

小刻みに震える手を、筆るのではないかという勢いで顔に当てると、修造は嗚咽を漏らした。

――静かな部屋に父親のむせび泣く声だけが響く。

子供のように震えて嘆く父の、弱く儂い部分を目の当たりにして星羅の心は激しく揺れる。

傍で気を失い横たわる悠呂に目を遣り、そっと頬に触れると強い視線で村瀬に目を遣った。

村瀬は相変わらず涼しい瞳を此方に向けていたが、銃口は向けず足の横にだらんと持っていた。

攻撃の意志のないことを確認して星羅はゆっくり立ち上がり父の元へ歩く。

小さくなってむせび泣く父の背にそっと手を遣り、優しく撫でてやる。

足に不自由はあるが、いつもしっかりして大きな存在だった父。

しかし、どうだろうこの手に触れる儂い感触は――。

痩せた背を撫でながら、揺れ動く心と必死に戦う。

父の愛しい者を失う悲しみは分かる、しかし……。

星羅は悠呂が横たわる場所に目を遣った。

「……今、ここで大切な者が失われていくのは違う。」

星羅は父の背中から手を離し、悠呂の元へ行こうと一歩踏み出したその時、手首を強く掴まれ後ろへ引き寄せられた。

驚いて振り向くと、修造が俯いたまま手首をしっかりと掴んでいる。

それに構わず振り払おうとしたが、物凄い力でそれを阻止され、驚愕した。

「……！？ お父様、離して！」

離れようともがくが、離す様子は全くなく、代わりに顔をゆっくり上げた……。

その表情は羅刹のようで、背筋が凍る。

「おとう……さま」

「……行くな。星羅、行かないでくれ」

途端に表情を歪め、星羅の腰元にすがり顔を埋めた。

「…………お父様」

「お願いだ…………私から、私から離れんでくれ」

そう懇願する父の声の後に、鉄が擦れ合わさる冷たい音がした。

慌てて振り返ると、悠呂の胸倉を持ち、その額に銃口を突きつける村瀬が居た。

「なっ…！？ いやっ！ やめて！」

星羅の緊張した声が飛ぶ。

激しく身を振るが、修造はしっかり腰に縋りついたままで、一層腕に力を込めた。

「離して！ 離して！ お父様あ！」

声を上げ懇願するが手は緩められることはない。

「いやああ！ 悠呂っ！ 悠呂お！」

声の限り、悠呂を呼ぶが彼は目を醒ます様子はない。

「……………」

ぼつりと修造は噎れた声を零す。

「……………」この研究所も終わりだ。 良くも今まであやつ等は見

逃してくれていたものよ……」

修造は自嘲したように不気味に顔を歪めた。

その表情に羅刹が戻ると、力づくで星羅を自分の元に寄せ跪かせると、娘の頬を両の手で挟んだ。

しかし、目の前の娘は自分を見て恐怖に顔を強張らせ、頬に大粒の涙を零している。

――壊れていく……このまま、壊れてしまいそうだ……。

その時、修造の中の何かが崩れ落ちて壊れた音がした。

## 第五十三章（後書き）

いや、やっと更新することが出来ました。半年も何も書けず、案が出ず苦惱な日々でした。しかし、こんな拙作でも楽しみにしてくれている方々に励まされ再び、書くということが出来ました。支えになって下さった方々には本当に感謝してもしきれないです。本当に有難うございます！あと何話か増えますが完結へ向けて頑張りますので、最後までお付き合い下さい。

## 第五十四章

―禁止区域外―

星羅が中に入ってもう何時間が経っていた。

これからの突入や潜入員をどう動かすか、万一の場合の準備について悠呂の父、『浅乃木 比呂』は清と刑事の澤田、アゲイスと入念に打ち合わせをしていた。

怪我人の為の救急はどこに控えさせておくかと話しをしている時のこと、澤田は自分の顎髭を触り不気味に笑うと嗶れ声で質問をしてきた。

「小耳に挟んだんですがね……浅乃木さん、あなたのこの下のせがれが中に居るんだってねえ〜？」

その質問に、その場が凍り付いた。しかし、澤田はしてやったりという顔をして、濁った目を浅乃木に向けている。

浅乃木はニヤニヤと不気味に笑う澤田を一瞥し、心の中で毒づいた。

（全く、あのタコ親父の人選センスのなさには呆れる。 よりによつてコイツを寄越すとはな……）

澤田から視線を逸らし、まあなと応え、話を先に進めようとする。尚も食い下がってくる。

「浅乃木さんも大変ですなあ〜よりによって大事な倅がこんな事件に巻き込まれちゃってねえ〜」

澤田の表情は面白がっているという風だった。しかし、浅乃木は相手にせず話を進める。

その場の雰囲気も気にせず、澤田は更に続ける。

「ああ〜！もし、手違いで浅乃木さんの大事な息子さんが……」

下手な芝居を打ってくる。

「澤田刑事……！」

寸出の所で助け船が出た。その主は清だった。彼はどうやらかなりご立腹だったらしい……。

「今は、その手違いが出ないようにと入念な打ち合わせをしているんでしょう！無駄口は慎んで下さい！」

階級下のしかも部署違いの者に、窘められて澤田は不服そうに鼻を鳴らした。



大体の打ち合わせを終え、ふと顔を上げると少し離れた土手に一人の少年の姿が目に入った。

澤田の濁った目と嫌味の応酬から逃れたいのもあって、浅乃木は清の肩を叩いた。

「何ですか？ 先輩」

「清、悪いが後は頼む。それとおっさんもやつつけといて」と斜め後ろを親指で差した。

「へっ？ 何言ってるんすか！ まだ、打ち合わせは終わってないんすよ？ まあ…あのおっさんはやつつけちゃいたいですけど……」

「じゃっ…任した！ 頑張ってくれたまえ！ スレッド・桐矢くん」

「あっ……先輩！」

後を清に任せ、その場を離れた。

青い髪の少年は、胡座をかいて手近にある草を落ち着かない様子で無造作に抜いては放りを繰り返していた。

向けられている視線の先は、禁止区域で何時間か前に星羅が消えた場所である。

余程、気掛かりなのかこちらの事には全然気付いていない様子だ。

浅乃木は彼の真後ろに立ち、暫くずっと様子を見てみたが、気付く様子がないのでひとつ溜め息をつく、彼の頭にぼんと手を置いた。

「!？」

そこでようやく浅乃木の存在を知り、不機嫌そうに頭の手を払う。

そのあまりにも彼らしい反応に噴き出し、構わず彼の隣に腰を下ろした。

「んなっ!？ 勝手に横に座んなよ！」

憎まれ口を叩く少年をよそに、浅乃木は笑いながら胸元からタバコを出し、一本くわえると慣れた手つきで火を点けた。胸一杯に煙を吸い込むと、ゆっくり紫煙を吐き出す。

「ふう、つれないねえ。そんなに嫌わないでよっ。いっちゃん」

「いっちゃんて言うな！」

お決まりの返答が返ってきて、尚も噴き出した。

「あんまりカッカッしてると、ハゲるぞ？」

「ハゲねえよっ！ そんな話聞いたことねえ！」

「いっちゃん。冗談だっばん いっちゃん」

「気持ちわりいなっ！　つか、いつちゃんて言うな！」

「前から気になってたんだけど……漢字でいちと書くからいつちゃんなのか？　何ではーちゃんじゃないのよ？」

「知るかつ！　うちの母ちゃんに聞けよっ！」

「ん〜……面倒くせえからいいや」

「だったら聞くなよ！　おっさん！」

「んまつ！　今、お宅なんとおっしゃって？　おっさんって言ったの？　ひっど〜い！　悠ちゃんにも言われたことないのになっ」

と顔を覆い泣き真似をして見せる。

「だ〜！　うぜえ！　あっち行けよ！　まだ作戦会議の途中なんじ

やねえ〜のかよ！」

「ん？　ああ〜お前の頼りになる従兄弟の兄ちゃんに任せてきた」

「任せてきたって……大丈夫なのかよ？　あんたが指揮とってんじやねえのかよ？」

嫌に真面目な顔で、質問してくるので浅乃木はちょっと拍子抜けした。

「……………ぷっ」

「なっなんだよっ！ 何笑ってんだよ！」

とはじめは顔を赤らめた。

「いやいやっ……嫌に真面目な顔したから、つい……」

はじめは、慚然とする。

「まあ〜そう、怒るな。俺は指揮官じゃない、刑事が来た時点で権利は殆どあっちにある。俺等は情報を提供するだけさ……」

浅乃木は、また煙草のフィルターを口に含むと息深く煙を吸い込んだ。

「……なんだよ、それ」

はじめは煙を空に向かって、吐き出す浅乃木の横顔を見て、納得いかないという顔をする。

「俺の所属してる部署は末端に近いからな、諜報活動が主だし……警部って言われてたってうちの部署内だけの効力に近い、刑事がいなけりゃ逮捕だっただけな」

そう、言っただけであっけらかんと笑う浅乃木に、はじめは少し苛立ちを覚えた。

「じゃ〜、おじさんは何で刑事にならなかったんだよ？」

少し怒り気味の口調に、驚いて浅乃木は仏頂面したはじめに目を遣り、微笑むと……。

「教えてやんなさい」とあかんべえをした。

「なっ……。 ああっ！ くそっ！ ム力つく！」

よほどあかんべえが効いたのが、顔を真っ赤にしてそっぱを向いてしまった。

そんなはじめの姿に優しく目を遣り、再び紫煙をくゆらせた。

そんな時だった。浅乃木の右腕からけたたましい音が鳴り響いた。

その騒がしい音に、そっぱを向いていたはじめが、慌てたようにこちらを向く。

浅乃木は、半分以上灰になった煙草を砂利で押し消し、受信ボタンを押した。

モニター画面に現れたのは何年か中へ潜入させておいた、少し体付きの良い潜入員だった。

どうやら何か掴んだらしいと、その潜入員の表情から窺える。

「お疲れさん」

浅乃木は画面の中の潜入員に労いの言葉を掛けてやる。

「お疲れ様です」

画面の中の潜入員は固い表情で返す。

浅乃木もその表情に身を引き締め、対応する。

「…何か動きがあったのか？」

浅乃木の固い口調に傍にいたはじめも緊張が高まる。

画面の中の潜入員ははい、と歯切れの良い返事をすると言話を話し始めた。

「浅乃木警部のお子さんの行方ですが……秘密裏に調査させたところ、どうやらこちらに潜入しているのは確かなようです」

その内容に浅乃木は眉根を寄せ、口に手を当てた。

会話を傍で聞いていたはじめは、いてもたってもいられず強引に浅乃木の右腕を掴むと、画面の中の潜入員に噛み付く勢いで質問した。

「それで？ 悠呂は？ 悠呂は無事なのかよっ！」

いきなり現れた少年の姿に、画面の中の潜入員は目を丸くする。

「あつ…浅乃木警部、この少年は？」

画面にかじりつく、はじめから自分の右腕を奪い返した浅乃木は、ちらりとはじめを見て……。

「ああ……気にするな。息子の幼なじみだ」

そう画面の中の潜入員に告げるとはじめての頭に手を置き、優しい口調で語りかける。

「はじめ……心配してくれて有難うな。だが、少し大人しくしていてくれるか？ ここで一緒に話を聞く分には構わないから」

浅乃木のその言葉に、はじめは自分のしたことの恥ずかしさを知り、赤面して頭の上にある手を払っいのけた。

潜入員の話によると、悠呂は何らかの形で研究所の深部に行ったようだ。

画面の中の潜入員は渋い顔をして、今知る悠呂の情報を伝える。

「自ら行ったのか、連れられて行ったのかは不明なんです……」

「……そうか」

浅乃木は無精髭を触りながら、この状況下なのに何故か、息子の突拍子もない行動に心躍らされている自分がいることに驚いた。

「それで、娘の行方は？」

との質問に潜入員は、ひとつ頷いて……。

「恐らく、ホシに接近したかと思われませう」

「そうか、わかった。ご苦労、引き続き頼む。作戦は以前教えたと変わらさずだ」

「了解しました」

失礼しますとの声で通信は切れた。

隣で心配そうに、何も映らない画面を見たままのはじめにヘッドロツクをすると、浅乃木は彼の髪をクシャクシャと触りながら――

「大丈夫！ あとは、おっさん達に任せろ！」



と元気よく声を掛け、はじめをヘッドロックから解放してやる。頭をクシャクシャにされて、無然としているはじめに笑顔で応え、じやあなと言つと踵を返し、清達の元へと歩きだした。

## 第五十四章（後書き）

え〜と、かなり考えに考えて書き上げました　　悠呂父やはじめく  
んファンの方には嬉しい章です  
完結はあと5話ほどに延びるかと思いますが、最後までお付き合  
いいただければと思います

次回をお楽しみに……

## 第五十五章（前書き）

死に関わる表現等があります、決して真似などしないようお願い致します。

## 第五十五章

ー近くで何か音がする。とても重くて冷たい音。それにひやりとした感覚を額に感じる。

……微かだが誰かが呼ぶ声もする。

とても悲しそうな声……。

なんだかその声を聞いていると、この暗闇から早く抜けださなければならぬ気がする。

儂げに聞こえる声に意識を集中して、抜け出そうと試みってみるが、しかし、抜け出すどころか肩の辺りがじりじりと燃えるように熱を帯びてくる。その感覚が少しずつ皮膚を射抜くような痛みに変わり、悠呂は暗闇からゆっくりと目を醒ました。

ぼやける視界にまず映ったものは、額に冷たい感触のする黒く光るものだった。

この黒光りするものが、暗闇の中で聞いた重く冷たい音なのだろうと、ぼんやりした思考で思う。

すると、聞き覚えのある声がどこからかする。悲しそうな、少女の泣く声が今度ははっきりと聞こえる。

どこだろうと鈍く首を巡らすと、少し離れた場所に二つの影が見える。ぼやけた視界では良く捉えられず、目に力をいれる。

見えたひとつの影に見覚えがあった。

――星羅？ どうしたの？ 何故、泣いているの？

雲の上にいるかのような感覚と思考に酔いそうになる。瞼は重く再び閉じよと命令してくるが、これに従ってしまつともう二度と開けることができなくなるような気がして、悠呂は必死に閉じようとする瞼と闘つ。

そこへ、男性の低い声が聞こえた。

「ふつ……撃たなくとも放っておけばそのまま逝きそうだな」

その声は間近に聞こえる。

声の元を探して、視線をさまよわせると、真正面に男の姿を捉えられた。

涼しげで、蔑むように自分を見下ろす男。

そして、さつきから額に感じる冷たい物がしっかりしてきた視界にはっきりと映る。

その正体は、数分前に自分の肩を射抜いたあの銃だ。  
悠呂は、弾かれたように身を引いた。

「どつやら、お目覚めのようだな？ 幼き侵入者よ」

皮肉を含むその低い声は、どこまでも冷たい感じがして、人を殺めることなど一切厭わぬ口振りだ。

「…………おとつお父様。 やっやめて」

星羅の緊迫した声がして、悠呂は慌てて星羅の方へ振り向いた。

その光景に我が目を疑う…………。

今にも星羅の首に手をかけようとする、アスラビ・尾崎の姿――。

「やっやめろお！」

無意識に体を動かしたが、動くことができない。

「!？」

そこで初めて自分の胸倉を相手に掴まれていることに気がついた。

「はっ…………離せっ！」

掴む手を剥がそうともがくが、びくとも動かない。

「……………」

「ふっ…どうした？ もう諦めたのか？」

村瀬は小馬鹿にしたように口元を歪め、挑発をしてくる。

「くっ……………」

悠呂は眉根を寄せ、相手を睨む。

村瀬はそんな悠呂を鼻で笑うと、彼の胸倉を引き寄せ耳元でこう呟いた。

「君は…なぜ、そう必死になる？」

「……………」

「まさか…星羅お嬢様に気がありかな？」

その質問に動揺し、顔を赤らめると悠呂は男から顔を逸らした。

「凶星か……………」

村瀬は高らかに笑い、すっと表情を消すと悠呂の胸倉に力を入れ、服で気管を絞め始めた。

「うっ………………」

キリキリと絞め上げられ苦しくなる。

「君は、どうやらとんだヒーローっこをしてしまったようだな」  
男の力はどんどん強くなり、宙づりの形で気管を締め上げていく。

「かはっ……」

「ヒロインを助ける為に単身、こんな所までやって……しょうのない坊やだ」

悠呂は、この男の拘束からなんとか逃れようともがいてみるが、その力は尋常ではなく、段々と意識が遠のいていく。

「ーくそっ……」。

『悠呂！』

遠のいていく意識の中で、聞き覚えのある声がした。

『おいっ！ 悠呂！ 何やってんだよ！ しっかりしろよ！』

『ほんと、お前って弱々なな』

「ーはじめ…くん？」

『なんだよっ！ 悔しかったら巻き返してみろよ』



『お前、負けたまんまで悔しくないのかよっ！』

――えっ？

『意地を見せるよ！ 意地を！』

――わっわわわわわわ。

『わかってるよって、そればっかかよ。ほんっとお前、口ばっかなのな』

――違っ！

『違っんなら、態度で示せよ！ 男だろっ！』

――うるさいなあ。

『お前、やる気あんのかよ！』

――うるさい！

『お前、負けたまんまかよ！ それで、また逃げるのか？』

――うるさい！黙れ！

「ふんっ………終わりだな。 呆気ない……ものっ……ぐああっ」

気管を圧迫する手の骨が軋む音を立てる。

「ぬあつ……に……」

その尋常じゃない力の持ち主は、ぐったりと俯いているのに村瀬の手を剥がそうと動いている。

村瀬は堪らず、彼の胸倉から手を離した。

拘束から解放された悠呂の体は、床に崩れ落ちると、不足のものを一気に肺に取り込んでむせた。

「がはっ……けほっけほっ」

村瀬は、折れそうになった手をかばいながら顔を歪める。

「くっ……しぶとい小僧だ。あのまま絞め殺されればよかったものを！」

村瀬はおもむろに、銃口をこちらに向けた。

悠呂は肩で息をしながら、照準を合わせてくる相手を睨みつける。

何かが空気を割く音がして、悠呂は重たい体を横に避けると先までいた辺りの床に一筋の黒い線が入った。

続けざま、村瀬はレーザー銃を撃ってくるも、悠呂は間一髪のタイミングで右へ左へ転がり、躓きながら避けた。

「はっはっはっ…避けるので一杯一杯といった感じだな」  
わざと外しているのか、高らかに笑いながら容赦なく打ち込んでくる。

「…一瞬、タイミングがずれた…」

悠呂の頬に赤い筋がつく。

「タイミングが合ってきたかな？」

村瀬は不気味に口角を上げた。

その表情に後退りしながら悠呂は、村瀬の隙を窺う。

しかし、先程の首への圧迫で酸欠なのと銃撃から逃れる為に動き回ったせいか、これ以上体が動きそうになかった。

「…どっどっしよう？ もう、体力が…」。

村瀬は一歩二歩と銃口を向けながら、近づいてくる。

それに合わせて悠呂も一歩二歩と下がる。

「や…めて…」

苦しそうな星羅の声がして、悠呂は慌ててそちらに視線を向けた。

星羅の細い首に、アスラビ・尾崎は手をかけている。

「!？ 星羅っ！」

「よそ見をされていていいのかな？」

はっと我に返り、村瀬に視線を戻すと再び、自分に照準を合わせてきた。

後退ると、何かが踵に当たった。

「!？」

村瀬に気付かれないように、視線だけを足元に遣ると数時間前に弾かれたあの銃が、妖しく黒光りをしている。

まさに好機が訪れた。しかし、あの男に気付かれないようにしなければ……。

悠呂は嫌な汗をかきながら、村瀬を睨みつけた。

## 第五十五章（後書き）

期間を置かず連投稿ができたのがちょっと嬉しいです

えと、小説書きというのはプロでもバンバン構想が出てきて書いていると思われがちですが、実際はそうではありません やはり、波があるそうです。全く出てこなくて一年なんて方もいるらしいです。そんな情報を聞いて、改めて執筆というものの難しさを知りました。まあ、文法も怪しい、素人が語る話ではなかったですね汗  
次回もお楽しみに

## 第五十六章（前書き）

大変、長らくお待たせ致しました。少し間が空きましたので乱文気味です。あと、少し長くなっております。ご注意下さい。

## 第五十六章

薄闇の中、男は素早い指さばきでキーボードを叩き、ぶつぶつと呟いている。

その大画面には夥しい数字と文字が羅列し、物凄い早さで下にスクロールされていく。

部屋の中はしんとしていて、男が打つキーボードの音とコンピューター操作の解除を示す音だけが響いている。時折、不気味な笑い声を上げ口元を歪めた。

何かを打ち終え、Enterキーを押すと目の前の画面は文字の羅列から建物の見取り図に変わり、何枚か表れた。

「クツクツクツ……いいぞ、これだあ」

男は出てきた見取り図を舐めるように眺めると、顎に手を置きながら上下ボタンを操作してスクロールする。

途中いくつかの見取り図で手を止め、画面をクリックして大きくしたり、戻したりして何かを思索しているようだ。

あるひとつの見取り図を見つけ、完全に手を止めた。

「ここからするか……」

不気味に笑んで独りごちると、顎に置いた手を下ろし姿勢を前に戻して再び素早い指さばきでキーボードを叩き始める。

画面はみるみるうちに数字と文字の羅列が埋め尽くし、それに加え見取り図達が姿を出しては消えを繰り返していく。

そして、見取り図の一つ一つに赤いマークがついていく。

「フツ…フツ……フハツハツハツハツ」

笑いが止まらない。

「これで終わる…俺達のすべてが…あはっ…あはは…さあ〜鎮魂歌だ！ 存分に味わえ！」

勢い良くEnterキーを押した。

間を置かずに目の前の大画面は赤一色に染まり、中央にデカデカと「DANGER」の文字が点滅する。

するとすぐにけたたましい警報音が鳴り、抑揚のない声が緊急アナ



ウンスを告げる。

男は含み笑うと、すくりと立ち上がりその部屋を後にした。

悠呂は後ろ、足下にある銃をどうやって我が手に取るのか？村瀬の様子を伺いながら思索していた。

ところが、体が飛び上がる程のじりりといった大音量が鳴り響いた。

「緊急警報、緊急警報 プランZが発令されました。直ちに所内から退避して下さい」

「なっ…何？ 緊急…警報？」

悠呂は突然の出来事に啞然としている。勿論、目の前の村瀬も同様だが彼の反応は悠呂のものとは幾分違った。

「何っプランZだと！？ 一体どういうことだ！」

大声を上げた村瀬は、悠呂との対峙も忘れてすぐさま修造のデスクに向かう。

どうやら彼も知らぬことらしい。

「ひやあああ……！」

いきなりの奇声にそちらに目を遣れば、アスラビ・尾崎が狂ったように頭を掻き毟りその場に頭を抱えて突っ伏してしまった。

彼の傍には、いわれなき戒めから解放された星羅が苦しそうに咳き込みながら、倒れている。

苦しそうにはいるが彼女は無事らしい……。

悠呂は安堵し、小さい溜息をつくと足元の銃を拾い上げ腰元にねじ込み、彼女のもとを這うように近付いた。

「星羅、星羅？ 大丈夫？」

彼女の体をゆっくり起こしてやりながら、耳元で呼んでやる。

ぐったりしている彼女は悠呂の声に反応し、眉根を寄せて呻いた。

良かった、意識はあるらしい。

しかし、あのけたたましい警報音とアナウンスは今も続いている。

彼女の体を支えながら、悠呂は天井を仰ぎ見た。

「私だ、これは一体どういうことだ？」

警報音の中にあの低い声が混じる。デスクでどこかに連絡を入れる村瀬に目を遣る。

「何！？ 良くわからんだと？ 何をしているすぐに調べろ！」

村瀬は怒鳴ると乱暴に通信機を切った。

しばらく、デスクに拳を打ちつけ肩を震わせていたが、すぐにこちらに顔を向けたので、悠呂はとっさに星羅を庇うように後ろ背に隠し身構た。

村瀬は少し嘲笑ったように見えた。

何というか、してやられたと言った感じで自分を嘲笑ったように思える。

そしてあの険しい顔から一転して、覇気のなくなったような顔をして床のどこか一点を見ていた村瀬は何か意を決したように、眉根に力を入れると真っ直ぐに悠呂を見た。

悠呂は、身構える。

村瀬は真っ直ぐこちらに向かって来る。

腰元にねじ込んだ銃に手を置き、息を飲んだ。

ところが村瀬はそんな悠呂を無視し、さっきから突っ伏し訳の分からないことを呟いているアスラビ・尾崎に近づくと、憐れむような顔をしてじっと彼を見下ろした。

「……んっ、悠……呂？」

後ろから声がする、振り向くとゆっくりだが星羅が体を起こしている。

慌てて、彼女を支えて声を掛けてやる。

「大丈夫？」

「……うん、有難う」

そう応えた彼女は、じつとどこかを見つめる。その視線を辿ると、どこか壊れてしまったアスラビ・尾崎が村瀬に抱えられ車椅子に座らされている姿だった。

彼女はそんな父親の姿を見ながら、ポロポロと涙を零す。

悠呂も、何とも言えない気持ちになって唇を噛んだ。

しかし、いたたまれない思いではあったが、先のアナウンスが気になり悠呂は気持ちを切り替えて、彼女を立ち上げらせようとした。

その途端、大きく床が揺れお互いバランスを崩し再び座り込んでしまった。

「なっ…なに!？」

何がどうなっているのか分からない星羅は、悠呂の腕にしっかり掴まりながら天井を見上げた。

「第九区、研究資料庫爆発まであと一分三十秒……」

あの抑揚のないアナウンスが非常な通告をする。

「ばっ爆発!? この研究所が爆発だつて？」

悠呂は背中に冷たいものを感じた。

その声にアスラビ・尾崎の世話をしていた村瀬は冷静な口調で悠呂の疑問を肯定した。

「…そうだ、ここはじきに火の海になる。　ふっ……ヒーローゴッコもここで終わりだな。」

「あなたがやったの？　村瀬……」

星羅は震える声で問う。

村瀬はこちらを見たまま何も応えない。それを見かねて、悠呂が口を開く。

「星羅……村瀬さん達もこのことは知らなかったみたいだ」

星羅は小さくえつとこちらに振り向いた。

「その少年のいう通りです。我々にも想定外の出来事です」

村瀬は、嘘偽りはないと言った瞳で真つ直ぐ星羅を見つめた。

その瞳を受けて、星羅は息を飲む。

「じゃあ、誰がこんなこと……」

村瀬は瞳を伏せ、首を横に振る。

その時だった、大きな破裂音と共に下から突き上げてくる揺れを感じた。

悠呂達も村瀬もこの揺れに、バランスを崩しそうになる。

どこかで何かが爆発したようだった。揺れが収まるのを待って村瀬は再びデスクへ向かい、どこかへ連絡を入れる。

「私だ、調べはついたか？……ふむ、ふむ、先程の揺れは？なるほどあそこか、わかった。お前達はもういい、早くここから脱出しろ。そうだ、どんな誤作動か知らんが自爆プログラムが作動した……わかっている。それは全て私が引き受ける。ああ、お前達は避難しろ」

「――自爆プログラム？ 悠呂は現実では有り得ない言葉を耳にして、目をみはった。

「あつ……あの」

悠呂はどういうことが尋ねようとして、声を掛けたがそれは村瀬の怒声でかき消された。

「何をしている！！ 早くお前達もここから脱出しろ！」

「えつ……？」

村瀬の意外な言葉に悠呂は、啞然とした。

再び、大きな揺れが一同を襲う。

「…おかしい、やけに爆発のタイミングが早い」

村瀬は揺られながら、宙を見据える。

しがみついてくる星羅を抱きとめながら悠呂は天井を仰いでいると、傍に人の気配がしてはっとそちらに目を向けた。

すると村瀬がこの揺れの中、険しい顔をしてこちらに手を差し延べていた。

正直にその手を掴むと、力強く引いて立たせてくれた。

「あつ、あのつ村瀬さん」

戸惑いながら声を掛けたが、再び村瀬の声に遮られた。

「いいか、良く聞け。先程爆発したのはアナウンスにあったように恐らく第九区研究資料庫だ。資料庫は地下三階にある。

ここは地下一階だ、まだ脱出するには十分時間はある。自分で傷つけておいてなんだが……時間はあるが、その足だ十分間に合うとは思うが、何せこの自爆プログラムは想定外に作動している。今度いつどこのフロアが爆発するのか我々もわからん。それだけは肝に命じておけ！」

「あつあの……」

村瀬は険しい表情から一変して、優しい顔になると悠呂の肩にぽんと手を置いて頷いた。

「お前は単身ここへ乗り込んで来た強者だ。自信を持って！」



そう言うと星羅に目を遣り

「お嬢様を頼んだぞ」

その一言を残して、村瀬はアスラビ・尾崎の車椅子を押しして先に出て行ってしまった。

「村瀬！」

星羅の呼び止める声も虚しく、二人はドアの向こうに消えてしまった。

開け放たれたドアの向こうから、研究員が逃げ惑う騒然とした声が聞こえてくる――。

悠呂と星羅はお互い支えるように寄り添いながら、呆然とそのドアを見つめていた。

## 第五十六章（後書き）

我が作品を読んで頂き、誠に有難うございます！

105日ぶりに更新です。いやゝなかなか、ストーリーが浮かんでこず、苦しみました笑。しかし、何でも中途半端だった自分を変えるべく、どんなに長くなるかと完結させようと意気込んでおります。

そんな作者ではありませんが、気長に応援していただければと思います。

本当にあとがきまで読んで頂き有難うございます！

## 第五十七章（前書き）

大変長らく更新せず、申し訳ありませんでした。かなり久々の更新です。で乱筆乱文になっていますがどうか楽しんでいただけたらと思います。

## 第五十七章

それは、そろそろ動きを見せようかという時だった。

足元から不気味な感觸の揺れを感じる。

話し合いの最中だった悠呂の父、浅乃木比呂はとっさに目を上げ研究所のある禁止区域に目を遣った。

微かだがどこからか、煙が上がっているのが見える。

浅乃木と同じように顔を禁止区域に向けている一同の中で、口を開いたのは刑事の澤田だった。

「……中でなにか始めやがったか」

囁れ声に面白がる調子が混ざっている。そう聞こえて、浅乃木は少し眉をひそめた。

傍にいた清も同じように思ったのかしかめ面を作っている。

だが、清はすぐに気持ちを切り替え腕時計型モニターで中の様子を窺う。

荒い画像に出てきた人物の背後には、白衣の人間が右往左往として混乱を極めている様子が見て取れた。

何があったのかと問うと、潜入員も混乱しているのか少し声が上がっていた。

「はいっ……それが、いきなり自爆プログラムが作動した……です  
が……らず……」

通信をよこす潜入員の声は画像のノイズと逃げ惑う人間の声で聞き取りづらくなっている。

一同は『自爆プログラム』という言葉だけ聞き取り、目をみはった。

「何！？ 自爆だあ？ あの朦朧もつろくじじい、証拠しんこという証拠を燃やし  
尽くす気でいやがるな！」

澤田は、鼻息荒く憤慨した。その様子を横目に浅乃木は顎に手を添え、何かを考え込む仕草を見せた。

浅乃木達から少し離れた場所にいたはじめも、同じように揺れを感じていた。

何事かと禁止区域に目を凝らすと、うつすらと煙が上がっているのが見えた。

慌てて立ち上がり、浅乃木達の方を見ると同様に禁止区域に目を遣っている。一体、何が起きているのか分からず歯噛みしていると、囁れた声が何か喚いているのが聞こえた。  
その言葉にはじめは、背筋が凍った……。

確かにいま、『自爆』と聞こえたのだー！

「なっ……なんだよ。 自爆って……」

はじめは一目散に浅乃木の元に走り寄り、胸倉に掴み掛かると激しく揺らしながら喚いた。

「おじさん！ 自爆って…… 自爆ってなんだよっ！ これも作戦なのか？ 中には……中には悠呂がっ……悠呂達がいんだぞっ！」  
襟を閉めんばかりに詰め寄るはじめの腕を清は掴んだ。

「はじめ！ 落ち着け！ これは俺達が出した指示じゃない。 中のヤツが勝手に始めたことだ」

そう話す清の腕を乱暴に振りほどき、悔しそうに顔を歪めると浅乃木の襟から手を離れた。

力無く膝から崩れると、掠れた声で呟いた。

「なんなんだよお……どうなってんだよ。 何とか、何とかなんねえのかよお……」

手元にあった雑草を引き抜くと乱暴に投げ捨てた。

その様子を見ていた澤田はフンと鼻を鳴らすと、しゃがみ込むはじめに毒を吐いた。

「何だ、この小僧は？ 元はと言えば、浅乃木さんの倅が勝手に入り込んだのが悪いんじゃないか。爆発に巻き込まれたって自業自得というやつさ」

「なんだと？」

「やめろ！ はじめ！」

澤田に掴み掛かろうとするはじめを清は後ろから羽交い締めにして止める。

「離せ！ お前等それでも警察か？ 人を助けんのが仕事だろっ！  
なのに何だ！ てめえのその言いぐさは！」

凄い剣幕で吠えるはじめをはなから相手にしていないと言わんばかりに、澤田は耳を掻く仕草を見せた。

「これだから素人は話にならん。救助活動はレスキュー隊に頼むんだな」

「何だと！」

「やめろっ！」

尚、突っかかるうとするはじめを羽交い締めのまま澤田から離れた。

清の枷から逃れようと身を振りながら、今度は浅乃木に突っかかる。

「おじさん！ あんた何黙って見てんだよっ！ さっき、俺に任せろって言ったよな？ あれは嘘だったのかよっ！ こんなのに頭下げて、何が俺に任せろだ！」

浅乃木は、清に抑えられながら叫ぶはじめを黙したままじっと見ている。

「悠呂が！ 悠呂が死んじまってもいいのかよっ！ 悠呂は、あんなの息子だろ！」

「はじめ！」

清の制止も聞かず続ける。

「……何黙ってんだよ。もしかして、あんたもコイツと同じことが言いたいのかよ。爆発に巻き込まれても仕方ないって！」

「いい加減にしろ！ はじめ！」

清は羽交い締めから、地面にはじめを押しさえ込んだ。

それでも尚、暴れるはじめの背に肩を入れ込む。

「ぶっ……」

頭上から笑う声がして、清もはじめも何事かと見上げた。

煙草をくわえ、火を付けると煙をひとつ吐いて浅乃木は押しさえ込まれているはじめの前にしゃがんだ。



「いや〜あつついねえ。 いっちゃん」

「んなっ……」

あまりにもあつつけらかんとした態度に、はじめは開いた口が塞がらなかった。

「お前、何ひとりで熱くなって勝手に吠えちゃってんの？」

はじめの顔に、煙を吐きながら飄々とした態度でにやりと笑う。

「あっ……あんたってひとは」

と、頭に温かくて重い何かに乗った。

「お前に言われなくても何とかしちゃうから。 お前は大人しくここで悠呂達を待ってる ワンワンてな」

「ワンツ……このっ！」

頭からフツと浅乃木の手が離れた。

反論してやろうと見上げたはじめは、  
口を噤んでしまった。

自分を見る浅乃木の目がどこまでも優しげで、微笑んでいたからだ。

「まつ、見てろ」

自信に溢れた声でそう言い残すと、浅乃木は煙草を携帯灰皿に押し付け、はじめに背を向けて行ってしまった。

頭上から大仰な溜め息をつく人間が一人。

「まつそういうことだ。お前は悠呂くん達をここで待っていてやれ。なあに、先輩はいつもヘラヘラおちやらけてるけど、やるべきはやる人だから……」

清ははじめに手を貸して立たせてやった。

彼の手を借りて立ち上がると、じつと禁止区域に見入っている浅乃木にはじめは目を遣った。

何も言えないでいると、清に背中をぽんと叩かれてつんのめる。

「いきなり、何すん……」

振り返ると、そこに清の姿はなく、彼も背を向けて浅乃木の元へ歩いて行ってしまった。

「なんだよ……清兄いまで」

口を尖らせて独りごちたが、すぐに口を引き締め二人並ぶ背中を見つめて微笑んだ。

作戦場に戻ると、浅乃木の顔付きは明らかに変わり、アゲイスに研究所の地図はあるかと尋ねた。

「……地図と言えるかわかりませんが、あの研究所の案内パンフなら裏から入手しましたけど」

浅乃木に話しながら、アゲイスは横にいる澤田をちらちらと気にしている。

「それでいい。見せてくれないか？」

「えっ？……えっと」

アゲイスは戸惑う様子を見せた。

「……見せてやれ」

囁れた声で澤田は、見せるよう指示をした。アゲイスは渋々と腕時計モニターを操作し、パンフの画像を出した。

パンフと言っても、研究所の図解は大まかで地図とよべる代物ではなかった。

それを暫く眺めて、浅乃木は口端を上げた。

「……何かわかりましたか？ 浅乃木さんよお」

どろりとした目で睨みながら、澤田は質問をする。

澤田を見て浅乃木は薄らと笑うと、突拍子もないことを言い出した。

「俺は、ここから別行動をさせてもらおう」

約一名を除いて一同は驚愕の声を上げた。

「なっ……何!? どういう事だ! そっそんな勝手は、この指揮を委ねられている俺が許さんぞ! 」

顔を紅潮させ、澤田は唾を飛ばしながら反論する。

「安心しろ、俺の部下は指示通りあんたに従う。別行動とは俺一人ということだ」

「なっ……何をするつもりですか! ? 」

アゲイスは信じられないと言った表情で声を荒げる。

「はあ……多分、こうなるんじゃないかと思ってましたよ。こうなると先輩は反対したって聞く耳持たないんですから」

清はお手上げと言ったジェスチャーをする。

「なっとななっ……桐矢くんまで、何を言ってるんですか！」

アゲイスは顔を真っ青にして清を見た。

「つれないですね先輩、俺は数に入っていないんですか？」

清は首を鳴らす。

二人のやり取りを静かに聞いていた、澤田は恐ろしく低い声で浅乃木に詰め寄る。

「お前……あの時のことを忘れたとは言わせんぞ」

目を血走らせながら睨む澤田に、浅乃木は表情を変えず肩をすくませた。

「覚えてますよ」

飄々と応えると、澤田は尚も詰め寄り彼の襟元を掴んだ。

「だったら、そんな勝手なことは……」

「だからどうした？ お前が親父さんのことで俺を恨んでいるのは知っている。だが、あの事件と今にどんな関係がある？」

浅乃木の襟元を強く引き寄せると、顔を紅潮させ澤田は叫んだ。

「関係ある！ お前のその身勝手に横暴な行動が周りを巻き込むだ！」

「あわわっ……… けっ警部！」

アゲイスが澤田を止めようとしたが、それはあっさり振り払われてしまう。

浅乃木は尚も表情を崩さず、冷やかな目で澤田を見下ろすと襟元を持つ彼の手を乱暴に払った。

「俺は親として、息子を助けに行く。 お前は警察としての仕事を全うしろよ」

襟元を正すと、怒りに震え自分を見据える澤田に一瞥して、すぐに歩き出した。

その後を清は小走りについて行った。

鬼の形相で二人の背中を見据える澤田に、アゲイスは恐る恐る声を掛けた。

「けっ………警部、どっどっします？」

アゲイスの質問に応えず、澤田は勝手にしると言うように鼻を鳴ら

し、二人とは反対の方向に歩き出した。

アゲイスはあたふたと澤田について行く。

## 第五十七章（後書き）

（\*u—u）大変遅くなりまして……こんなことは理由にはなりません。長期に渡りスランプに陥りやる気も殆どなくなっておりました。しかし、秘密基地さんのところで気分転換にイラスト依頼をお受けしたところ、他作者様の作品に触れる機会があり、彼等の作品のアイデアや文章達に感銘して私も頑張ってみようと思っかけをいただきました。本当に有難いです。この場を借りてお礼申し上げます。有難う。こんな私ですが、下手なり頑張っていきますので応援のほど宜しくお願いします！



## 第五十八章（前書き）

大変お待たせいたしました。

乱筆乱文気味ではありますが、お楽しみいただけると思います。

## 第五十八章

村瀬達が立ち去った後、二人はしばらくその場で佇んでいた。相変わらず聞こえてくるのは、くぐもった爆発音と床から突き上げるような地響き。

その音が徐々に近付いて来ていることが、二人には分かっていた。

近づくこの音がいずれこの地下研究所を潰すだろう。

そうなる前になんとかここから脱出しなくてはいけない。

こうしてはおれぬと、先に行動を起こしたのは悠呂だった。だがしかし、足を一步踏み出してみればその足は力無く崩れ、床に膝を折ってしまった。

あまりの出来事続きですっかり忘れていた。自分は村瀬に撃たれていたことを……。

彼と対峙していた時は、神経を張り詰めていた為痛みを忘れていたが、緊張の糸がすっかり切れたいま、痛みがぶり返してくる。

気のせいだろうか？少し目眩もする。

意識をなんとかはつきりさせようと、頭を振っていると真正面に星羅の顔が現れた。

大丈夫かと聞く彼女に悠呂はうんと応えたが、彼女は肩の傷を見る

なり眉根を寄せ、自分の首に付けていたりボンを外すと悠呂の服をたくし上げ、肩に巻いた。

「ごめんなさい。今はこれで我慢して」

そう言ってくる彼女に悠呂は薄く笑って有難う、十分だよと応えた。

星羅も薄く笑うと、ずっと悠呂の脇に身を沈め肩を貸す。

悠呂もその肩を借りて立ち上がった。

「ここを出たら医務室があるから、まずそこへ向かいましょう」

そう言って星羅は悠呂を見た。

悠呂はそれに頷くと星羅に支えられ、廊下に向けて歩き出す。

部屋から廊下の様子は大体把握できていたが、実際目になると予想をはるかに超え、そこは騒然たる有り様。

煙の立ち込める視界が、尚一層混乱の拍車となり、まさに阿鼻叫喚とはこのことだと二人は思った――

地響きのせいだろう、天井から石クズが雨のように降ってくる。逃げ惑う研究員たちも手を傘に出口があるだろう方向へ殺到している。

悠呂達も意を決し、その波に乗って出口に向かうことにした。

しかし、歩けど歩けどそこは星羅の見知った研究所とは様変わりしていた。あの頑丈を誇っていた建物が、嘘のようだ。通れたはずの道はものの見事に岩のような瓦礫で塞がれてしまっている。

その行き止まりが逃げ惑う研究員たちの動揺を更に煽っていた。

その騒然たる雰囲気飲み込まれそうになりながらも、星羅は懸命に頭の中で他に通れた道はなかったかと思取り図を思い浮かべ歩いた。

壁のような瓦礫にぶち当たり、懇願をも神頼みともつかぬ研究員の叫びを尻目に、星羅は悠呂を支えながらその道とは別のフロアの廊下に入った。

案外、このフロアは冷静さを欠かない研究員達が容易に見つけられなく、まだらだが急ぎ足程度に星羅達を追い抜いて行く。

その中で彼女だと気付く者もいるが大概は分かっているが申し訳なさそうに通り過ぎて行く者が多い。

それでも、声を掛けようかどうしようかとチラチラとこちらを窺う者もいた。

そんな彼等に星羅は黙視で大丈夫だと告げてやると、すみませんと言いたげな目を寄越して一礼し先を急ぎ歩いて行く者、それでも

「お手伝いしましょうか？」と親切に声を掛けてきた者もいた。

「大丈夫だから、先に避難して下さい」

と丁重にお断りして、彼等の安全を優先させた。

しばらく歩いていると逃げる研究員の中に見知った背中があった。

しかし、その人物は星羅の記憶ではここに存在していることが有り得ない筈の人―！。

信じられなくて後を追おうとしたが、足がそれを拒否し追うことが出来なかった。

悠呂は首を傾げて顔を覗き込み、呆然と一点を見詰める彼女に声を掛けた。

「どうしたの？」

悠呂の声にはつとした星羅は、戸惑いの表情を見せ何か言いたげだったがすぐに首を横に振ると何でもないと告げる。

彼女は表情を少し曇らせたまま、俯き加減に歩みを進める。

何だかそれ以上は聞いてはならないような気がして、悠呂も黙って歩いた。

無言のまま、二人は暫くその人がまばらな廊下を歩いていたが、いきなり星羅は道を外れ違う方向へ導いた。

「えっ？」

と声を漏らす悠呂に、星羅は少し声を落として説明する。

「傷……手当てしなきゃ。……この先に医務室に続く廊下があるの」と指をさした。

このフロアはあまり被害がないのか、瓦礫も少なく塞がっているところもないようで、スムーズに目的地へ到着することができた。

「……」

と立ち止まった扉のプレートには「医務室2」と書かれてある。

星羅は悠呂から体を離すと、扉の脇にあるパネルを操作して扉を開ける。

先に一人で入り、電気を点けた。

悠呂は自分の足でゆっくり入り、中の様子を窺った。

そこは白を基調とし、医務室に相応しく清潔感のある部屋になっていた。

ここも被害は少ないようである。整然と並ぶ白いベッドが二つ、医療器具もそのままになっていて綺麗に並べられ、いつでも軽い手術ならできそうだった。

奥にはガラス張りの手術室が設けられている。ここで手術をしていたのだろうか？

鉄物が触れ合う音がして、目をそちらに向けると壁に埋め込み型の戸棚があり、その前で引き出しを開けて星羅が治療器具を探していた。

ぼうとその様子を見てみると、星羅がこちらに気付きはっとするといきなり頬を染め、悠呂のすぐ側にあるベッドを指差してそこに座ってと指示をする。

悠呂は言われるままベッドに腰を掛け、自分はそんなに彼女を見つめてしまっていたのだろうか？と照れて頭を掻いた。

一人、照れていると治療器具一式を揃えて星羅がやってきた。近くにある椅子を引っ張り出してそこに座る。

悠呂を見ると、先より更に頬を赤らめ下を向きながら指示する。

「上の服……脱いで」

言われた悠呂もなんだか恥ずかしくなつてモジモジし始めてしまった。

そんな悠呂を知つてか知らずか、星羅も頬を赤らめたまま、手元に引き寄せた台に持つてきた治療器具一式を広げ、包帯やら消毒液やらの準備を手際良くし始める。

悠呂はというと、顔を真っ赤にして脱ごうか脱ぐまいかと服を腹の位置で上げ下げし迷っていた。

それに見かねた星羅は、まだ脱いでいなかったのかと言つた表情で母親がするように、えいつと脱がしてやった。

そのことがまた、恥ずかしくて悠呂は申し訳なさそうに

「すみません」

と言いながらまた頭を掻いた。

肩の傷口はやはり、星羅のあてがったりボンでも間に合わず、今も傷口から脈打つように溢れてくる。



弾丸のない銃とは言え、改良され殺傷能力は遥かに高い。

まるきり素人の星羅には、消毒とこれ以上流れぬように止血にと腕に固く三角巾で縛るといった粗末な処置しか出来なかった。

「ありがとう」

と笑顔を向けてくる悠呂の顔色は、時間が経つにつれ悪くなっていく。

これ以上、自分ではどうすることも出来ない歯がゆさに星羅は、引きつった笑顔でそれに応えるしかなかった。

「もう少し、休んでいきましょう。あなたも少し横になった方がいいわ」

悠呂は星羅の提案に薄く笑みを見せ、頷くと深い溜め息ついて倒れ込むように横になった。

星羅は治療器具を元に戻しながら、早くここから脱出し彼を病院に連れて行かねばと焦りを感じた。

かなり我慢しているのだろう、本当ならいつ意識を失ってもおかしくない状態ではないのだろうか？素人目でもそう感じる。

チラと彼に視線を遣ると、天井をぼんやり眺めてベッドに仰向くその胸元は上下に激しく起伏している。時折、カチカチと歯を鳴らすのは寒気がしているのだろうか？

もう少し寝かせて遣りたいが、ここでこうしていても治る筈もなく、ましてやここは今崩壊寸前。

下手をすれば、火の海に飲まれ二人とも命を落としてしまうー

星羅は一度、堅く目を閉じて大きく息を吐くと意を決し力強く目を開け

「そろそろ、行こうか……」

と促した。

悠呂も顔をこちらに向けて、薄く笑うと小さく頷いた。

## 第五十八章（後書き）

大変お待たせいたしました。第五十八章無事更新できました。かなり行き詰まっておりましたので、文章のまとまりの悪さがかなり気になります。早く完結をと気持ちだけは焦るのですが、どうにも上手くいかず読者様には大変ご迷惑をおかけしているのではないのでしょうか……

ごめんなさい。頑張りますので、最後まで長い目でみてやっていただけると有り難いです。

長文になりましたが、次回をお楽しみ下さい。 B Y 愁真

## 第五十九章（前書き）

大変長らく更新しなかったことを深くお詫び申し上げます。なにぶん、長期執筆から離れておりましたのでお見苦しい点があるかと思いますが、どうかご温情いただき読んでいただければと思います。

## 第五十九章

対策チームから外れ、単独行動を選んだ浅之木と清はフェンスの近くで、自分たちが派遣し潜入させている門番の一人に事情を話していた。

「えっ！ 浅之木警部……それはどういう」

いきなりの話に門番は目を丸くしている。

「言葉の通りだよ。 まっ……俺等は元々諜報員だ、人員を指揮することはもともとから出来ない」

それはそうですがと門番は心配顔で浅之木、清両名の顔を窺う。

「それでも、単独で行動なんて！ しかもこんな状況の時に……」  
門番は少し躊躇う表情をして下を向いたが、何か決心したのかすぐに顔を上げ力強く応えた。

「わかりました！ この地下の隠し通路をお教えしましょう！ 但し、私も御一緒にします！」

その有り難い申し出に浅之木は静かに首を振った。

「駄目だ。お前はここにいろ」

しかし、と食い下がる門番に清が彼の肩に手を置いた。

「申し出は有り難いが、お前はここで自身の仕事をしていてくれ」

それでもさすがのような目で見る門番に、浅之木は軽く笑って……

「だってえくん、ほらあ、お前もあのタコ親父のクドい説教と山のような始末書を書かなきゃならなくなるよ〜それでも良いのかぶう〜」

浅之木は体全体を気持ちが悪いほどクネクネし、おどけて見せる。

門番は浅之木の気持ち悪さになのか、はたまた自分が課長に怒鳴られ、山積みの始末書を書く姿を想像したのか顔色がみるみる青ざめていく。

「……先輩」

清が少し呆れ気味で溜め息をつくとき、門番に目を遣り

「まっ……そういうことだ。お前は、あの泥目の警部様の指示に従ってくれ」

清は後ろで対策を練っているだろう澤田がいる場所を指した。

「は……はあ」

納得いかない様子で門番は返事をする。

「じゃっ……隠し通路とやらを教えてください」

浅之木はそれだけ言うと、清にチラと目を遣りフェンスの中を窺う。

清はそのアイコンタクトにひとつ頷くと、こちらですと案内する門番について行った。

ひとり残った浅之木はただの原っぱにしか見えないフェンスの中をじっと眺め、煙の上がっている場所、星羅が入って行ったのである

う場所を順番に確かめるように周りを少し歩いてみた。

「!？」

浅之木はある場所で足を止めた。

確かにそこは出入り口になっていただろう地面……

その箇所は中からの振動により、深く陥没していた。

「何ということだ……これじゃ」

浅之木は額に手を置いた。中には何十人という研究員、それに潜入させておいた仲間が取り残されている……

他に出口があるのかもしれないが、星羅が入って行ったこの箇所は絶望的だった

「くっ……悠呂……無事でいてくれっ」



\*\*\*\*\*

一方、清は門番に案内され目的の場所に辿り着いていた。正門から随分と回り込んだ、裏手の場所だ。

それに中に入れるようなものは今の時点、全く見当たらない。清は眉をひそめた……

「…お前、俺たちを騙したんじゃないだろうな？」

そう凄む清に門番は肩を竦め

「ちょっと……ちょっと待って下さいよっ。騙したりしていませんよー！」

門番はもげるのではないかというほど首を否と振る。

「こっ……こちらです」

門番は少し怯えながら、清の前を申し訳なさそうに横切ってフェンスの一部を押しした。

するとフェンスの一部がドアのように動いた。

「……！？ こっこれは」

清が驚いていると門番はひとつ頷いて、先に自分が中に入り清を招いた。

「この隠し通路は、二十世紀時分に日常で使われていたであろう技法、いわゆる機械を使わない手動というものを使っています」

この近年、ドアというドア、入り口という入り口は全て機械に頼っておりもし故障したとしても予備機能やら予備電源など一切、人が触れずとも入れる仕組みになっている。恐らく、今の子供達は自分の手で押したり引いたりする扉の存在はあまり馴染みがないだろう……むしろ、存在自体あまり良くわかっていないかもしれない――

清は中に促されながら、不思議そうにフェンスを見ている。

再びこちらですと呼ばれて振り返ると、今度は、地面に片膝をついて何やら持ち上げようとしている。

重そうにしているので、清は駆け寄り門番を手助けする。

「手伝おう」

すみませんと門番は清の手を借り、地面を剥がす。

すると中には、地下に繋がる階段が現れた。

清は階段から門番に目を遣ると、彼は強く頷いた。どうやらこの穴のような入り口が地下研究所に続く、隠し通路のようだ。

「悪いが、先輩を呼んで来てくれないか」

門番はわかりましたと返事をし、もと来た道に戻って行った。

門番がフェンスを出たすぐのところ、浅之木は立っていた。

「あっ警部、今お呼びしようと……」

言いかけたところで浅之木はやめろといった風に手を振った。

「あゝ今オレ、警部じゃないから 浅之木さんでいいよ」

えっと驚く門番をすり抜けて、フェンスのドアをくぐろうとしては

たと立ち止まった。

「ほう、なかなかの仕掛けじゃないか……二十世紀時分のものだな」

そう言ってフェンスのドアを開け閉めしている。

「はいっ！ 結構単純な方が逆にわかりづらいと研究長が……あっ」

「研究長か……」

そう言って浅之木は頭を掻いた。

「いついや……あのっ、潜入中は我等はヤツの忠実な下僕でして……つい、くせでそのっ」

あわあわと弁解する門番に浅之木は笑って、彼の胸元を小突くと

「気にすんな……それがお前らの仕事だろ？」

そう言って、肩に軽く手を置くとすぐに背中を向け

「それで？ どうだ？ 地下に行けそうな隠し通路とやらは見つかったのか？」

と中にいる清に問いながら、さつさとフェンスの中に入って行った。

門番も慌てて浅之木の後を追う。

はい、ありましたと清は跪いて地面の穴を指差した。浅之木はゆっくりそこに近付くと、顎の無精髭を触りほおと感心している。

暫く地下に続く階段を見ていた浅之木は躊躇もせず、自ら先頭だつて中に入って行く。

清はそれに続かず、門番に問う。

「この階段を降りるとどこにつく？」

そう聞かれ、門番は真面目顔で倉庫ですと応える。

清はそうかと頷くと、薄暗い階段をひとり降りる浅之木の背中をじつと見遣っていた……

すぐに自分も後に行く。

門番は暗闇の中に溶け込む二人の背中を心配そうに見送った。

\*\*\*\*\*

薄暗く地下に続く階段を二人は足下を探るように降りて行く。  
ペンライトを灯しているが、それだけでは心許ない――

ようやく降りきった場所には、小さい入り口らしき鉄の扉が現れた。お互い目配せすると今度は清が先頭立ってそつとその扉に触れる。

冷たい感触がするだけで、自動で開く様子はない。これもフェンスの要領なのかと扉を押ししてみる。

しかし、びくともしない……ペンライトで鉄扉をあて詳しく調べ  
てみる。

真ん中の右手辺りに丸い窪みを見つけ、その中にある取っ手らしき  
ものを軽く引つ張ってみた。

すると、扉は重く軋むような音をたてなんとなく開いた。

「先輩……」

清が浅之木に目を遣ると、浅之木は行けという風に頷いた。

それを受け、清はそつと扉越しに中を窺う。

薄暗く良くわからないが、奥へと続く廊下があるのが見える。再び、浅之木に振り返り彼に頷いてみせると清はすつと胸元から銃を取り出し、胸前に構えると静かに中に入って行く。

浅之木はそれを見てから自分も銃を取り出し、電子式になった銃の残り残量を見た。

電子式になったとしても殺傷能力はある拳銃――

浅之木は、はつと我に振り返り銃を構えると中に入った。

たどり着いたところは、薬品の倉庫のようで薬品独特の匂いがほんのり漂ってくる。

浅之木が薄暗い天井を見上げてみると、大規模な倉庫らしく天井につくほどの大棚が整然と並んで、棚の中にはぎっしりとダンボールの箱が詰まっている。

「ある意味、絶景だな」

浅之木は独りごちると、清に目を遣った。彼は続けて警戒しながら、辺りを見遣り地下研究所に続く入り口を探している。

浅之木は、出口の搜索を彼に任せ棚のひとつに歩み寄った。ペンライトを箱のひとつに当てて、ラベルを確かめる……

課に配布された資料に目を通してなければ、全くわからない薬品名だ。

浅之木は箱のひとつを棚から卸し、中を開けてみた。

中からは、綺麗に袋分けされた粉末状のものがぎっしりと詰まっている。

その袋にも丁寧に薬品名のラベルが貼られてあった。浅之木は記憶を呼び起こし、資料の内容を必死に思い出そうとした……

「……確か、細胞を強制的に分裂させる薬……だったか？」



ラベルにペンライトをかざしながら、独り呟く。

「先輩!!」

清が出口を見つけて戻ってくる。

浅之木は薬品の袋を破り、中の小袋をひとつ取り出し後は棚に戻した。

「……？ 何ですか？」

清は浅之木の手の中にあるものを覗き込んだ。

「……証拠品」

それだけを言って、袋を清に手渡した。

清は慌てて受け取ると、改めてその袋が何なのか調べてみる。渡した張本人はフラフラとどこかへ行ってしまったので、彼が戻した箱のラベルを見してみる。

「……！？ これは資料にあった薬品……」

清はフラフラ歩く浅之木の背中を見遣り、溜め息をつく

「たくっ……先輩は…根っからの仕事人間なんだから」

浅之木の背中に眩くと、胸元から証拠品収納カプセルを出して、そこへ納めた。

## 第五十九章（後書き）

大変長らく更新しなくてゴメンナサイ。サイトをご存知の方はブログにて大体おわかりかと思いますが……まあ〜ぶっちゃけ、スランプと創作意欲の欠如……平たく言えばやる気ナッシングだったわけ……あはははっ汗

楽しみにしていただけいている方には本当に申し訳ありませんでした（泣） まあ〜いるかどうかわかりませんが……

そうそう、あまりにもプロットより加筆し過ぎて携帯では読みづらい長さになってしまいました……オマケに実はプロットはまだまだこの先があつた……なのでその分は六十章以降に組み込むことにしました！ まだだいぶ間あいちゃうかもですが、気長にお付き合いですませ！

最終話・？（前書き）

大変長らく、ご無沙汰しておりました。かなりブランクがあいてお  
りますので読みづらい文章になっているかと思えます

それだけご了承いただければと……

## 最終話 - ?

爆発の影響で天井からは瓦礫が雨のように降っている　いまだ爆発や振動は続いている

人の気配のない廊下を悠呂と星羅二人はゆっくりとした足取りで歩いていた

悠呂の息づかいは依然として深く、支えて歩く星羅の歩みも重くなっていた　何もなければすぐにも外へ出られるのだが、爆発の影響もあつて通れる廊下に限りがあり、先から遠回りを余儀なくされている

重傷の悠呂の体力は徐々に削られて星羅が支えていなければ歩くのも困難だ、少し休ませてやりたいがここが崩れ落ちるのも時間の問題なのだ　そんな状況から星羅は足を止めることが出来ずにいた

地上に近い方へと道を選び歩いてきたが果たしてこの道であつているだろうか？そんな不安を思い起こさせるほどにこの地下研究所は無惨な有り様をさらしている

辺りが静かになると二人の息づかいだけがして、それが余計に不安を掻き立てる

そば近くに荒い呼吸を感じて星羅は支える体を気遣った

「大丈夫？ しっかりして！ もう少しよ」

その声掛けに悠呂がちからなく頷くのを見て星羅は支える体を担ぎ直し力強く歩みを進める

その先では電灯が所々壊れ、唯一残った電灯が心もとなくついたり消えたりを繰り返している

その廊下を歩きながら星羅は何かの匂いに気がついた……

良く嗅いでみると鼻につんとくる薬品の匂いだ この匂いがしてくるということはあの倉庫が近い、倉庫の一角が無事ならばきた時に使ったあの隠し通路が使えるかもしれない……

星羅は少し安堵したすると自然に足が早まった

\*\*\*\*\*

その頃、倉庫から地下研究所に潜入した浅乃木と清両人は倉庫の扉に苦戦していた……

どうやら、この震動により自動扉が壊れ半開状態になっている。その隙間から中をつかがうが、人の気配が感じられない。片手一本分に開いた隙間をどうにかこじ開けようと浅乃木は手を力を込めてりきむがびくともしない、諦め手を抜くとすぐ横から細長い鉄板のようなものがあらわれ隙間に収まる

「おい、これどうした？」

後ろを振り返り訊くと清は口角を上げて笑い自身の背後を指差して応える

「ここに腐るほどありますよ」

指差した場所には荷物がすべて降ろされ箇所があり、その棚の一部の天板が外されていた。それを見た浅乃木が感心した声をあげ

「ふっ……お前にそんな力があつたとはな」

と茶化した

「あ、先輩、俺を見くびりましたね？」

「……………お前は頭でっかちで体力のないもやしっ子だと思ったがな」

「もや……………ふ、ふん！ 好きに言っけて下さいよ！ それよりこれ、手伝って下さい」

やれやれと言ったかんじで浅乃木は清を手伝った

二人の力が加わって扉は軋みながら少しずつ開いていく 人がひとり通れるくらいに開くと浅乃木が先に中へと侵入した 清もその後につづく、扉から出るとそこは廊下の途中で左右には奥につづく長い廊下があり壁は白くて所々に何かの部屋だるう扉がいくつもある 浅乃木と清はまわりを気にしつつ、部屋をひとつひとつ開け中を確かめていく、しかしどの部屋も誰もおらずもぬけの殻だった 脱出したのか、はたまた地下へ潜ったのか

「おい！！ 清、そっちはどうだ？」

だが、期待した返事はかえってこなかった 廊下の先にはひとつの扉、奥につながっているらしい……………

浅乃木と清はお互いの顔を見合わせ、その扉に手をかけた - -



扉はこちらも壊れていて自動では開かず、二人で力任せにこじ開ける 開いたその先は今までいた場所と比べものにならないほど崩壊していた

「こりゃ、また……………」

浅乃木も清も呆然とする

「想像以上の崩壊ですね……………これは、早く悠呂くんたちを見つけて脱出しなきゃ俺ら共々生き埋めですよ」

そう言つて清は先に入り、道を作るため瓦礫をよけ始めた

浅乃木も全くだと呟いて清に倣う  
何分、何時間この作業をしていたのだろうか 浅乃木はふと自分たちがつくつた道を振り返る

入ってきた扉が遠くに見えた 額の汗を拭い、違うほうへ行った清の背中に呼びかける

「おーい！ 下につながるような道は見つかったか？」

数秒おくれて、いいえという応えが返ってきた。仕方ないので違う道を模索しようとしたその時、どこからか物音がした。

「おい！ 清！ 清！ こっちだ！」

清を呼び戻し、物音がした場所を二人は探す。

何やらくぐもった女のような声がどこからかする。二人は手当たり次第に瓦礫をどけ小さな隙間の開いた岩をみつけた。

その岩に挟まる小さな隙間の上の石は大き過ぎて二人ではどうしようもなかった。とりあえず岩の向こうの相手へと浅乃木は声を掛けてみた。

「おい！ 誰かそこにいるのか？」

相手は自分たちの存在に警戒したのか応えなかった。

構わず浅乃木は続けた。

「おい！ どうした！ そこにいるのか？」

返答はやはり返ってこなかったが相手が身動きしたのがわかった。

しまった逃げられたかと思っただ瞬間……

「おじ……さま……？」

と相手が反応した、この声は……

「ん？ その声は、星羅お嬢様か？」

また身動きしたのがわかる、どうやらあちらはどこからかの穴でこちらが見えるらしい……

「君がいるということは、悠呂は？ 悠呂は一緒にいるのか？」

一瞬の沈黙があった 浅乃木は嫌な予感がした

「おじさま……！ 悠呂が……悠呂が」

彼女の切迫したその声音が予感を的中したのだと浅乃木は思った……信じたくないという思いが一瞬言葉を詰まらせる、しかしまだ希望があるかもしれないと縋る気持ちで星羅に問いかける

「悠呂が……どうした？　そこに……星羅お嬢様の傍にいらんだな？」  
できれば次の言葉は聞きたくなかった……が、星羅が涙ながら告げる

「悠呂が……悠呂が……息を……息をしていない……」

その言葉に浅乃木は目の前が真っ白になり、次の言葉が出てこない  
それを見かねた清が瓦礫の向こうの星羅に悠呂の状態を聞いたあま  
り良くないようで星羅の嗚咽だけが聞こえる

清は彼女にしっかりとるように告げると的確に心肺蘇生の手順を教  
えた

心肺蘇生をそのまま続けるように告げると清は足下で意気消沈とし  
ている浅乃木の背を思いつき叩いた　その拍子によるけながら見  
上げる浅乃木に清は強く言った

「先輩！　何年この仕事してんです！　こうなるだろうことは予想  
できていたはずでしょ！　しっかりして下さいよ！　何のためにあ  
のドロ目刑事から外れてまでここに潜ったんすか！」

真剣な強い眼差しを向けられながら浅乃木は掠れた声で応えた

「……………あぁ」

「生きますよ！ 先輩は俺と違う方向へ！ 絶対、二人を助け出しましょー！」

今度は強く肩を叩かれ浅乃木は顔を引き締めた

力強く走り出した清の背中を見送りながら、立ち上がるとその背中とは反対に浅乃木も走り出した

■最終話・？（前書き）

お目汚しすみません

どうぞ、よろしければお楽しみ下さい

## 最終話 - ?

- 数時間前……

どれだけ歩いてきたのだろうか？そう思わせるほど研究所の崩壊は凄まじい……………

遠回りしてようやく嗅ぎつけた薬品の匂いだつたがそこへ続くはずの廊下が瓦礫に埋もれて先に進めず、迂回を続け道を探し探しに進んできた。悠呂と星羅二人は疲労困ぱいでほとんど無意識で歩いている。-

懸命にまえに進んできたが、どうしても限界を感じその場に二人倒れ込むように座り込んだ。

悠呂はすぐに上体をずらし横になる形で寝転び荒く呼吸をする。星羅も瓦礫の破片だらう岩を挟み込み半開した扉に背を預けこちらを息荒く天井を仰ぎ見た。

- 果たして自分たちは無事にここを出られるのだろうか？

そんな一抹の不安を感じ始めていた 星羅は隣で横たわる悠呂に視線をむけた、肩口の出血が酷く応急手当でした箇所から再び鮮血が染み出ていた

顔色も段々血の気を失ってきている 星羅はたと何かの違和感に気付く……………

先ほどまで呼吸荒く肩で息をしていた悠呂だが、今は静かになっている 寝てしまったのだろうかとも思ったが嫌な予感がして星羅は飛びつくように悠呂の傍に寄り口元に手を近づけてみた……………

一気に血の気がひいた……………  
呼吸が……………ない

「ゆ、悠呂！！ ねえ！ 起きて！！ 息をして！！」

激しく揺らすが反応はない……………

「い…いや……………悠呂？ ………………悠呂！！」

星羅はどうしていいのかわからず、彼の胸に突っ伏して何度も名前を呼び続けた



するとどこからかこもった声のようなものが聞こえた 星羅は一瞬、身を強ばらせ辺りを窺った

「おい！ 誰かそこにいるのか？」

どうやら背中の方から聞こえてくる……… 星羅はそっと壁から背中を外す

「おい！ どうした！！ そこにいるのか？」

……どこかで聴いた声

星羅は声が聞こえる箇所を慎重に探し、小さな瓦礫のひとつを取り除くとそこから覗いてみた相手はこちらに気付いていないようだが、間違いなく星羅の見知った顔だった

安堵からか溜め息のように声が漏れる

「おじ……さま………」

その声に浅乃木はこちらが見えないのかあさつての方向を向きながら反応した

「ん？ その声は、星羅お嬢様か？」

助かるかもしれないという喜びで星羅は瓦礫の壁にすがりついた

「君がいるということは、悠呂は？ 悠呂は一緒なのか？」

そう訊かれて、星羅ははっと壁から顔をあげ悠呂を振り返った

「おじさま…悠呂が…悠呂が………」

震える声が相手に今の状況を伝えてしまっているのか、一瞬沈黙が  
おりる

「悠呂が………どうした？ あいつはそこに………星羅お嬢様の傍  
にいるんだな？」

浅乃木の沈んだ低い声で訊かれ星羅はいたたまれなくなり、嗚咽混  
じりに先を告げる

「えっぐ…おじ…さま…ゆ、ゆ、悠呂が…悠呂が…いっ…いっ  
…っぐ、息、息を…を…して…していない………」

再び、沈黙がおりた――

すぐに浅乃木とは違う別の声が尋ねてきた

「星羅さん、落ち着いて！ 悠呂くんは今どんな状況か詳しく教えてくれるかい？」

そう訊かれるが、星羅は涙がとめどなく流れ応えようにも声がまともに出てこない

「星羅さん！！ 泣いてる場合じゃない！ こうしている間にも悠呂くんの蘇生率が下がっていくんだ！ 的確な処置が間に合えば助かるかもしれないんだ！！ しっかりしろ！！」

壁の向こうから一喝され、星羅は涙を拭ってごめんなさいと返事を返した

「よし、少しは落ち着いたかい？」

落ち着いた優しい声音で問われ星羅はひとつ大きく息を吸うと「はい、大丈夫です」と気持ちを切り替えた

壁の向こうからの質問が始まる相手はあくまでも冷静沈着に質問をしてくるので星羅も動揺せず的確に相手に伝えていく

「そうか、じゃあ今から僕が言う通りにやって下さいね」

「はい」

「まずは、肩口の方からだこれ以上の出血は危ない……………君、ハンカチか何か細長い布のようなものは持ってないかい？」

「……………布」

星羅はスカートのポケットを探るが何もなく、どうしたものかと忙しなく自分の服などを見て思考する

仕方なしに目についたのはスカート……………そつとスカートに手をあて意を決すると裾の方からびりびりと破り、すねまであった白いスカートは見事に膝上までになった

「ありました」

「大丈夫かい？　なんか破ける音がしたけど……………」

「お気になさらないで下さい」

「う、うん……じゃあ、それを悠呂くんの肩口に縛ってちょっと隙間をあけてそこに棒きれか何かを入れて捻るんだ」

「棒きれ」と言われ、肩口に自分のスカートの布を縛りつけながら辺りを窺う

瓦礫から飛び出る鉄筋に目がつき引き抜こうとするがやはり無理で、他にないかと探し見つけたのが何かの折れた木の棒で少し細くて頼りないがそれを布に差し込むと、ネジを巻くように捻った

「やりました」

「うん、じゃあ次は彼の首が手首に触れてみてくれないか」

言われるまま、星羅は悠呂の頸動脈辺りを触る……脈はない

「どうだい？ 脈はふれるかい？」

「……………ふれません」

次の指示がすぐには返ってこない

「……………わかった、じゃ、悠呂くんの額に手をおいて、反対の手の指先をあげ先にあてて、あげ先を持ち上げながら頭を後ろにそらして」

指示とおりに試み、頭を後ろにそらしてやると悠呂のくちが自然に開いた

「やりました」

「いいかい、今から心肺蘇生に入る」

「はい」

「大丈夫、指示どおりにしてくれたらうまくいくよ　いいね?」

「はい……………」

星羅は清の指導のもと心肺蘇生を開始する

「君は悠呂くんの意識が戻るよう努力して！！ 僕たちはそちらに行ける道がないか探しすぐにそちらに向かう いいね？」

星羅の返事を待たずに壁の向こうは静まり返った・・・

その静けさが不安をよぎらせたが、不安な気持ちに負けまいと必死に悠呂の心肺蘇生を続ける蘇生を行いながら悠呂の顔を見るが依然として息を吹き返す様子がなく、星羅の視界がみるみる涙でぼやけた

「お願い悠呂……………戻ってきて、！」

星羅の涙がひと粒、悠呂の頬に落ちすつと流れた

最終話・？（前書き）

最終話が長くなってしまったので大変申し訳ありません

では、お楽しみ下さい



最終話・？

星羅に悠呂をまかせ、動き出した浅乃木と清は向こうへ通ずる道はないかと二手にわかれ探し始めた

奥に進めば進むほどさきほどまでいた場所が嘘のように足場が悪くなっていく……

瓦礫の除去に躍起になっている浅乃木のもとに雑音混じりの通信が入った

「先……輩……こ……ら……です」

「清、いまどこだ？」

「……の……って……左手に……いてきたので……を……ぎに……」

雑音が酷すぎてよく聞き取れない

「あ？ すまん、もう一度たのむ」

「さっきの……って……扉を……その先に俺のネクタイ……そこ……」

み…いって…すぐ…」

「……………わかった、また連絡する」

よくわからなかったが、とりあえずきた道を戻り、ここへ入ってきたときに使った扉まで来たところでこちらから通信を試みる

「おい、清！ 入ってきた扉まで来た、ここからどう行けばいい？」

依然雑音が入るが今度はちゃんと聞き取れる

「その扉の道を少し行って……………左…手……………俺のネクタイ……………置いてるんで……………右に来て……………い」

「わかった、すぐに行く」

言われた通り清が瓦礫をよけて作った道を行くと二手に別れた場所が現れ、さらに聞いた通りに大きな瓦礫の岩に紺色のネクタイが挟んだあったので右に行ってみた。そこを曲がると見覚えのある背中がそこらにあった一本だろうか、鉄の棒のようなもので半壊しているドアにあてがいこじ開けようと格闘していた

「ここか？」

浅乃木が声を掛けるところに振り向いた清は、ドアとの格闘をやめ「おそろく」と零した

浅乃木は半壊したドアに近づき扉の具合を確かめると、自身も手頃な棒はないかと探し、瓦礫と瓦礫の間に刺さる少し太めの鉄のパイプを見つけた手にした

「おっし！ 一気にやるぞ」

浅乃木の気合いの入った一声に清は頷くと、力を込めた。浅乃木もドアに鉄パイプを差し込むと清とは逆の扉へ負荷をかけた、ドアは耳障りな鈍い音をたてながら徐々に開いていく

ちょうど人がひとり入れそうな隙間が出来た

「清……………行け」

「了解！！」

清は素早くドアのなかに入り、二人を探しに入った。浅乃木はその後ろ姿を見送ると目だけで辺りをさぐり何かの拍子で閉じてしまっても隙間ができるくらいの手頃な石はないかと探した

ちょうど足下に大きな岩があったので、パイプをドアに挟んでその岩に手をかけた

腰が抜けそうになるくらい重量だ、足をふらつかせながら何とかドアに挟み込み、自身も清の後を追って走った……………

\*\*\*\*\*

星羅は無我夢中で悠呂に心肺蘇生を続ける 悠呂の胸を圧す腕が段々重く感じ、もう限界だと諦めかけたとき息を吹き返し咳き込んだ

星羅は慌てて悠呂を横向きの姿勢にし背中をさすってやる

悠呂は咳き込みながら、うっすらと目を開けた

「せい……………ら」

星羅は悠呂の顔を覗き込んで声にならない声で一言「うん」と応えた

「…僕は……一体？」

まだ意識がもろろつとしながら訊いてくる　しかし、すっかり星羅と視線は合っていた

「…少しの間、呼吸…止まってたの」

何故だか涙が溢れ、嗚咽混じりに星羅は説明していた

「そっか……」

もろろつとした意識でむせび泣く星羅を気遣い、「もう、大丈夫だよ」と弱々しく微笑んでみせた

それに応えようと星羅も涙でぐしゃぐしゃな顔で笑んだ

それを見て安心した悠呂は、鉛のように重たい体を横向きから自分でなんとかあお向けに戻し大きく息をついた

星羅はそんな悠呂の横顔をみて涙を拭いながら「あのね」と続けた

「……悠呂を助ける方法をね……おじ様たちに教わったのよ」  
とぼつり話す

「おじ様？」

まだ、意識がはっきりしない頭で言われぴんとこないようで天井を見つめたまま悠呂は口を噤んでしまった

星羅はくすりと笑って応えてあげた

「あなたのお父様よ」

「とっ……さん」

悠呂は天井を見つめたまま呪文のように呟いた

どこか遠くで誰かが走ってくる音がしてくる

悠呂はこれもぼつとする頭のせいではないかと思っ

「悠呂くん！！ 無事か！？」

と声が聞こえてきた、幻聴か、はたまた夢なのかと疑い目を上げてみると薄暗い闇の中に淡い青が目に入った

「…………意識はとりとめたんだな？ 蘇生して何分くらいかわかるかな？」

傍にいる星羅に話し掛けながら清は悠呂の顔を覗き込んだ

薄闇で良くはわからなかったが、どうやら助けがきてくれたのだとわかると悠呂は安心してしまったのか再び目を閉じてしまった

「…………そんなに経ってないかと…………ついさっき目が覚めて…………悠呂！！」

星羅は再び目を閉じてしまっている悠呂を見て驚き動揺した

その視線を追って清は悠呂を見やり、にこりと笑うと落ち着いた声音で星羅に言った

「…………ん、大丈夫だよ ほら、胸を見てごらんゆっくりだけど上下に動いているだろ？ ちゃんと息はしている 助けがきたんで安心

して寝てしまったんだろっさ」

そう星羅に説明しながら清は眠ってしまった悠呂を背中に背負い始めた

星羅も慌てて駆け寄り、手助けをしてやる

「ありがとう、君は大丈夫かい？ 走れるか？」

「はい」

「じゃ、時間がない 行くぞ！」

清は悠呂を背負ってもと来た道を走り出した、星羅もそのあとを必死についていく

時折、大きな揺れがきてすでに脆くなっている天井から小さい瓦礫が降ってきてそのたびに足を止める星羅に清は振り返り叫んだ

「急げ！ 立ち止まってる場合じゃない！！」

「はい！」



清に強く促され、星羅は必死に後を追った

なんとかかました場所にたどり着くと

「清!!」

と呼ぶ声がして声の主を探すと、浅乃木が険しい顔で待っていた

「先輩!!」

そう駆け寄った清の背中に背負われる悠呂を見るなり安堵したような苦く厳しい表情をした

「大丈夫ですよ、眠っているだけですから」

「あ、ああ………さっきの出口は一応確保してあるが、この揺れだあのドアが開いている保障はない 急ぐぞ!!」

浅乃木はすぐに背を向け、自身が先頭にたって走り出す 清は星羅を振り返りひとつ頷くと後を追って走り出した……星羅もすぐにつづく

揺れは一向におさまらず、時には大きな瓦礫が三人を襲う――  
この研究所が崩壊するのも時間の問題だ、自然と三人の足は早くなる

先ほど差し込むんでおいた太い鉄のパイプは見事に折れ曲がり下に  
転がり落ちていた……  
保険にと噛ましておいた大きな岩の瓦礫がなんとか閉まらずに保た  
れていた

その隙間に躊躇なく浅乃木は自身の体をねじ込み、足で半壊の扉を  
こじ開けると叫ぶ

「清、行け!!」

「はいっ!!」

清は背中 of 悠呂を気遣いながらしゃがみ、浅乃木の足下をくぐり抜  
けドアの外に出きったとき再び大きな揺れに襲われる

ドアはこの大きな揺れに嫌な音を立て足で押さえる浅乃木を凄  
い力で押し戻し始めた

「う……が!!」

「おじ様!!」

「先輩!!」

何とか浅乃木は踏ん張り、迫りくるドアを力の限り押し戻すがその  
負荷は尋常ではなく、限界に達し始めていた 苦しい表情のまま星  
羅に顔を向けて叫んだ

「もう……もたん、は、はやく……こっちへ」

星羅は今にも泣きそうな顔をして戸惑っている

「ぐあ! は、はやく……するんだ!」

扉は軋む音をさせ今にも挟み潰す勢いだ

「先輩!!」

清は悠呂を背負いながら浅乃木の身を案じ叫んだ

「お嬢さん……はやく!!」

星羅は慌てて駆け寄ってきたので、浅乃木は力の限りドアを押し戻すつもりで足に力を入れるとその足にそつと手が触れた……

「な、なにを……」

星羅は優しく笑って首を横に振ると おじ様、ありがとうと呟いた

どんー

「なっ……」

星羅は力強く浅乃木の体を清のいる方へ押しやった

地面に倒れ込んだ浅乃木はすぐさま立ち上がり、ドアに駆け寄るが軋む凄惨な音とともにドアは勢いよく閉まってしまった……

大きな揺れと、天井から落ちてくる砂ぼこり……

そのなかで浅乃木も、清も、完全に閉まりきったドアをしばらく見つめていた……



## エピソード（前書き）

長くなりましたが、これで完結です

では、お楽しみ下さい

## エピソード

・・・数週間後・・・

はじめは、修理に出していたコラルロッドにまたがりエンジンをかけた。機体を浮上させると家の敷地から出ていつも通り慣れた通学路へと走らせる

大きな通りに入ると、コラルロッドに乗る学生達がずらりと機体を並べて通学していた

はじめもその流れに乗り、少しスピードを落としながらその群れに混じった

今日の風は一段と暖かく心地よかった、トレードマークだったつんつん頭をやめさらさらと青い髪が風に揺れる

「おう！はじめ」

横から声を掛けられ、そちらに顔を向けるといかにも改造コテコテのコラルロッドにまたがり、真ん中だけ白く染め髪はピンク色の巖

つい顔が居た

「おう！ ヤジ！ ういーす」

はじめが気安く挨拶をすると、厳ついピンク頭がニヤリと不気味に笑って、改造コラルロッドを寄せてきた

「なあ、いまからどっか行かね？ いい店みつけてよお」

はじめは、目を細めぶっきらぼうに応える

「行かねー」

「ああ？ 何でだよ！」

「行かねーつつたら行かねえの、じゃあな」

ヤジと呼ばれたピンク頭のコラルロッドを振り切ってははじめはスピードを上げた

他の学生達の間をぬって、先に進んでると例の研究所があった場所にさしかかった



研究所だった場所には、黄色いテープが張られいまだに警察が入りしめて物々しい雰囲気だ

はじめは無言で研究所跡を通り過ぎた

例の研究所跡の道を抜けると、学生達が真っ直ぐ進むのに対しはじめはひとり道を外れて緑の生い茂る敷地にコラルロッドを走らせる

緑が続く道を草木の匂いに包まれながらはじめは大きく息を吸った

その先に白い大きな建物が見え、そのなかに入って行った

入り口らしきところでコラルロッドを止め、エンジンをきり降りると機体のある地面に丸い円の切れ目が現れ自動的に地下へと吸い込まれていった

はじめは乱れた自身の髪を手ぐしでさつと整え、建物のなかに入っていく

「よう！ 気分はどうだ？」

いつものように鬱陶しいほど明るい声に悠呂は目を開ける　ベッド  
の横の椅子にはじめはがさつに座った

「……………毎日、毎日、来てくれなくてもいいよ」

うんざり顔ではじめをねめける

「なんだよ！　せっかく毎日けなげに見舞いにきてやってんのにその顔はよ」

悠呂はむっつりとした表情で手元のボタンを操作し、上体を起こした

「どっせ、学校に行かずサボる口実でここへ来たんでしょ……………」

「うっ……………」

痛いところを突かれてはじめは顔色をかえる

「大丈夫なの？　そろそろ中間テストが近いんでしょ？」

「う、まあ……そう、なんだけど」

はじめは苦し紛れに頭を掻いた

「だけど？」

悠呂のいたゞい視線を外して

ゆっくり立ち上がり、窓際に歩くと外を眺めながらはじめは静かな口調で先をつづけた

「……あんなことがあって、その……お前大丈夫なのかなって心配になっちまって……そう思ったらテスト勉強どころじゃなくてさ」

その言葉に、はじめの背中から視線を外した悠呂は俯いた

……あの日

気を失うように眠ってしまった悠呂は、何も知らずに助け出され病院へすぐに搬送されたがしばらく昏睡状態がつづき、目が覚めたときには白いベッドの上で数日が経っており、泣きながら覗き込む母親と母親の後ろで安堵したような、苦いような表情をした浅乃木の顔があつた

星羅が死んだという事実を知らされたのはそこから更に七日後のこと……

「う……嘘だ！」

「嘘じゃない」

悠呂は浅乃木を睨みつけた、その目を受け止めるように浅乃木も睨み返す

「嘘だ………だって」

「嘘じゃない………俺は………いや、俺達は星羅お嬢さんがその命をかけて助けてくれたようなものだ」

そう言って浅乃木は自身の膝に目を落とし、手をそっとのせた

「………それって、どういふこと」

浅乃木はじつと自身の膝に目を落としたまま、黙っていたがきゅっ

と膝の上で拳をつくると顔を上げ、悠呂を真っ直ぐみつめた

「聞くか……………彼女の最期を」

そう言つて浅乃木は星羅の最期を話し始めた

浅乃木の話す内容が全て何かの物語でおきた出来事のように、とても信じ難かった

でも、想像できてしまう……………ドア軋む音をさせて閉まっていく隙間から見えた星羅の最期の柔らかい笑顔……………

気がつけば、溢れんばかりの涙が布団を濡らしていた

今思う……………あんな短期間な出逢いだっただけ、自分は彼女の事が好きだった

彼女を助けるためにしたことなのに、その彼女を失ってしまった……………さらに、彼女の命と引き替えに自分たちが助かってしまった

「……………」

涙はとめどなく頬をつたい流れ、気がつけば息も出来ないほどに泣いていた

・・・くるしい、ああこのまま息をしなければこの気持ちを伝えるに行けるのに

そう思った瞬間、目の前が真っ暗になった

\*\*\*\*\*

「おい！ 悠呂、大丈夫か？」  
はっと我に返って顔を上げると心配そうな顔をしたはじめが覗き込んでいた

「う、うん、ごめん平気…大丈夫」

「あせった〜また、過呼吸になったんかと思った」

そう言って、はじめは大仰にベッドに前のめりに倒れ込んできた

「ごめん、もう大丈夫だから」

利き手とは違う手ではじめの肩に手をかけると、布団から顔を上げたはじめはその手をみるなり眉根を寄せて布団に声をこもらせながらぼつりと言った

「なあ、その腕本当に治さないのか？」

そう訊かれて悠呂ははじめの肩にのせた手を離し、自身の動かなくなった右腕をさすった

「うん」

「うんって、今の医学は進歩しまくってんだぞ？治せんのになんで？」

悠呂は右腕をきゅっと掴んで、薄く笑ってみせた

「これは、その進歩しすぎた医学に対してのあてつけなんだ」

「はあ？」

困惑顔のはじめに笑んで悠呂はつづける

「考えてもみて、本来、神でもなんでもない人間が勝手に神の領域に触れていいと思う？」

その質問にはじめは苦い顔をして質問で応えた

「それ、星羅たちのこと言ってるのか？」

「……………星羅たちみたいなお子供は創っちゃいけないんだよ」

そう言って悠呂は悲しそうに目を伏せた

はじめは黙りこむ

「僕は、その過ちを未来の人間に伝えたい！ 同じ過ちをおかして



欲しくないから……だから、この腕は治さない」

悠呂の力強く、晴れやかな表情をみてはじめはふっと笑んだ

「……おっ」

「命の尊さを……個人の尊厳を僕たちが伝えなきゃ」

はじめは腕を組み、楽しそうに笑って「おっ」と相づちを打った

「僕たちが生きる明日へ……」

完

## エピソード（後書き）

大変長らくご無沙汰しておりました、色々ありなかなか手がつけられず今になってしまいました（笑）

しかし、ようやくこの物語を終わらせてやれることが出来ました

私にとっては本当に処女作なので思い入れのある作品です

今までチヨロツと読んで下さった読者さま、小説のなんたるかを教えてくれた作家仲間の方々本当にありがとうございました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0592a/>

---

僕達が生きる明日へ

2011年6月10日12時43分発行